津市久居東鷹跡町

久居城下町遺跡
東鷹跡古墳

2008年10月

三重県埋蔵文化財センター

調査前状況（東から）

調査区全景（東から）

ＳＤ９遺物出土状況（西から）

ＳＫ２出土遺物

序

江戸時代の久居の町は、久居藩の城下町として、そして交通の要衝として栄えていました。また、藩校を抱えるなど地域の学問の中枢としての役割も担っており、こうした歴史が、旧久居城下町の中に現在も学校など多くの教育施設が存在するようになった基盤ともなっているといえるでしょう。

今回、久居農林高等学校の校舎改築工事に伴って行われた久居城下町の発掘調査の成果について報告できる運びとなりました。調査では江戸時代の武家屋敷の様子を垣間見ることのできる多くの成果を得ることができ、また、古墳という予想外に古い遺跡の発見もありました。工事によってこれらの遺跡が失われていくのは残念なことですが、よりよい教育環境を整備することは重要な課題であり、こうした中でも発掘調査を行い、記録を残せたことは幸いです。今後、教育の場でも、こうした歴史的な記録が活用されていくことを切に願っております。

最後になりましたが、調査にあたって多大なるご理解とご協力をいただきました地元の方々をはじめ、久居農林高等学校、津市教育委員会、三重県教育委員会学校施設室の方々に厚く御礼申し上げます。

平成20年10月

三重県埋蔵文化財センター
所長　　吉　水　康　夫

例　　言

1　本書は三重県津市久居東鷹跡町に所在する久居城下町遺跡・東鷹跡古墳の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は平成19年度久居農林高校特別教室棟改築工事に伴って行われ、調査にかかる費用は三重県教育委員会が負担した。

3　現地での調査は平成19年度に三重県埋蔵文化財センターが主体となって行った。発掘調査を行った面積は736㎡である。

4　発掘調査は下記の体制で実施した。

調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター調査研究Ⅰ課
主幹　長谷川哲也
技師　石井智大
臨時技術補助員　川崎志乃
土工作業受託者　東海アナース株式会社

5　本書の執筆は第Ⅱ章・第Ⅳ章第２節を長谷川哲也が行い、それ以外を石井智大が行っている。全体の編集は石井が行った。

6　現地における発掘調査や整理作業、そして本報告書の作成にあたっては、三重県立久居農林高等学校の方々をはじめ、下記の方々や機関にご指導・ご協力をいただいた。記して感謝いたしたい。（五十音順、敬称略）
藤澤良祐（愛知学院大学）、本堂弘之（明小学校）、津市教育委員会、三重県教育委員会学校施設室

7　久居城下町遺跡・東鷹跡古墳の発掘調査に関わる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。ご活用願いたい。

凡　　例

1　本書では、国土地理院発行の1:25,000地形図「津西部」・「津東部」・「大仰」・「松阪港」、旧久居市発行の1:2,500都市計画基本図などの地図類を用いている。

2　本書で用いた座標はすべて世界測地系にもとづいている。

3　本書で示す方位はすべて座標北を用いている。

4　本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄（編）1997『新版標準土色帖』（19版）日本色研事業株式会社に拠る。

5　本書では、以下のように遺構の略記号表記を使用している。
ＳＫ：土坑　　ＳＤ：溝　　ＳＥ：井戸　　ＳＺ：落ち込み・不明遺構

6　土層断面図中の斜線部分は地山を示している。

7　遺物実測図の縮尺は基本的に1/4としているが、土製品や鉄製品など一部の小型遺物については1/2としている。これらの縮尺は図中スケールにて明示している。

8　須恵器の実測図中では回転ヘラケズリの境界を実線、回転ヘラケズリの単位を１箇所切った実線で示している。なお文中でヘラケズリの方向を記述する時には、器種にかかわらず回転台に固定してヘラケズリを行った際にヘラを動かした方向（砂粒が動いている方向）を記している。

9　遺物観察表の凡例については、観察表の冒頭に記載している。

10　写真図版中の遺物に付した番号は、各遺物の報告番号と対応している。なお、遺物写真の縮尺は不同である。

目　　次

第Ⅰ章　はじめに …… 1
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 2
第３節　遺跡名と遺跡範囲 …… 2

第Ⅱ章　位置と環境 …… 5
第１節　地理的環境 …… 5
第２節　歴史的環境 …… 6

第Ⅲ章　調査の方法と基本層序 …… 10
第１節　現地調査の方法 …… 10
第２節　基本層序 …… 12

第Ⅳ章　古墳時代の遺構・遺物 …… 15
第１節　遺構 …… 15
第２節　遺物 …… 19

第Ⅴ章　中世の遺構・遺物 …… 23
第１節　遺構 …… 23
第２節　遺物 …… 24

第Ⅵ章　近世の遺構・遺物 …… 25
第１節　遺構 …… 25
第２節　遺物 …… 32

第Ⅶ章　調査のまとめと考察 …… 51
第１節　東鷹跡古墳の位置づけ …… 51
第２節　久居城下町の構造 …… 56
第３節　久居城下町遺跡出土の近世遺物 …… 61
第４節　結語 …… 66

図版目次

第Ⅰ章　はじめに
第１図　試掘坑位置図…… 1
第２図　久居陣屋跡・久居城下町遺跡範囲…… 3
第Ⅱ章　位置と環境
第３図　周辺遺跡分布図…… 7
第Ⅲ章　調査の方法と基本層序
第４図　調査区位置図…… 10
第５図　調査区全体図…… 11
第６図　調査区北壁・西壁土層断面図…… 13
第Ⅳ章　古墳時代の遺構・遺物
第７図　ＳＤ１実測図…… 16
第８図　ＳＫ７・14実測図…… 16
第９図　ＳＤ９実測図…… 17
第10図　ＳＤ９出土遺物破片分布状況図…… 18
第11図　須恵器実測図…… 20
第12図　土師器実測図…… 20
第13図　埴輪実測図…… 21
第Ⅴ章　中世の遺構・遺物
第14図　ＳＫ11実測図…… 23
第15図　山茶碗実測図…… 24
第Ⅵ章　近世の遺構・遺物
第16図　ＳＫ２実測図…… 26
第17図　ＳＫ６実測図…… 26
第18図　ＳＫ20実測図…… 26
第19図　ＳＫ10・ＳＤ19実測図…… 27
第20図　ＳＤ12実測図…… 29
第21図　ＳＤ５・15・16・17実測図…… 29
第22図　ＳＤ８実測図…… 30
第23図　ＳＤ13実測図…… 30
第24図　ＳＺ３断ち割り実測図…… 30
第25図　ＳＫ２出土遺物実測図①…… 33
第26図　ＳＫ２出土遺物実測図②…… 34
第27図　ＳＫ２出土遺物実測図③…… 35
第28図　ＳＫ２出土遺物実測図④…… 36
第29図　ＳＫ６・10・20出土遺物実測図…… 38
第30図　ＳＤ５・８・12・15・16・19
出土遺物実測図…… 40
第31図　ＳＺ３出土遺物実測図…… 43
第32図　遺構外出土遺物実測図…… 43
第Ⅶ章　調査のまとめと考察
第33図　東鷹跡古墳復元図…… 52
第34図　井辺八幡山古墳出土装飾付須恵器…… 54
第35図　雲出川下流域の後期古墳のグループ…… 55
第36図　近世遺構変遷図…… 57
第37図　『御家中地割図』…… 59
第38図　『藩士屋敷割図』…… 59
第39図　絵図・調査区位置対照図…… 60
第40図　ＳＫ２・ＳＫ10・ＳＺ３出土陶磁器産地
…… 63

表目次

第１表　遺構一覧表…… 44
第２表　古墳時代・中世遺物一覧表…… 45
第３表　近世土器・陶磁器一覧表①…… 46
第４表　近世土器・陶磁器一覧表②…… 47
第５表　近世土器・陶磁器一覧表③…… 48
第６表　近世土器・陶磁器一覧表④…… 49
第７表　近世土器・陶磁器一覧表⑤…… 50
第８表　金属製品・土製品一覧表…… 50
第９表　久居藩沿革略表…… 60
第10表　ＳＫ２出土陶器産地・器種一覧表…… 63

写真図版目次

巻頭図版１　（上）調査前状況（東から）
（下）調査区全景（東から）
巻頭図版２　（上）ＳＤ９遺物出土状況（西から）
（下）ＳＫ２出土遺物
写真図版１…… 69
（上）調査前状況（西から）
（下）調査区全景（西から）
写真図版２…… 70
ＳＤ１（北から）
ＳＤ１土層断面
ＳＫ７・14（南から）
ＳＤ９土層断面
ＳＤ９（西から）
ＳＤ９東側遺物集中部
ＳＤ９西側遺物集中部
ＳＺ18断ち割り
写真図版３…… 71
ＳＫ11（北から）
ＳＫ11土層断面
ＳＫ２土層断面
ＳＫ２遺物出土状況
ＳＫ２（東から）
写真図版４…… 72
ＳＫ10（北東から）
ＳＫ10土層断面
ＳＫ６（北から）
ＳＤ５（南から）
ＳＤ５土層断面
写真図版５…… 73
ＳＤ15・16・17（南から）
ＳＤ８（北から）
ＳＤ12（南から）
写真図版６…… 74
ＳＤ12土層断面
ＳＤ13（北から）
ＳＺ３断ち割り
作業風景
北東側配管部（東から）
東配管調査区（北から）
新農業土木棟
写真図版７　古墳時代遺物①…… 75
写真図版８　古墳時代遺物②…… 76
写真図版９　古墳時代遺物③・中世遺物…… 77
写真図版10　近世遺物①…… 78
写真図版11　近世遺物②…… 79
写真図版12　近世遺物③…… 80
写真図版13　近世遺物④…… 81
写真図版14　近世遺物⑤…… 82
写真図版15　近世遺物⑥…… 83
写真図版16　近世磁器見込み文様・銘款…… 84

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

三重県津市久居東鷹跡町にある三重県立久居農林高等学校（以下久居農林高校）では、老朽化しつつある施設の改善や、より一層の教育環境の整備の必要性から、平成18年度から平成19年度にかけて校舎改築工事が行われることになった。

久居農林高校は、その敷地全体が周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている久居城址と巽ヶ丘遺跡に含まれている。そのため、三重県埋蔵文化財センターでは平成18年度に工事予定地において範囲確認調査を行った。

範囲確認調査に際して試掘坑を設けた箇所は、第１図に示した通りである。このうち、南側のＨ・Ｉ・Ｊの試掘坑を設けた部分はすでにかなりの削平を受けており、遺構は全く遺存していなかった。しかしながら、Ａ・Ｄ・Ｅの試掘坑においては、ピットなどの遺構と考えられるものと少量の陶磁器などの近世後期の遺物が認められ、これらの試掘坑の周辺区域における久居城址関連の遺構・遺物の存在が予想された。この部分は、新たに農業土木棟の建設が予定されている区域であり、建物の建設による遺構の破壊は免れない状況であった。

そこで、工事に先立って三重県埋蔵文化財センターでは関係部局と協議を行なったが、新農業土木棟の建設は久居農林高校における授業の充実を図る上で必須であり、また遺構を破壊しないような工法をとることも不可能な状況であった。そのため、工事に先立って発掘調査を実施することによって記録保存を行うこととなった。

また、この新農業土木棟建設予定地には、範囲確認調査時は旧農業土木棟が建っており、18年度末にはその解体が発掘調査に先立って行われた。この旧農業土木棟は、コンクリート製の建物基礎が地下深く設置されていたため、新農業土木棟建設のためにはこの基礎を撤去する必要があった。基礎の撤去にあたっては、三重県埋蔵文化財センター職員の立ち会いのもと、周辺の遺構を極力破壊しないように注意深く作業を行った。

平成19年度には予定通り農業土木棟の建設を行うこととなったため、４月当初から発掘調査を行う運びとなった。調査体制については、例言に記した通りである。

なお、この発掘調査に関する文化財保護法等にかかる諸通知は以下のように行っている。

＜文化財保護法等にかかる諸通知＞

文化財保護法に基づく三重県文化財保護条例第48条第１項

平成19年２月19日付け、教委第19-69号（県教育長あて県知事通知）

文化財保護法第99条第１項

平成19年４月６日付け、教埋第14号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

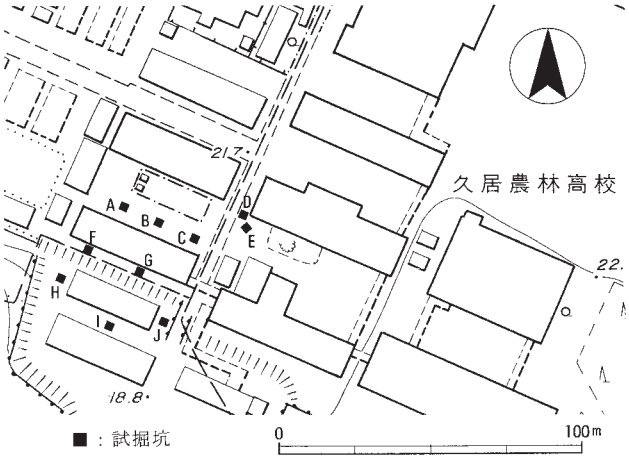
遺失物法にかかる文化財発見・認定通知

平成19年６月25日付け、教委第12-４-１号・12-４-２号（津南警察署長あて県教育長通知）

※県教育長から津南警察署長あてに通知

文化財保護法第97条第１項に基づく遺跡の発見通知（東鷹跡古墳）

平成19年６月25日付け、教埋第118号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長通知）



第１図　試掘坑位置図（1:2500）

第２節　調査の経過

現地での発掘調査は平成19年４月９日より開始した。４月16日には重機による表土掘削を開始し、６月１日には現地での作業を終了した。

現地調査の開始から終了までの調査進行の概略は、以下の調査日誌（抄）の通りである。

＜調査日誌（抄）＞

３月29日　久居農林高校・事業担当部局・土工作業受託者等と現地協議
４月９日　調査前状況写真撮影
４月16日　表土掘削開始
４月17日　ＳＫ10・ＳＫ11・ＳＤ９検出
４月23日　表土掘削完了
４月25日　グリッド設定
５月９日　ＳＤ９掘削開始、須恵器装飾付器台片出土。ＳＫ10掘削開始
５月15日　ＳＤ９遺物出土状況写真撮影
５月16日　ＳＤ９遺物取り上げ
５月21日　各遺構完掘状況の写真撮影
５月22日　全景写真撮影
５月23日　ＳＫ２完掘、ＳＺ３断ち割り
５月28日　北東側配管部の調査区の掘削開始。東側配管調査区の掘削・調査
５月29日　北東側配管部の調査区埋め戻し
５月31日　調査区の1/20平面図完成
６月１日　調査終了。機材撤収、現地引渡し

第３節　遺跡名と遺跡範囲

①「久居城址」の名称と範囲について

遺跡の名称　今回発掘調査を行ったのは、周知の埋蔵文化財包蔵地である「久居城址」の遺跡範囲内である。この「久居城址」の範囲内及びその周辺に江戸時代に形成されていた町は、西南端に存在する久居藩主の居館から北側・東側へ武家屋敷地・町屋敷地・寺院が順に広がっていく構造であったことが、絵図などから判明している(1)。こうした構造は、近世城下町の構造として一般的なものであろう(2)。また、久居藩設立当初の設計では藩主居館を含む町全体を濠や土塁などで厳重に囲うようになっていたようであるが、幕府の許可が下りず、結局こうした防御施設による囲繞は藩主居館周囲のみにとどまり、町全体の囲繞はごく曖昧なものとなった。これらの点からみれば、藩主居館以外の区域は、城の一部というよりは城下町としてみた方が妥当であるといえよう。

また、藩主居館は幕末まで板葺きの建物であったとされており、建築物としては城郭と呼べるような威容を備えているとはいいがたい。構造上は、土塁と濠によって囲まれた区画の内部に藩主居館の建物と行政施設とを配するもので、東側に正門を設けている。こうした構造などをとってみても、藩主居館を城郭とは呼びがたいであろう。このような藩主居館の様相は、５万石の大名居館ながら、１～２万石の小大名が居城の代わりに営んだ陣屋と呼ばれるものに近い(3)。

以上のような実態から見て、久居藩の藩主居館および周辺の街区を包括して久居城と呼ぶことにはやや問題があるものと思われる。これまでにも、藩主居館に対して周知の埋蔵文化財包蔵地名称である「久居城址」ではなく「久居陣屋」や「久居陣屋跡」などの呼称が用いられてきたが(4)、今後も実態とやや矛盾した周知の埋蔵文化財包蔵地名称を使用し続ければ、これらの呼称との混乱が生じる可能性もあろう。

そこで、本書では周知の埋蔵文化財包蔵地としての名称である「久居城址」を使用せず、藩主居館を「久居陣屋跡」、藩主居館以外の区域を「久居城下町遺跡」と呼称したい。それぞれの範囲は、第２図に示した通りである。本書で報告する発掘調査箇所は久居城下町遺跡の範囲内に位置していることから、本書の書名にも「久居城下町遺跡」の名称を採用した。

遺跡の範囲　これまでの周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲には、久居城下町のうち武家屋敷の範囲までしか含まれていない。久居城下町は、当初は武家屋敷

地の周囲に堅固な土塁や堀をめぐらせる設計であったことが知られており、藩主居館と武家屋敷地を中心に成り立っていたことは間違いないであろう。

しかしながら、実際に造営された久居城下町には武家屋敷地を取り囲む土塁・堀は部分的にしか造られず、また、先にも述べたように武家屋敷地の周囲には町屋敷地・寺社地が展開していた。町屋敷地・寺社地も城下町を構成する重要な要素であり、したがって、これらの範囲を含めて久居城下町遺跡として認識する必要性があろう。そのため、第２図では絵図の情報やこれまでの研究成果等に基づき(5)、これらの範囲も含めて図示している。

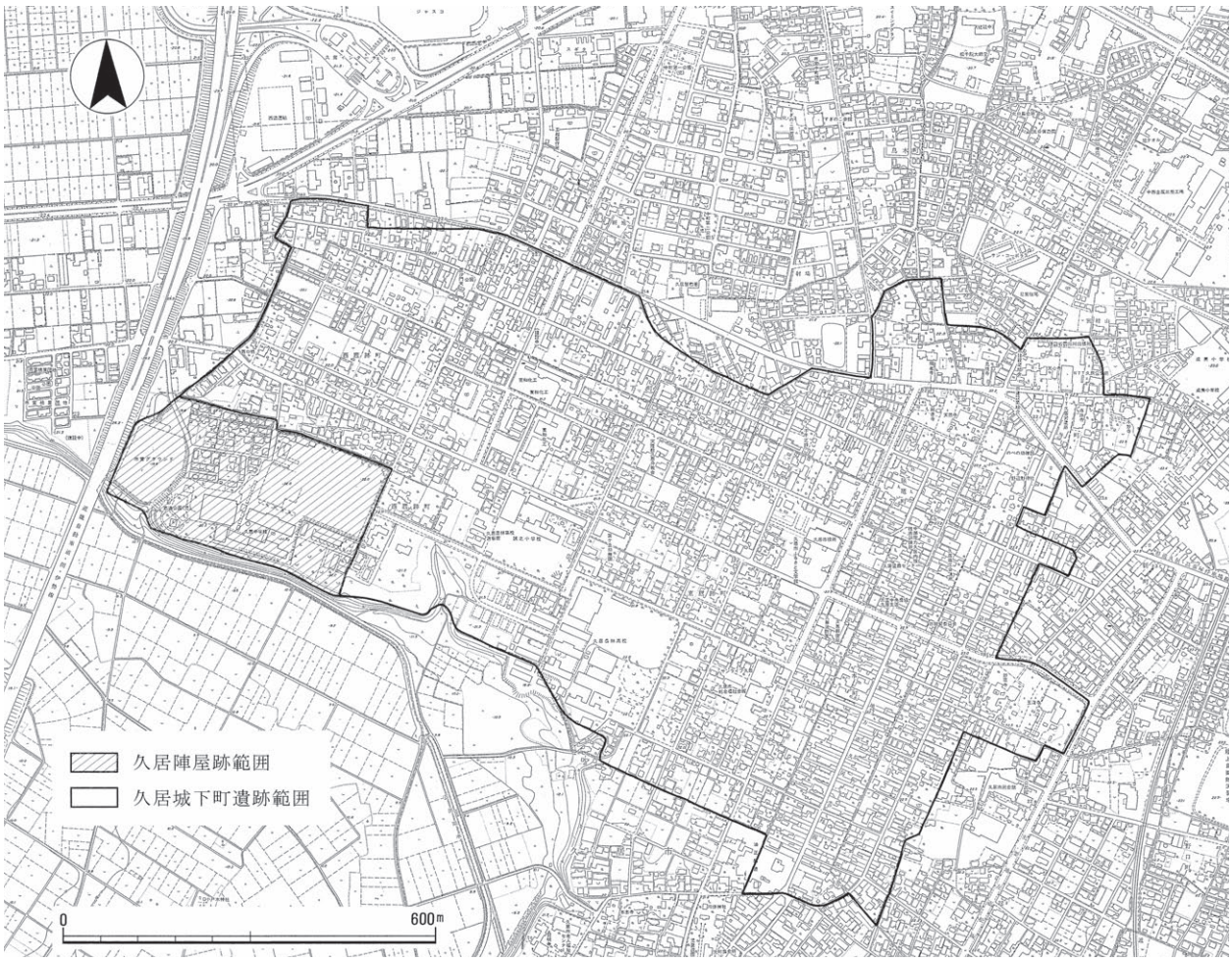
今後の対応　以上の点についての今後の埋蔵文化財行政上の対応については、以下のように津市教育委員会とも協議を行っている(6)。

名称については、周知の埋蔵文化財包蔵地である「久居城址」の内部に、藩主居館跡である「久居陣屋跡」ないしは「久居城跡」と、城下町跡である「久居城下町遺跡」の２者が含まれているという理解により、今後は以上のように両者を呼び分けていく。ただし、藩主居館跡に対して「久居陣屋跡」と「久居城跡」のどちらの名称を採用するかについては検討中である。

遺跡の範囲については、町屋敷地・寺社地を含む範囲を久居城下町遺跡として認識し、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲についても同等の範囲（第２図で示した範囲）へ拡大する方向で調整中である。

②新規発見の古墳の名称

今回の発掘調査において、後期古墳の周溝が検出された。本書で報告するように、当該期の古墳としては大型のものであると考えられ、出土遺物も注目される内容である。今後、当該地域の古墳の貴重な調査例として取り上げられることも多々あるものと



第２図　久居陣屋跡・久居城下町遺跡範囲（1:12000）

思われる。

しかしながら、この古墳はこれまで存在が知られていなかったものであり、固有の名称が付与されていない。この点は、今後この古墳が取り上げられる中で、呼称が人によって異なるなどの不都合を生じさせる恐れがある。したがって、この古墳を、所在する住所から「東鷹跡古墳」と命名し、調査終了後に文化財保護法第97条第１項によって新規発見の手続きを行った。該当する文書は平成19年６月25日付け、教埋第118号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長通知）である。

註

（１）樋田清砂1991「久居陣屋」『定本・三重県の城』　郷土出版社

（２）小寺武久1976「近世都市における武家屋敷と町屋敷」『日本建築の特質』太田博太郎博士還暦記念論文集　中央公論美術出版、村田修三1990「城下町　じょうかまち」『新編　日本史辞典』　東京創元社、玉井哲雄1997「近世城下町の都市空間とその特質－研究の視点と展望－」『関西近世考古学研究』Ⅴ　関西近世考古学研究会

（３）大石学1993「陣屋　じんや」『日本史大事典』第３巻　平凡社

（４）樋田清砂1991、三重県教育委員会（編）1984『三重の近世城郭』三重県埋蔵文化財調査報告書65

（５）「藩士屋敷割図」（梅原三千1922『藤影記』所載）、「久居町全図」（別所氏所蔵、三重県教育委員会（編）1984所載）、樋田1991などによる。

（６）対応が決まり次第、遺跡地図などにおいても順次対応を図っていきたい。

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　地理的環境

地質　三重県の地形の骨格は新生代の頃にほぼ出来上がった。そして、中新世[1]の中頃に海面が上昇し、現在の瀬戸内海付近を東西に続く内陸海ができた。これが「古瀬戸内海」とよばれるもので、榊原を中心とする地域に産する貝の化石は、この頃のものであると思われる。さらに、鮮新世[2]になると鈴鹿・布引山地が隆起して伊勢湾より大きい「古伊勢湖」ができた。

布引山地から久居榊原、そして羽野の西部にかけて第三紀層がのび、その東には、第四紀古層が戸木、久居から新家にかけての台地を形成している。遺跡はこの台地の東南縁に多く分布している。

久居を流れる榊原川、長野川、雲出川の流域は第四紀新層の沖積土で農業地帯となっている。

地形　久居市は、平成18年１月１日、周辺の津市、河芸町、芸濃町、安濃町、美里村、香良洲町、一志町、白山町、美杉村の２市６町２村が合併して、新しく津市となった。

津市久居は三重県のほぼ中部、津市の南部に位置する。中心市街地は、東部である雲出川北岸の河岸段丘上にある。西部は布引山地から東へ延びる二つの丘陵に挟まれた地域で、その中央を流れる榊原川に沿って集落が点在している。

久居城下町は、雲出川北岸の河岸段丘上に東西約1.2km、南北約0.5kmのほぼ長方形の家中屋敷地を設定し、その東側に二筋、北側に一筋の町屋を配した久居藩53,000石の本拠地である。

今回の調査区は、久居城下町内のやや中心に位置する地点である。現在の三重県立久居農林高等学校（津市久居東鷹跡町）の敷地内であり、旧農業土木棟が建っていたところである。調査区に立って南を見渡せば、眼下に雲出川が伊勢平野を横切って西から東に向かって流れている。

雲出川は、津市美杉町と奈良県御杖村の境にある三峰山にその源を発し、いくつもの渓流を合わせながら、津市白山町で山間の地を離れ、伊勢平野に出て、津市一志町、久居内の田園地帯を東に流れ、波瀬川、中村川を合わせ、津市香良洲町付近で伊勢湾に注いでいる。

交通　久居城下町を通る街道としては、奈良道と初瀬道が存在した。

奈良道は現津市美里町五百野で伊賀街道から分かれ長野川に沿って、久居戸木町を経て久居城下町に入っていた。城下を抜けてからは、雲出川を船で渡り川原木造（松阪市嬉野町）へ出た。そこからは中林の月本（松阪市三雲町）で伊勢参宮街道に合流した。わずか16kmの短距離で、しかも伊賀街道という津藩の重要な幹線道路から分岐する支道的な街道にもかかわらず、江戸時代の大阪・奈良方面からの伊勢参宮者の中には、この道をとる者も多かった[3]。道標や常夜灯に「右さんぐう　左ならみち」（二ノ町弘化三年（1846年）道標）などと彫り付けられていることからもそのことを窺うことができる。

初瀬道は、大和の長谷（現桜井市）から伊賀盆地を通って、青山峠を越えて伊勢に入る街道で、久居城下町を通っていた。

この２つの街道を受けて久居城下町の通行量は相当多かったようで、文政13年（1830年）のお陰参りでは、旅籠町で宿泊した者は一夜に1,400～1,500人に達したという[4]。

現在は、東西に国道165号、南北に近鉄名古屋線が通じ、久居・桃園の２駅があるほか、伊勢自動車道の久居インターがあり交通は便利である。

註

（１）新生代は、約6,500万年前から現代までの地質学上の区分であり、７期に細分される。中新世は2300万年～500万年前にあたる。

（２）新生代のうち、中新世に続く時期。約500万年～160万年前にあたる。

（３）平松令三1983「久居市」『三重県の地名』　平凡社

（４）平松令三1983

第２節　歴史的環境

久居城下町は近世の遺跡であるが、今回の発掘調査において古墳の周溝が新たに見つかった。これまでにも、雲出川沿いの河岸段丘上には古墳が点在し、かなり古い時代から人々の営みがあったことが指摘されている。

このため、古墳時代から江戸時代にかけての久居城下町の周辺の様子を概観してみることにする（第３図）。

①古墳時代

周辺の古墳・窯跡　現存する古墳は久居城下町の西側に広がる丘陵地帯に多い。以下、代表的な古墳・窯跡について述べたい。

［上野古墳群（34）］[1]　津市久居戸木町の上野遺跡内に存在する、古墳時代後期の比較的小型の古墳からなる古墳群である。墳形は円墳が中心で、昭和の初めには15基あったが、現在は６基を残すのみである。遺物としては、第11号墳より鉄刀片、第５号墳付近より陶棺片が出土し、その他金環３個、家形埴輪が採集されている。

なお、平成11年から旧久居市教育委員会によって行われた上野遺跡の調査では、弥生時代の竪穴住居跡（６棟）や方形周溝墓（１基）、古墳時代の竪穴住居跡（38棟）と後期古墳（７基）、奈良時代の掘立柱建物、中世の集落跡や堀と土塁など多くの遺構が見つかり、上野遺跡の存在する雲出川の河岸段丘上には、かつて多くの人々が居住し、生活が営まれていたことが明らかになった。

［善応寺１号墳（35）］[2]　上野遺跡のほぼ南側の雲出川左岸の段丘上に位置している。同川左岸で確認された唯一の前方後円墳である。前方部は西を向き、古墳主軸はほぼ雲出川の流れと平行する。葺石や円筒埴輪は見られず、墳丘外表施設はなかったと思われる。また、埋葬施設や副葬品は不明である。周辺にはかつて10数基を超える古墳があったらしいが、現在では１号墳を含め８基が残るのみで、中には横穴式石室をもつものもみられる。

［入田古墳］[3]　上記２つの古墳群よりさらに西側の津市久居庄田町入田地区に所在する。すぐ北側を雲出川の支流である榊原川が流れている。

墳形は円墳で、出土した須恵器からみると、６世紀後半に築造されたものと考えられる。

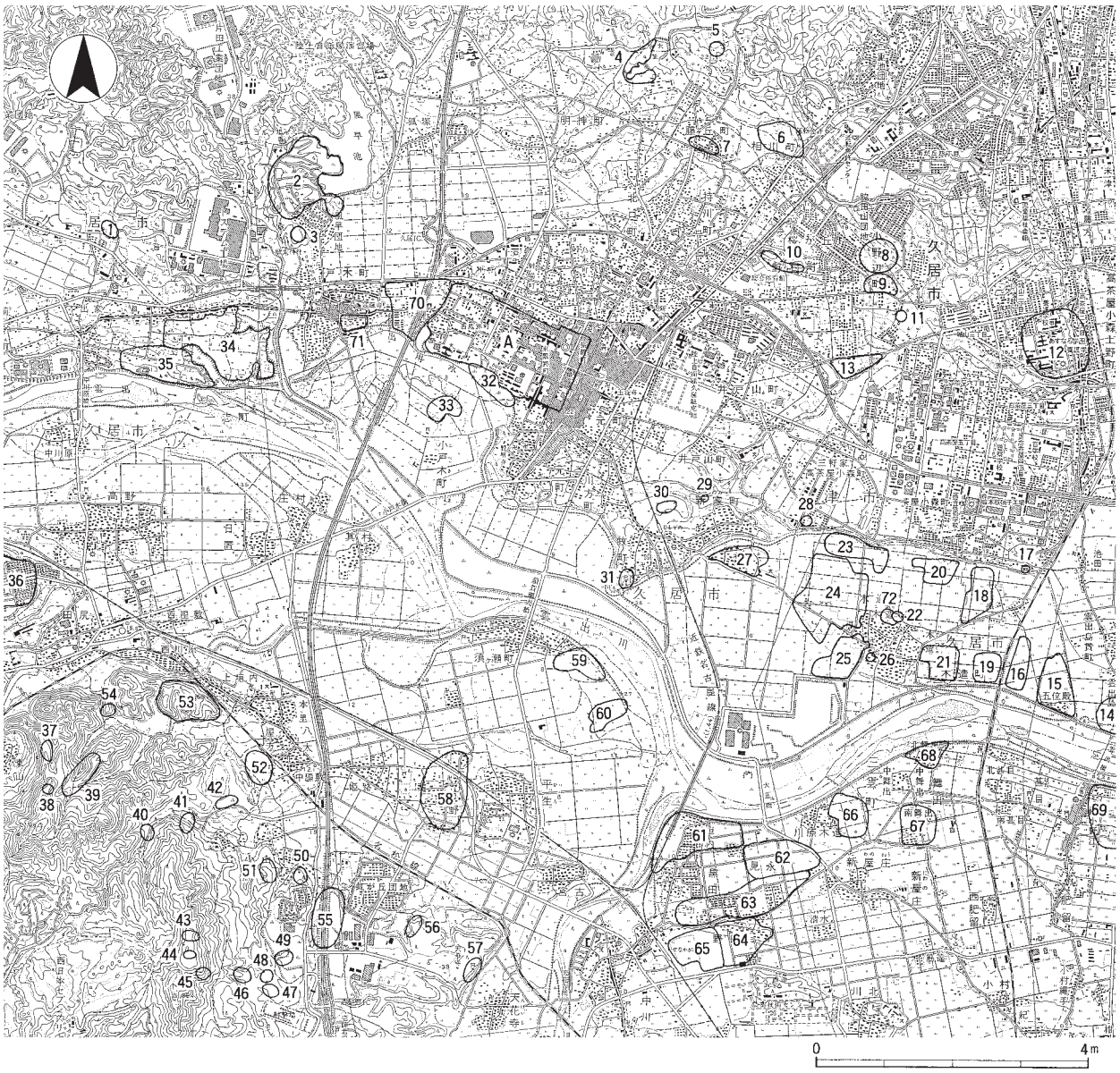
［上野山古墳群（36）］[4]　雲出川の右岸、津市一志町高野字上野に位置している。かつては60基ほどの古墳が存在し、人骨の残存する小石室や家形埴輪が発見されて著名となった。

1970年に調査が行われ、10～12号墳、13～15号墳の６基の古墳が調査された。各古墳からは須恵器・土師器や鉄製品などが出土した。そのうち、14号墳は周溝を伴う円墳で、造営時期は６世紀中葉と考えられる。

［西野古墳群（55）］[5]　雲出川右岸、松阪市嬉野町にある天花寺集落西の丘陵に所在する古墳群である。12基が確認され、２～５号墳、６号墳、７号墳が順次発掘調査された。特に注目されるのは５号墳である。それは径20m程度の円墳で６世紀中葉のものである。また、これらの古墳からは、歩揺付金銅製品片約300点、鉄器60点、須恵器42点などが出土した。そして、須恵器の中には、口縁部にいくつかの小さい蓋坏を持つ装飾付器台がある。

［藤ヶ丘古窯跡群（久居古窯跡群）（７）］[6]　調査区の北東、津市久居藤ヶ丘町に広がる丘陵地に所在した須恵器の窯跡で、全部で４基の窯が確認されている。1963年には３号窯の本体と灰原および４号窯の灰原の一部が、1968年には２号窯の灰原と４号窯の灰原がそれぞれ調査された。３号窯からの出土遺物は、ほとんど須恵器であるが、円筒埴輪や形象埴輪（人物）もわずかながら出土している。２号窯では須恵器のほかにわずかの須恵質円筒埴輪と土師器台付甕が、４号窯では須恵器のほかにわずかの土師器台付甕が出土している。２・４号窯の出土遺物は、形態・成形技法に差がなく、陶邑編年のＴＫ23型式に併行すると報告されており、県内で最も古い須恵器窯の一つとされている。

藤ヶ丘古窯跡群周辺の窯跡として、ほかに北方約１㎞の藤谷窯跡群と東方約２㎞の法ヶ広窯跡が知られている。ともに埴輪を主体として焼成している窯で、時期も５世紀末から６世紀初頭とみられている



A　久居城下町遺跡・東鷹跡古墳
1　宝録遺跡
2　風早池西南遺跡
3　宮山城址
4　大釜池古墳
5　藤谷窯跡群
6　相川西方遺跡
7　藤ヶ丘古窯跡群
8　城ノ越遺跡
9　東山神遺跡
10　野村高地古墳群
11　稲荷塚古墳
12　高茶屋大垣内遺跡
13　本宮遺跡
14　雲出島貫遺跡
15　挾間遺跡
16　五由出遺跡
17　四ツ野古墳
18　なめんだら遺跡
19　横造遺跡
20　二ノ坪遺跡
21　下木造遺跡
22　里中古墳
23　池新田遺跡
24　赤坂遺跡
25　井手ノ上遺跡
26　大塚山古墳
27　岸橋遺跡
28　小森山古墳群
29　行政古墳
30　新家北方古墳群
31　牧古墳群
32　巽ヶ丘遺跡
33　寺ヶ坂遺跡
34　上野遺跡
35　善応寺遺跡・善応寺古墳群
36　上野山古墳群
37　西山古墳群
38　長谷古墳
39　薬師谷古墳群
40　ヒジリ谷古墳群
41　塚穴口古墳群
42　中野山古墳群
43　二ノ谷口古墳群
44　北山口古墳群
45　小山口古墳群
46　の井ぞり古墳群
47　向イ谷古墳群
48　片谷古墳群
49　シャレ子古墳群
50　新出古墳群
51　小山古墳群
52　中野山古窯跡
53　西出山古墳群
54　菖蒲谷古墳群
55　西野古墳群
56　赤坂古墳群
57　小谷古墳群
58　片野遺跡
59　長畑遺跡
60　須賀瀬南北遺跡
61　黒田遺跡
62　鍛冶屋垣内遺跡
63　野田遺跡
64　片部遺跡
65　貝蔵遺跡
66　川原木造遺跡
67　舞出南遺跡
68　舞出北遺跡
69　前田町屋遺跡
70　戸木遺跡
71　戸木城址
72　木造城址

第３図　周辺遺跡分布図（1:50000）

が、地理的にみてこれらの窯跡も久居窯跡群と一連のものと考えられている。

［藤谷窯跡群（５）］[7]　藤ヶ丘古窯跡群の北東方向にあたる半田丘陵に所在している。出土遺物の大部分は円筒埴輪で、土師器、須恵器、陶棺などが少し含まれている。５世紀末から６世紀中葉のものと考えられる。

［徳居窯跡群］[8]　鈴鹿市と津市河芸町の境の丘陵地および津市河芸町田中川流域に分布する窯跡群である。今回の調査区からはかなり遠いが、県内最大の須恵器窯跡群であるため記載した。大正期に最初に報告され、今までに30基あまりが確認されているが、多くが未調査のまま消滅し、現在確認できるものは少ない。窯跡全体を概観すると、最も古い窯は津市河芸町字久知野の１号窯で６世紀前半に位置づけられる。その後、６世紀中葉前後の窯跡は認識されず空白期となる。再び生産が活発になるのは、31～34号窯・金井場窯に代表される６世紀後半から末頃である。そして、８世紀後半頃には窯業生産は幕を閉じるようである。

このようにみてくると、上記の調査地周辺の窯が活発に操業を行っていたのは５世紀末から６世紀前葉までである。

東鷹跡古墳の造営時期は、出土した須恵器から６世紀中葉と考えられ、その頃には窯の操業は少なくなっている。

②古代・中世

奈良時代には久居は一志郡に属することになるが、その中の何郷にあたるかは明確でない。

条里制は伊勢平野各地に施行されたが、当該地域では雲出川氾濫原上の木造村に「八ノ坪」の坪名が残されていて、施行の痕跡とみられるものの、河川の氾濫によって条里地割の存在はほとんど確認されず、また久居の大部分を占める台地上の地域にも条里遺構は検出されていないようである[9]。

平安時代に入ると各地に荘園が増加し始めるが、雲出川流域の低地では、伊勢神宮荘園がいくつか見られるものの、台地上では、七栗御園（久居庄田町）が確認されているのみである[10]。

室町時代以降は、榊原など久居西部において、安濃郡の有力国人長野氏が勢力を誇っていたが、織田信長の伊勢侵攻によって滅亡している。また、一志郡多気（津市美杉町）に本拠地をもつ伊勢国司北畠氏は、その一族である木造氏をして木造村（津市久居）に館を置いて久居に進出していた。しかし北畠・木造両家の間柄は良好とは言えず、度々衝突が起きている。とりわけ、明応６年（1497年）・文亀３年（1503年）には木造城（72）での両者の合戦が行われている。北畠氏も織田信長の伊勢侵攻によって衰退の一途をたどっている。その後の天正12年（1582年）には、豊臣秀吉配下の蒲生氏郷軍と木造具政との攻防が戸木城（71）（具政は木造城を出て戸木城に移る）を中心として行われ、最後に木造具政が引退して、久居は豊臣秀吉政権下に組み入れられた。

③近世

豊臣秀吉政権下の久居は、支配者がしばしば交替し、その支配地域も交錯し、不安定な状況が続いた。しかし、江戸幕府による幕藩体制が確立されると、慶長13年（1608年）の藤堂高虎による安濃津城入城以降、大部分が藤堂氏の津藩領となった。

久居藩がここに置かれることになったのは、津藩主第２代の藤堂高次が隠居するにあたり、323,000余石のうち、家督を継ぐ長子高久には270,000余石を、次子高通には50,000石を、３子高堅には3,000石を配当することとして、これを幕府に願い出て許されたことに始まる。寛文９年（1669年）９月29日のことである[11]。これによって高通は野辺村に館を構え、ここを「久居」とよんで、津藩の支藩となったが、宝永２年（1702年）、高通の子高敏は宗家津藩の後継となったので、高通の弟高堅が久居藩を継承した。このため高堅に分けられていた3,000石も久居藩に吸収され、53,000石となって、明治維新を迎えている。

久居城下町　久居城下町の中心地域を構成する久居藩家中屋敷地は、東西約1.2km、南北約0.5kmの地域で、そのうち西南角の8,500坪余の藩主御殿を除く土地が各藩士に割り当てられた。家中屋敷内での配置状況をみると、筆頭家老の藤堂源助を藩主御殿のすぐ隣に配置しているほか、重臣はほとんどが表門から御殿に通じる大手町道路の両側に配置されてお

り、切米取の下級武士[12]は周辺部に居住している。この地域は下大手町・中大手町・下中町・下北町・南町（現東鷹跡町）・上大手町・中中町・中北町・上中町・上北町（現西鷹跡町）に分かれる。『藤影記』に所載されている『藩士屋敷割図』には201名分の屋敷地が見られるが、そのうちの20名前後は江戸屋敷詰めとなって、久居には屋敷だけがあったと推定される。その後、武家屋敷は207戸ほどに増えたようであるが、町並み自体に大きな変化はなかったようである[13]。

明治維新後もそれほど変化はなく、藩校が小学校となった程度である。その後、県立農林学校（明治37年創立）や県立一志実業女学校（大正10年創立）が置かれたり、藩主御殿跡が公園になったりして、次第にその姿を変えていった。しかし大きな変革は戦後のことで、それまでは武家屋敷の景観を保つ箇所が多かった。

今回の発掘調査場所は、安政年間のものと推定される『藩士屋敷割図』を、安政５年（1858年）の『家中分限帳』も加味して現在の都市計画図と重ね合わせたものを参考にすれば、幕末の頃には平井庄兵衛（200石）の屋敷であったと思われる[14]。

藩士については、分封以前、高通につけられていた者が約80余人、すべて江戸に居住していた。その後、久居支藩ができ、江戸で新規に採用された者が41人（そのうち、19人が江戸詰め、22人が国詰めとなっている）が加わっている。後に伊勢・伊賀の侍の中から藤堂源助をはじめ70人くらいが加えられて、合計200人程度になったようである。先に述べたように、『藩士屋敷割図』には201人の屋敷があり、その後に207戸にふえている。したがって最初は200余人であったと思われるが、時代を経るにしたがって町外の町人の家に住む藩士もふえてき、幕末には300人弱となったようである。藩士の構成をみると、筆頭家老藤堂源助の2,000石をはじめ相当に高禄藩士が多く、広範囲に広がっている。一方、下級武士では10石から20石位の180余人が一番多い[15]。平井庄兵衛は中級武士にあたるであろう。

註

（1）久居市史編纂委員会1972『久居市史』上巻　久居市役所総務課

（2）伊勢野久好2005「善応寺山１号墳」『三重県史』資料編考古１　三重県

（3）久居町教育委員会1965『一志郡久居町「入田古墳」発掘調査報告』、伊勢野久好2005「入田古墳」『三重県史』資料編考古１　三重県

（4）一志町・嬉野町遺跡調査会1989「上野遺跡・上野山古墳群」『「一之郡」の考古学』、伊勢野久好2005「上野山古墳群」『三重県史』資料編考古１　三重県

（5）一志町・嬉野町遺跡調査会1991『天花寺山』、和氣清章2005「西野古墳群」『三重県史』資料編考古１　三重県

（6）久居古窯址群発掘調査団1968『久居古窯址群発掘調査報告』、村木一弥2005「久居窯跡群」『三重県史』資料編考古１　三重県

（7）津市埋蔵文化財センター2000『津市埋蔵文化財センター年報』４、村木一弥2005「藤谷窯跡群」『三重県史』資料編考古１　三重県

（8）藤原秀樹2005「徳居窯跡群」『三重県史』資料編考古１　三重県

（9）平松令三1983『三重県の地名』　平凡社

(10) 平松令三1983

(11) 梅原三千1922『藤影記』

(12) 幕府、大名の家臣で知行地を持たない少禄の家臣。

(13) 久居市史編纂委員会1972

(14) 樋田清砂1991「久居陣屋」『定本・三重県の城』　郷土出版社

(15) 久居市史編纂委員会1972

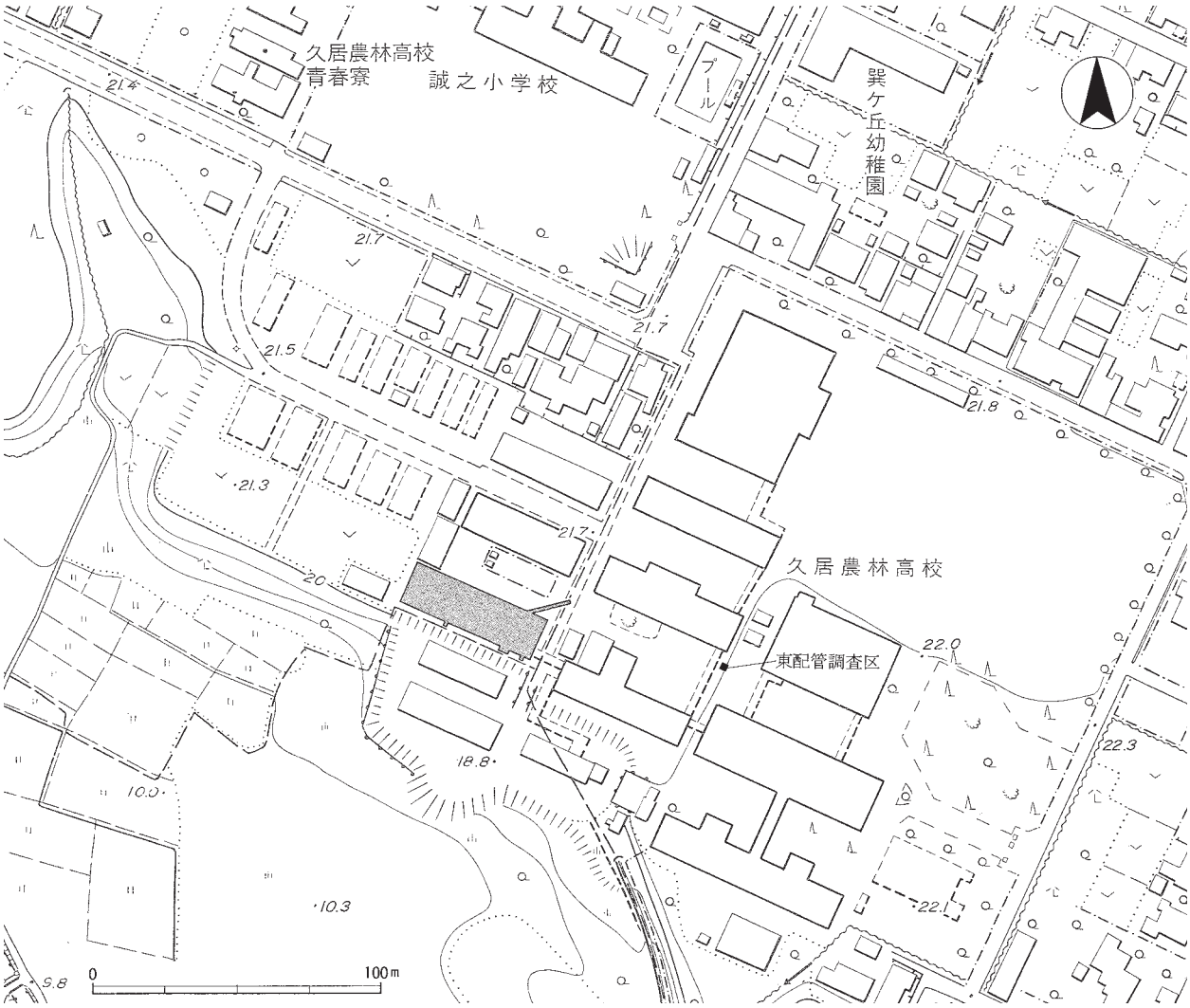
第Ⅲ章　調査の方法と基本層序

第１節　現地調査の方法

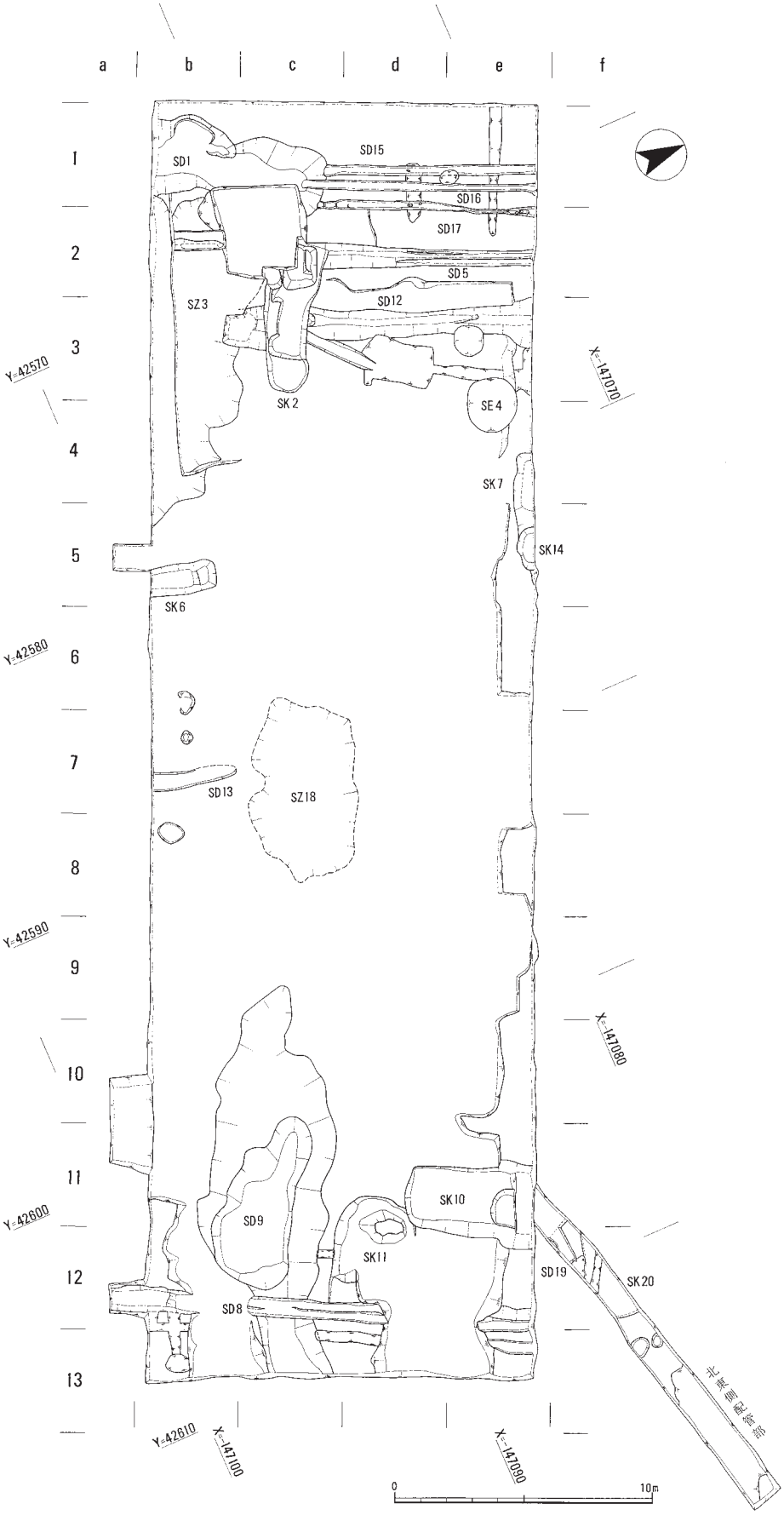
調査区の設定と部分呼称　調査区は、農業土木棟の建設によって影響を受ける範囲を中心に設定した（第４図）。中心的な調査区は、ほぼ長辺49m、短辺15mの長方形である。付随して設置される配管や排水溝などによって影響を受ける部分についても調査を行っているため、南側に３箇所の突出した部分がある。

調査時には、中心となる調査区を調査区①、調査区①の南側へ突出する配管・排水溝設置予定箇所部分を、西側から順に調査区②・③・④と呼んでいた。本書では、煩雑さを避けるために調査区①～④については特に個別の呼称を設けない。単純に「調査区」と述べる場合には、調査区①～④全体を指している。

また、中心となる調査区から北東側へ向かって配管工事が予定されていたため、その部分については幅1.5m、長さ15mにわたって調査区を設定し、調査を行った。この配管部分の調査区は、調査時には調査区⑤と呼んでいたが、本書の中では便宜上「北東側配管部」と呼称したい（第５図）。この部分については、配管工事の性格上、遺構面より大幅に深く掘削することがないため、遺構の掘削は部分的にとどめている。



第４図　調査区位置図（1:2500）



第５図　調査区全体図（1:250）

なお、新農業土木棟建設予定地部分の調査区からは東へ60mほど離れているが、もう１箇所の配管工事が行われる部分についても同時に調査を行っている（第４図）。この調査区については、調査時には調査区⑥と呼称していた。本書の中では、便宜上「東配管調査区」と呼称したい。この調査区は１×1.5mと小規模で、また既設の配管が存在したために途中で掘削を中止しており、遺構・遺物とも検出できなかった。

グリッドの設定　調査区を設定した後に、調査区全体にわたって４×４mの大きさのグリッドを設定した（第５図）[1]。

グリッドは、国土座標の方位軸に沿わせずに、調査区の形状にあわせて任意で設定している。各グリッドには南から北へ向かってａから順にアルファベットを、西から東へ向かって１から順に数字をふり、このアルファベットと数字の組み合わせによって各グリッド名を表した。表土掘削、遺構検出段階において出土した遺物はこのグリッドごとに取り上げを行っている。

掘削　現地調査における掘削作業は、まず近代の造成土を重機で除去することから始めた。調査区内にはもともと旧農業土木棟が建っており、その建設や、解体時の基礎の除去などによって地盤は大きく影響を受けており、調査区内についてはほとんどが地表下1.3m程度まで近代以降の造成土が堆積していた。これらの造成土を地山直上まで重機で除去した後に、人力で遺構検出作業を行った。そして、その後に各遺構を人力で順次掘削していった。

遺構番号の付与　今回の調査では、すべての種類の遺構に、通し番号で１から順に遺構番号を付与した。表記時には、遺構番号の前に、凡例で示したようにＳＫ、ＳＤなど遺構の種類ごとの略称を付している。

ただし、検出時には遺構と撹乱の区別が付けがたかったため、遺構番号を付与したものの、掘削によって近代以降の撹乱と判明したものもある。それらについては本文中には記載せず、遺構一覧のみに示している。

なお、本書で撹乱としたものは、近代以降の掘り込みや構造物の痕跡などである。埋土の状況からは久居城下町に関わる遺構と判別しがたいものも存在するが、ガラスやレンガ、コンクリートなどを包含する点や、近世遺構との切り合い関係を主たる判断基準とした。したがって、ガラスやレンガなどを包含していなかったり、近世遺構との切り合い関係が認められなかったりした場合には、時期決定可能な遺物の出土が少なくとも遺構として報告している。

註

（1）ただし、北東側配管部と東配管調査区には、掘削時期や規模の関係からグリッドを設定していない。

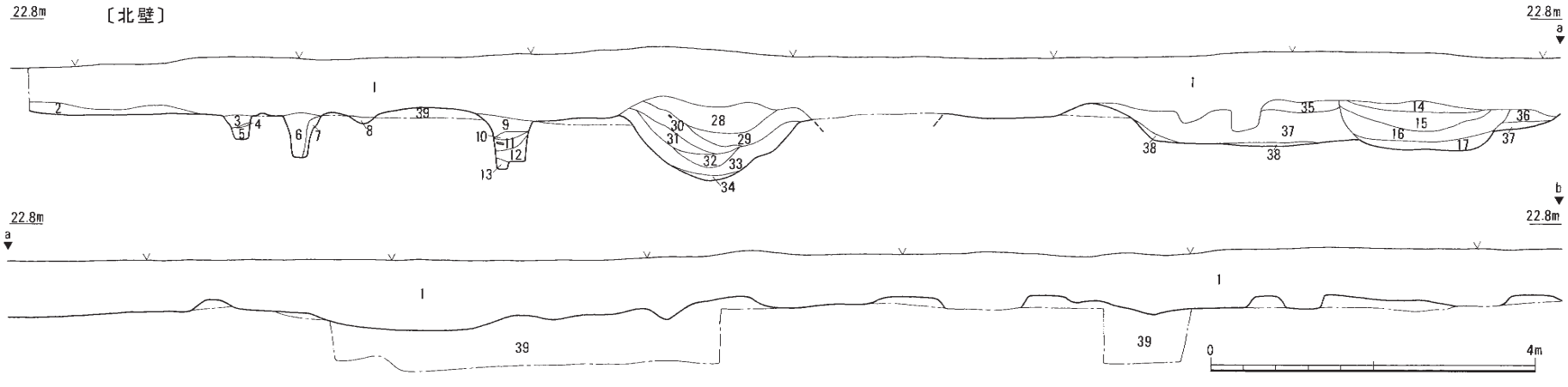
第２節　基本層序

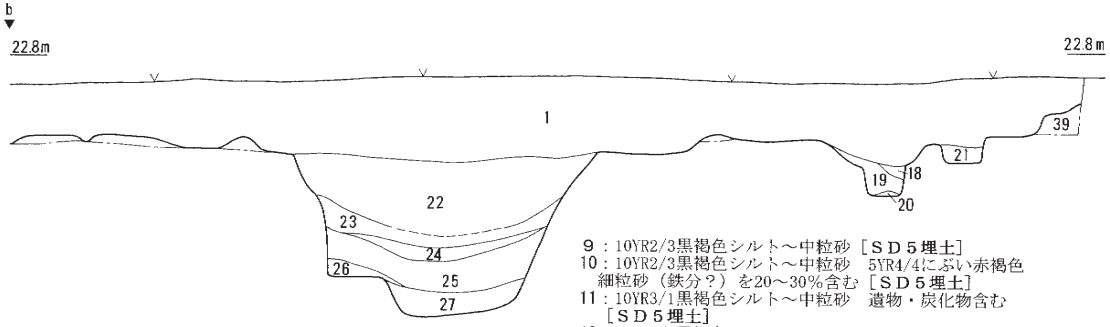
調査区は、全体に近代以降の改変を大きく受けている。したがって、地山上に堆積した堆積物はほぼ除去され、地山直上に近代以降の造成土が直接積まれている状況であった。ただし、調査区西側については建造物などによる影響があまり及んでいなかったために比較的残りがよく、削平を受ける以前の堆積状況を一部で確認できた。

以下、調査区北壁と西壁の情報を中心に、調査区付近における基本層序について述べていきたい。

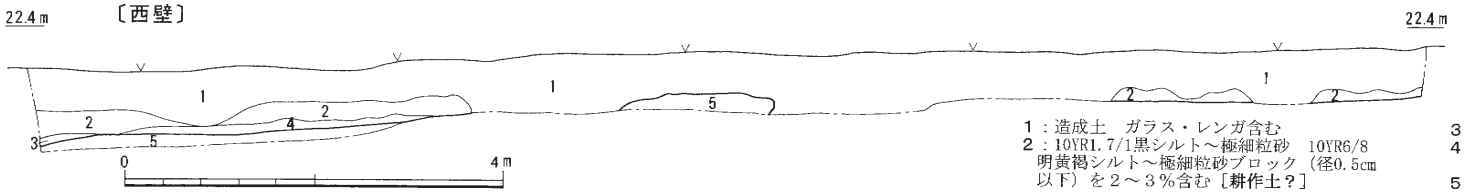
北壁（第６図）　調査区の北壁に関しては、全体的に標高21.7～22.0mほどの高さまで地山が認められる。調査区中央部では、標高21.0m程度まで近代の削平を受けているが、北壁付近については調査区中央部より削平を被った度合いが低いといえる。また、後述の西壁の状況から見ても、大きく地形が変わるほどの改変は受けていないものと考えられる。したがって、北壁東端での地山高が22.7m、北壁西端での地山高が22.3mであることを考えれば、調査地においては緩やかに西へ向かって低くなっていた可能性はあるものの、東西方向にはあまり急激な地形の起伏はなかったものと考えられる。

ただし、地山直上には全体にわたって近代以降の造成土が直接堆積している（第１層）。この近代以降の造成土には、ガラスやレンガ、コンクリートなどの他に、明治時代から太平洋戦争中にかけての陶磁器類も多量に含まれていた。調査区近辺では、地





1：造成土
2：10YR1.7/1黒シルト～極細粒砂　10YR6/8明黄褐シルト～極細粒砂ブロック（径0.5cm以下）を２～３％含む［耕作土？］
3：10YR3/1黒褐色シルト～中粒砂［ＳＤ15埋土］
4：2.5Y4/6オリーブ褐色シルト［ＳＤ15埋土］
5：10YR3/1黒褐色シルト～中粒砂　10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック（径0.2～0.5cm）を３％含む［ＳＤ15埋土］
6：10YR2/2黒褐色シルト～中粒砂［ＳＤ16埋土］
7：10YR2/2黒褐色シルト～中粒砂　2.5Y5/4黄褐色シルトブロック（径１～３cm）を30%含む［ＳＤ16埋土］
8：2.5Y3/2黒褐色シルト～中粒砂　2.5Y4/6オリーブ褐色シルトブロック（径0.2～0.5cm）を10%含む［ＳＤ17埋土］
9：10YR2/3黒褐色シルト～中粒砂［ＳＤ５埋土］
10：10YR2/3黒褐色シルト～中粒砂　5YR4/4にぶい赤褐色細粒砂（鉄分？）を20～30%含む［ＳＤ５埋土］
11：10YR3/1黒褐色シルト～中粒砂　遺物・炭化物含む［ＳＤ５埋土］
12：10YR2/3黒褐色シルト～中粒砂　10YR4/6褐色シルトブロック（径0.2～１cm）を30%含む［ＳＤ５埋土］
13：10YR2/3黒褐色シルト～中粒砂［ＳＤ５埋土］
14：2.5Y3/1黒褐色シルト～粗粒砂　炭化物含む［ＳＫ14埋土］
15：14層と同じ　10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック（径１～３cm）を５%含む［ＳＫ14埋土］
16：14層と同じ［ＳＫ14埋土］
17：10YR2/1黒色シルト～中粒砂　10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック（径0.2～２cm）を10～20%含む［ＳＫ14埋土］
18：10YR3/1黒褐色シルト～中粒砂［ＳＤ８埋土］
19：10YR2/2黒褐色シルト～中粒砂　10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック（径0.2～１cm）を30%含む。炭化物含む［ＳＤ８埋土］
20：10YR3/2黒褐色シルト～中粒砂［ＳＤ８埋土］
21：10YR2/2黒褐色シルト～中粒砂　10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック（径0.2～１cm）を20%含む
22：10YR2/2黒褐色シルト～中粒砂　10YR5/8黄褐色中粒砂・5Y4/8赤褐色シルト～中粒砂・10YR6/3にぶい黄橙色シルトのブロック（径0.2～１cm）を10～20%含む。炭化物含む［ＳＫ10埋土］
23：22層と同じ　含まれるブロックの径が0.2～0.3cm。ブロックの含有量が30～50%［ＳＫ10埋土］
24：22層と同じ　含まれるブロックの径が0.2～５cm。ブロックの含有量が50%以上［ＳＫ10埋土］
25：22層と同じ　ブロックの含有量が20～30%［ＳＫ10埋土］
26：10YR3/1黒褐色シルト～粗粒砂　7.5Y5/8明褐色シルト・2.5Y6/4にぶい黄色シルトのブロック（径１～３cm）を40～50%含む。炭化物含む［ＳＫ10埋土］
27：10YR2/1黒色シルト～中粒砂　炭化物・遺物含む［ＳＫ10埋土］
28：7.5YR3/1黒褐色シルト～粗粒砂　10YR4/6褐色シルトブロック（径0.4～１cm）を20%含む。礫（径１～３cm）を少量含む［ＳＤ12埋土］
29：10YR3/3暗褐色シルト～中粒砂［ＳＤ12埋土］
30：28層と同じ　ブロックを30%、礫を５%含む。遺物含む［ＳＤ12埋土］
31：10YR2/2黒褐色シルト～粗粒砂　炭化物含む［ＳＤ12埋土］
32：10YR2/1黒色シルト～中粒砂　礫（径１～３cm）を５%含む［ＳＤ12埋土］
33：10YR3/2黒褐色シルト～中粒砂［ＳＤ12埋土］
34：10YR2/1黒色シルト～中粒砂　7.5YR5/8明褐色シルト～細粒砂ブロック（径0.2～0.5cm）を30%含む［ＳＤ12埋土］
35：5Y2/1黒色シルト～中粒砂　5Y5/4オリーブ色シルトブロック（径0.2～0.5cm）を３～５%含む［ＳＫ７埋土］
36：2.5Y4/2暗黄灰シルト～粗粒砂　2.5Y3/1黒褐色シルト～中粒砂ブロック（径１～２cm）を３～５%含む［ＳＫ７埋土］
37：2.5Y2/1黒色シルト～細粒砂　均質［ＳＫ７埋土］
38：2.5Y2/1黒色シルト～細粒砂　2.5Y6/6明黄褐シルトブロック（径0.2～0.5cm）を10～20%含む　均質［ＳＫ７埋土］
39：10YR6/4にぶい黄褐色シルト［地山］



1：造成土　ガラス・レンガ含む
2：10YR1.7/1黒シルト～極細粒砂　10YR6/8明黄褐シルト～極細粒砂ブロック（径0.5cm以下）を２～３%含む［耕作土？］
3：2.5Y2/1黒シルト～中粒砂
4：10YR2/3黒褐シルト～極細粒砂　2.5Y4/4オリーブ褐シルトと混じりあう
5：10YR5/4にぶい黄褐シルト［地山］

第６図　調査区北壁・西壁土層断面図（1:80）

山が比較的残存している部分についても、全体的に近代以降の削平は被っていると考えられる。

西壁（第６図）　西壁は、調査区の中で最も旧来の堆積状況をよく残している。最上層の近代以降の造成土の下には黒色土（第２層）が堆積している。この黒色土は東鷹跡古墳の周溝に堆積していた黒色土と基本的には同様の質のものである。ただし、細かい地山由来の明黄褐色土ブロックを含むことからみて、耕作土などとして撹拌を受けているものと考えられる。

この耕作土の下には、黒色土と地山との漸移層（第４層）がみられ、その下に地山である黄褐色土層が認められる。地山と黒色土との間には徐々に土色が変化していく漸移層が存在することから、地山部分については、黒色土堆積以降に人為的な撹乱や削平を被っていないものと考えられる。

しかしながら、西壁北端では地山高が22.3m、西壁南端では地山高が21.5mと、南北で0.8mほどの高低差が生じている。したがって、旧地形は北から南へ向かってやや低くなっていた可能性が高い。ただし、西壁付近以外ではそうした傾向は確認できていない。

そこで、付近の地形を見てみると、調査区の西には北へと入り込む谷地形が存在している。そして、調査区のすぐ南西にはこの谷地形の入り口部分を形成する段丘崖が存在する。こうした点から見れば、調査区全体が南へ向かって傾斜していたのではなく、調査区南西部分のみがこの段丘崖方向へ向かってやや落ち込んでいた可能性が高い。こうした旧地形の状況は、第Ⅶ章で述べるように、当該地における屋敷地の構造にも多少の影響を与えていたものと考えられる。

第Ⅳ章　古墳時代の遺構・遺物

今回の調査では、久居城下町に関する遺構・遺物の検出が予想されていたが、掘削を進めるにつれ、近世の遺構とは明らかに異なる、埋土が均質な黒色土で占められる遺構がいくつか検出された。埋土の堆積状況や、近世の遺構に切られていることなどからみて、久居城下町に関する遺構よりも古い時期の遺構であることが予測された。

こうした遺構については、掘削を行った結果、出土遺物などから古墳時代の遺構であることが判明した。本章では、これら古墳時代の遺構・遺物について述べたい。

第１節　遺構

古墳時代のものと考えられる遺構としては、溝などが検出されている。それらの遺構のうちいくつかは、調査の結果、１基の古墳の周溝の一部であると推定されるに至った。第Ⅰ章で述べたように、この古墳を東鷹跡古墳と命名している。ただし、遺構検出時には各遺構間の関係が不明瞭であったため、それぞれ別遺構として単独の遺構名を付与し、掘削を行っている。本節では、当初の遺構名に従って個別に報告を行う。東鷹跡古墳の墳丘復元案と各遺構との関連については、第Ⅶ章第１節にて詳述する。

ＳＤ１（第７図）　ＳＤ１はほぼ南北方向にのびる溝状の遺構である。最大幅は2.9m、最大深さは0.8mであるが、北側に向かって徐々に浅くなり、調査区中程で途切れている。側壁の立ち上がりは比較的緩やかであるが、西側ではなだらかに立ち上がらず、抉り込まれたようになっている。ただし、この抉り込み付近では遺構埋土と地山の境界が不明瞭であり、人為的な掘り込みではなく、樹木根の痕跡等である可能性もある。埋土は全体的に均質な黒色土で占められており、漸移的な埋没状況を示している。ただし、最上層付近については細かな地山由来の黄褐色土ブロックを含んでおり、後世の耕作土などである可能性がある。

ＳＤ１からは、最上層付近から近世の磁器がごく少量出土したものの、確実にこの遺構に伴うと判断できる遺物の出土はなかった。したがって、明確な所属時期は不明である。ただし、近世の遺構のＳＤ15～17に切られており、近世より古い時期の遺構であると判断されることや、埋土の状況が後述のＳＤ９と類似することなどから、本節の報告に含めた。

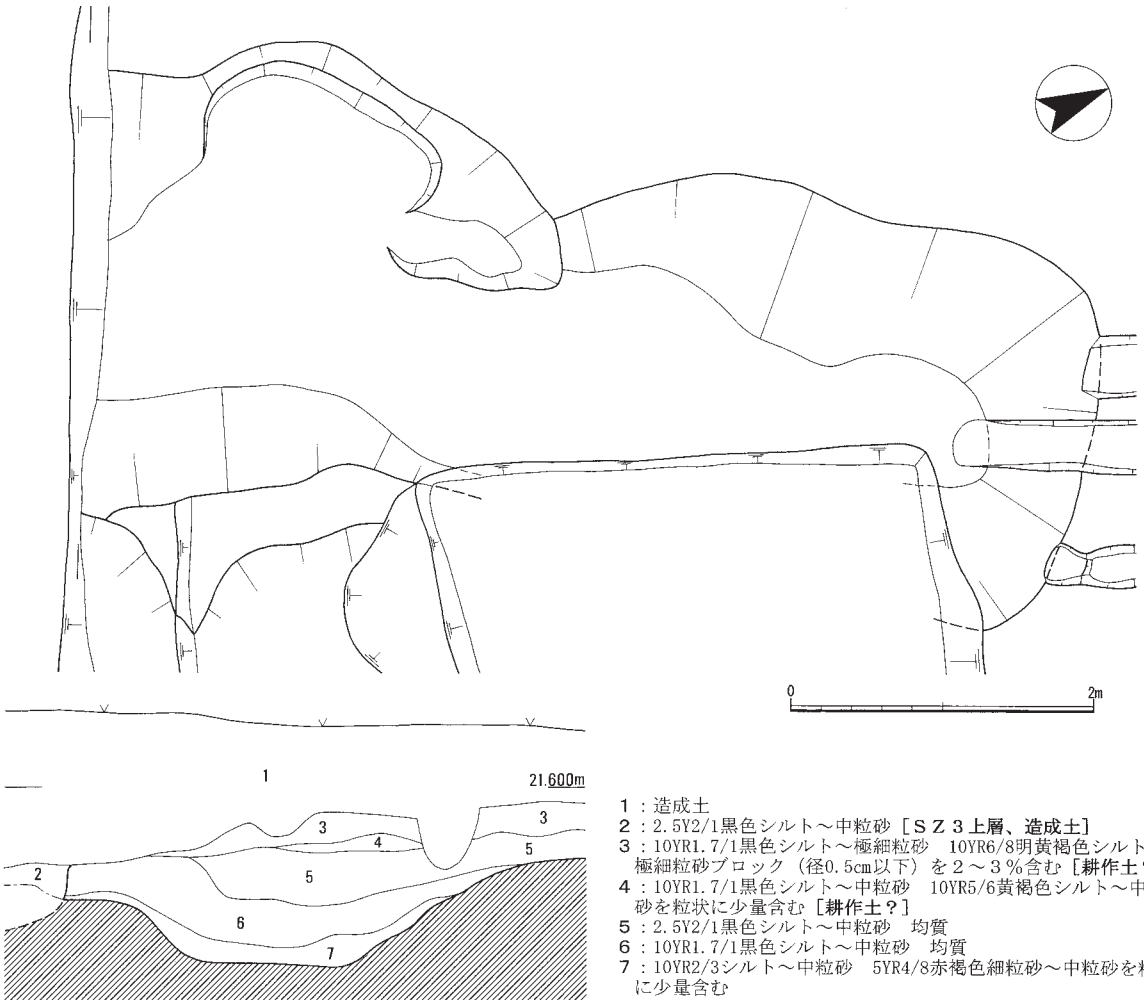
ＳＫ７（第８図）　北壁際で検出された遺構である。北側は調査区外へとのびている。確認できる範囲では、長さ5.8m、最大深さは0.3mである。ただし、調査区内で検出できた部分については削平によって浅くなっており、削平の及んでいない調査区北壁の土層断面で確認すると、元の深さは0.6mほどあったと見られる。

埋土は均質な黒色土で占められており、ＳＤ１や後述のＳＤ９と類似した埋土であるといえる。遺物の出土はなく、時期は不明である。ただし、近世の土坑であるＳＫ14に切られている点からみて、近世以前の遺構であると考えられる。

ＳＤ９（第９図）　調査区西壁から東へ向かってのびる幅広の溝で、直線的な溝ではなく、やや弧を描く。古墳の周溝と考えられる。東端は近代の削平を大きく被っており、途切れている。

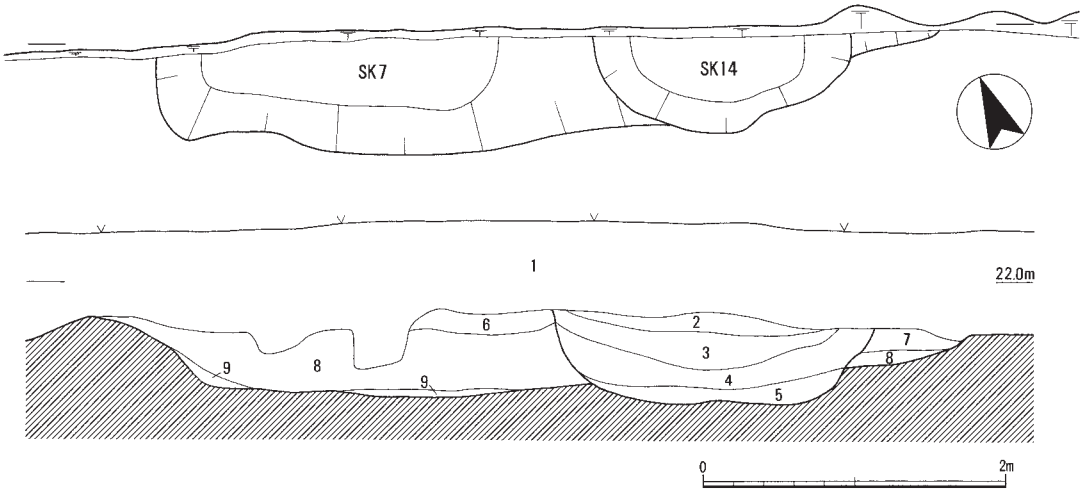
幅は一定しておらず、最大幅５mであるが、西壁付近では幅2.2mほどとなっている。削平なども影響しているとみられるが、元々幅は一定していなかったものとみられる。また、深さも一定しておらず、最も深いところで１mほどの深さがあるが、西壁付近の幅が狭くなっている部分では、深さ0.2～0.3mほどとかなり浅くなっている。東側の浅い部分から西側の深い部分へは、底面は緩やかな傾斜となって続いていく。

埋土は全体的にかなり均質な黒色土で占められており、ＳＤ１やＳＫ７と似た様相を示す。周溝南側では最下層に黄褐色土層が認められるが、これは埋没に際しての初期流入土と考えられる（第９図第７層）。その後、自然堆積によって徐々に埋没して



１：造成土
２：2.5Y2/1黒色シルト～中粒砂［ＳＺ３上層、造成土］
３：10YR1.7/1黒色シルト～極細粒砂　10YR6/8明黄褐色シルト～極細粒砂ブロック（径0.5cm以下）を２～３％含む［耕作土？］
４：10YR1.7/1黒色シルト～中粒砂　10YR5/6黄褐色シルト～中粒砂を粒状に少量含む［耕作土？］
５：2.5Y2/1黒色シルト～中粒砂　均質
６：10YR1.7/1黒色シルト～中粒砂　均質
７：10YR2/3シルト～中粒砂　5YR4/8赤褐色細粒砂～中粒砂を粒状に少量含む

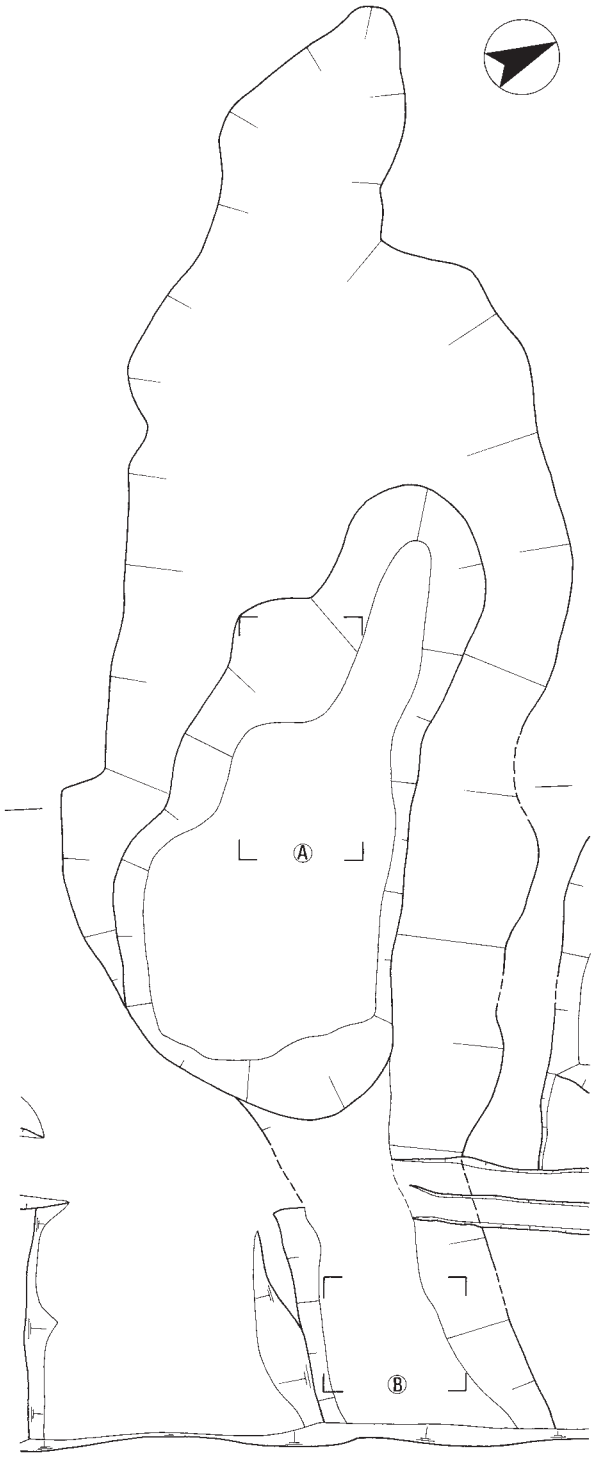
第７図　ＳＤ１実測図（1:50）



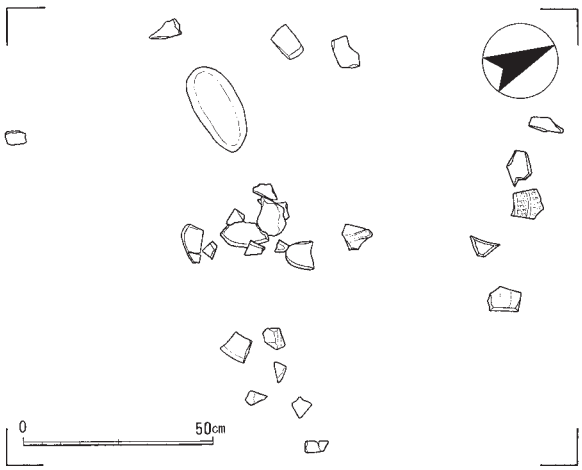
１：造成土
［ＳＫ14］
２：2.5Y3/1黒褐色シルト～粗粒砂　炭化物含む
３：２層と同じ　10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック（径１～３cm）を５％含む
４：２層と同じ
５：10YR2/1黒色シルト～中粒砂　10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック（径0.2～２cm）を10～20％含む

［ＳＫ７］
６：5Y2/1黒色シルト～中粒砂　5Y5/4オリーブ色シルトブロック（径0.2～0.5cm）を３～５％含む
７：2.5Y4/2暗黄灰シルト～粗粒砂　2.5Y3/1黒褐色シルト～中粒砂ブロック（径１～２cm）を３～５％含む。
８：2.5Y2/1黒色シルト～細粒砂　均質
９：2.5Y2/1黒色シルト～細粒砂　2.5Y6/6明黄褐シルトブロック（径0.2～0.5cm）を10～20％含む。均質

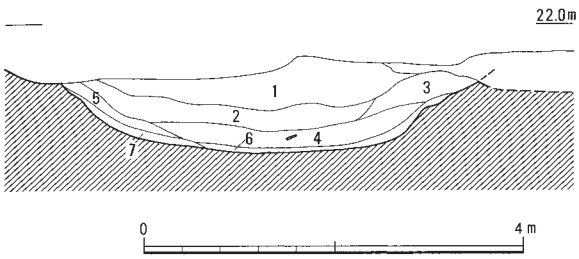
第８図　ＳＫ７・14実測図（1:50）



Ⓐ 西側遺物集中部



Ⓑ 東側遺物集中部



1：7.5YR1.7/1黒色シルト～極細粒砂　均質。やや粘質
2：7.5YR2/1黒色シルト～極細粒砂　均質。やや粘質
3：7.5YR2/1黒色シルト～極細粒砂　均質。やや粘質。２層よりやや粒度が細かくしまり弱い
4：10YR1.7/1黒色シルト～極細粒砂　均質。やや粘質。遺物含む
5：10YR3/3暗褐色シルト～中粒砂　10YR5/6黄褐色シルトブロック（径0.1～0.3cm）を20％含む。やや粘質
6：10YR3/1黒褐色シルト～中粒砂　7.5YR5/8明褐色シルト～粗粒砂ブロック（径0.1～0.5cm）を10～20％含む
7：10YR4/3にぶい黄褐色シルト～細粒砂　10YR5/8黄褐色シルト～粗粒砂・10YR6/4にぶい黄橙色のシルトのブロック（径0.3～１cm）が30～50％混じる。粘質

第９図　ＳＤ９実測図（1:80、遺物出土状況図は1:20）

いったものと考えられる。墳丘からの崩落土と思われるような土層は明確には確認できなかった。

遺物は須恵器の直口壺・装飾付高坏形器台・装飾付脚付壺・提瓶、土師器の甕・台付甕、埴輪などが出土している。遺物は大きく分けて２箇所に集中して検出された。同一個体と考えられる破片は、基本的に同じ遺物集中部からまとまって出土している（第10図）。

西側遺物集中部では、多くの遺物は第４層中から出土した。検出されたレベルもほぼ同じである。より上層の第１～３層からは遺物はごく少数しか出土していない。須恵器直口壺・装飾付脚付壺・装飾付高坏形器台、土師器甕・台付甕、円筒埴輪などがこの地点から出土している。

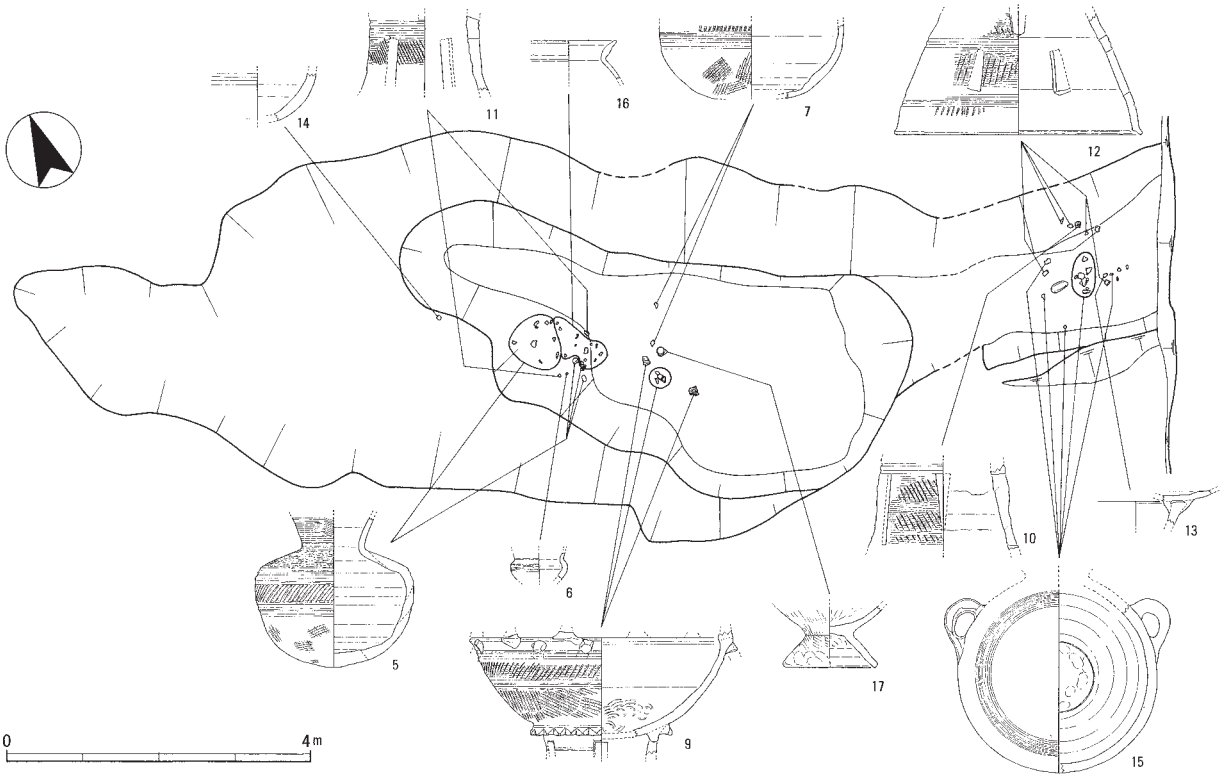
東側遺物集中部では、多くの遺物は周溝底から10～20cmほど上のレベルでまとまって出土した。須恵器提瓶・装飾付高坏形器台などがこの地点から出土しているほか、小片のため図化できなかったものの土師器の台付甕と考えられる土器片も少量出土している。この遺物集中部からは、長径30cmほどの長楕円形の円礫も１点検出された。この円礫には加工痕や使用痕はみられなかった。

これらの遺物は、埋没後に撹乱を受けた様子はなく、また同一個体の破片がかなりまとまって出土していることからも、埋没時の状況をよく保っているものと考えられよう。それにもかかわらず、出土した須恵器や土師器が多くの部位を欠損し完形にならないことからは、これらがもともと破損した状況で埋没したことが推測される。西側遺物集中部ではこれらの土器類が周溝内最下層ではなく、やや上位の第４層内からまとまって出土していることなどを考えれば、古墳築造後しばらくしてから墳丘に置かれていたものが破損し、流入してきた可能性も想定できよう[1]。

なお、ＳＤ９の埋土最上層（第９図第１層）からはごく少量ながら山茶碗の破片が出土した。これに伴う遺構の掘り込みなどは確認できなかったため、ＳＤ９の埋没時に入り込んだものとみられる。したがって、ＳＤ９は中世前期頃にほぼ埋没したものと考えられる。出土した山茶碗については次章で述べたい。

ＳＺ18　調査区のほぼ中央で検出した、長径7.3m、短径4.3mほどの不整形な浅い落ち込みである。

深さ10cm程度の浅い窪地状の部分に灰オリーブ色



第10図　ＳＤ９出土遺物破片分布状況図（遺溝1:100、遺物1:8）

（7.5Y5/2）土が堆積している状況を断ち割りで確認しているが、掘り方は不明瞭であり、遺構の範囲は灰オリーブ色土の分布範囲から想定した。直上にはＳＤ１やＳＤ９と同様に黒色土の堆積が認められたが、この黒色土はガラスやレンガの破片を含むことから撹乱を受けているものと思われる。

出土遺物としては、須恵器の坏身・坏蓋や、土師器の直口壺・短頸壺などがある。これらの古墳時代の遺物は、表土掘削時や遺構検出時に灰オリーブ色土と直上の撹乱を受けた黒色土の境目付近で集中的に検出された。須恵器坏蓋は灰オリーブ色土に半分突き刺さったような状況で検出されたが、灰オリーブ色土内に確実に含まれていた遺物は確認できていない。

註

（１）提瓶の内面の割れ方や、器台などの破片遺存率の低さからみると、自然に破損したものが流入したのではなく、もともと破砕されていた可能性も考えておく必要があるかもしれない。墳丘出土須恵器が人為的に破砕されていることが想定される例としては、奈良県巨勢山463号墳などがある（御所市教育委員会2007『巨勢山古墳群Ⅵ』御所市文化財調査報告書第30集）。

第２節　遺物

古墳時代の遺物には、ＳＤ９とＳＺ18から出土したもののほか、近世の遺構埋土や撹乱土中に含まれていたものもある。まず、各遺構から出土した遺物について遺構ごとに述べ、その他のものについてはその後にまとめて記述する。

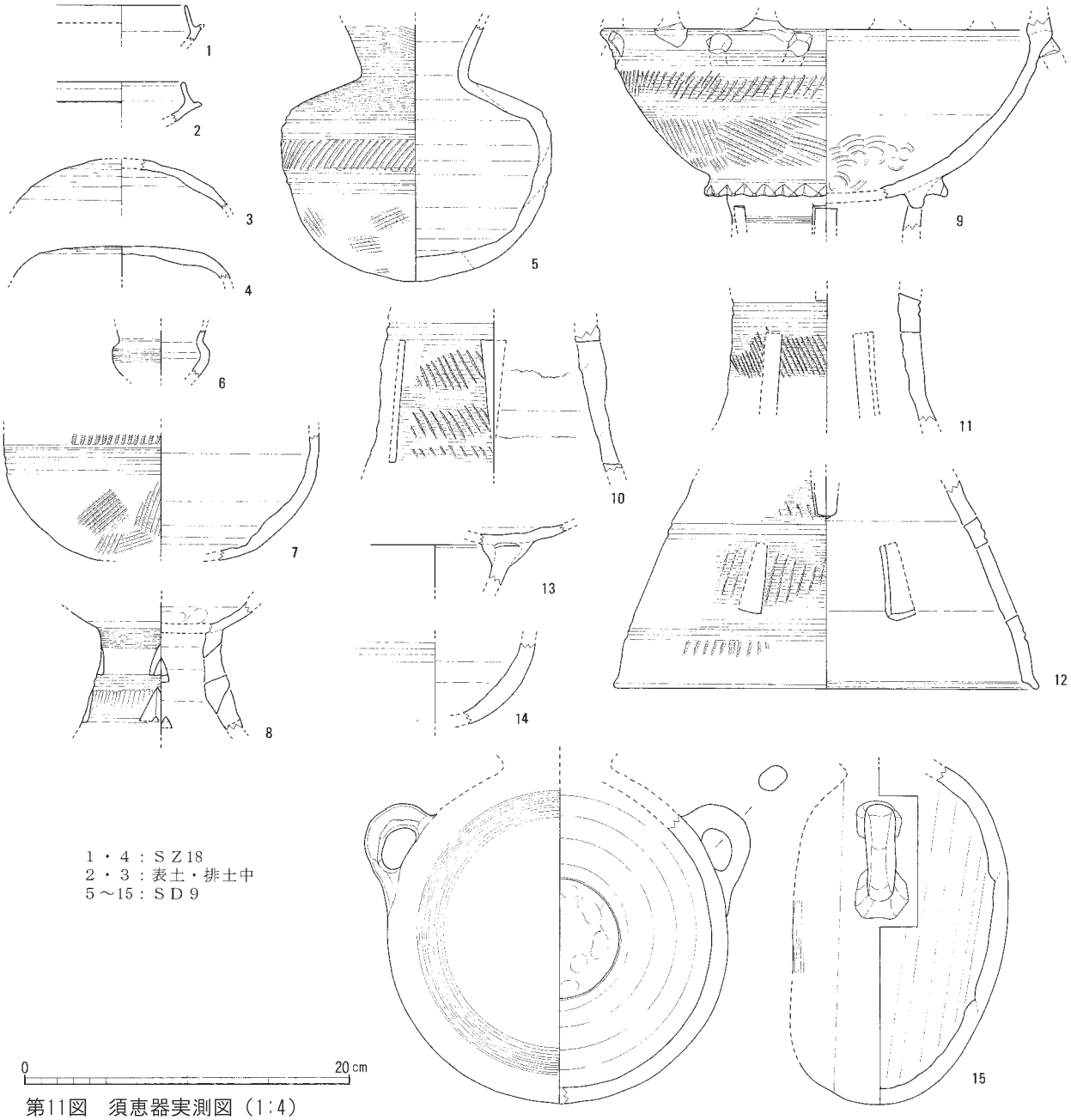
ＳＤ９出土遺物（第11～13図）

須恵器（５～15）　５は直口壺である。口縁部を欠損しており口縁部形態は不明であるが、頸部がやや細く締まっている。体部はやや扁平な球形で、肩部は強く屈曲し稜をなす。この屈曲部の直下にヘラ描列点文を施している。頸部付近にはカキメが施されている。体部下半には擬格子状タタキが認められる。

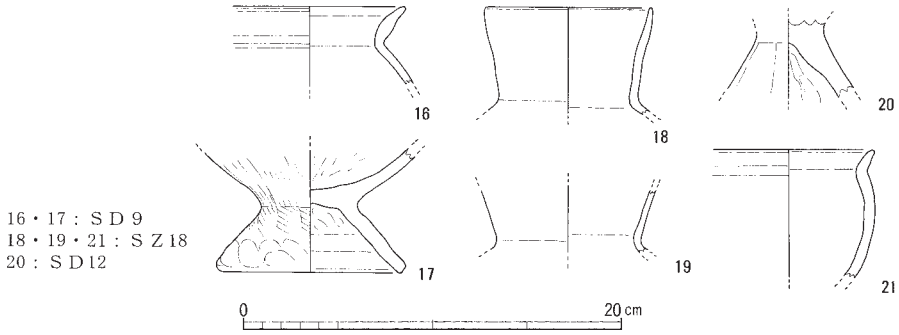
６～８は、器形や焼成などからみて同一個体の装飾付脚付壺の破片であると思われる。直接的な接合関係になかったため、図上では別々に掲載した。６は親壺の肩部に付属していたと思われる小型の子壺である。体部最大径は６㎝と小さく、体部中位にはカキメが施されている。７は親壺である。体部下半しか遺存していない。体部中位に櫛描列点文が施されている。また、体部下半には擬格子状タタキが認められる。８は脚部上半である。壺部との接合部付近にはカキメが施される。その下の区画には不明瞭ながらも波状文と考えられる文様が施されている。スカシはいずれも三角形で直列にあけられており、４方向に復元される。

９は装飾付高坏形器台である。坏部のほぼ1/2が遺存している。坏部外面の中位にはカキメを施した後に櫛描列点文を施している。坏部外面下半には擬格子状タタキが認められ、内面側には同心円状の当て具痕が残っている。頸部には突出度が高く刻み目を施した装飾性の高い突帯を貼り付けている。脚部は最上部が遺存しており、長方形スカシが４方向に入れられていたと考えられる。スカシの最上部内面が脚部の内側に向かってナデつけられている点が特徴的である。坏部の装飾はすべて欠失しているが、口縁端部に人物や動物などを配し、口縁直下に半円形環を付していたものと考えられる。

10～12は高坏形器台の脚部である。10は脚部上部の、ほぼ頸部直下の破片であると思われる。外面にはカキメを施した後に櫛描列点文が施されている。スカシは不整形な長方形で、４方向にあけられていると思われる。11は脚部上部から中位の破片である。２段分のスカシが遺存しており、長方形スカシが４方向に千鳥にあけられている。外面にはカキメを施した後に櫛描列点文が施されている。12は脚部下半の破片である。図化したもの以外にも、同一個体の脚端部の破片がいくつか出土している。スカシは不整な長方形スカシが４方向に千鳥にあけられている。スカシの上下は２本１組の凹線によって区画されるが、いずれの区画にもカキメを施した後に櫛描列点文が施されている。ただし、最上部の区画の櫛描列点文とそれより下位の区画の櫛描列点文とでは施している方向が異なっており、施文時に途中で脚部を倒立させていた可能性も考えられる。以上の



第11図　須恵器実測図（1:4）



第12図　土師器実測図（1:4）

高坏形器台脚部片のうち、11と12は同一個体の可能性があり、これが９の脚部となる可能性が高い。一方、10は頸部付近の破片と考えられるが、９に一部遺存している脚部とは特徴が一致せず、これは別個体である可能性がある。

13は装飾付高坏形器台の破片である。ごく小片であるが、高坏形器台の口縁部に小型の坏身と考えられるものが取り付けられている。器台の口縁端部は肥厚して上面に面を持っている。胎土や焼成からみて、９～12とは別個体と考えられる。

14は小片で器種を確定することが難しいが、器壁の厚さや、内面に自然釉が明瞭に付着していることなどからみて、器台の坏部の底部片である可能性が考えられる。外面には一部にカキメが認められる。

15は提瓶である。全体の半分近くを欠損し、口縁部も残存していない。肩部に１対の半円形の把手を持つが、片側の把手は欠損しており、実測図では遺存する把手をもとに復元している。体部には表裏[1]ともカキメが施されているが、やや不明瞭である。体部裏側の内面には円形の粘土板で体部を閉塞した痕跡が残っている。また、体部内面には細かく剥離したような破砕痕跡が認められ、体部外面からの強い打撃によって割れた可能性も考えられる（写真図版８）。

土師器（16・17）　16は甕の口縁部である。小片のため法量は復元できなかった。口縁部は頸部でくの字状に屈曲し、短く外反する。頸部にはやや強い横ナデが施され、口縁端部は丸く収められる。胎土に砂粒を多く含む点が特徴的である。類似する胎土の土師器甕の体部片が周辺から多数出土しており、同一個体と考えられる。体部片には、外面に不明瞭ながらもハケを施しているものも認められる。破片はいずれも小片であり、全形を復元するには至らなかったものの、伊勢地域に通有の台付甕とは口縁部の形態が異なっており、おそらく丸底の甕であると考えられる。

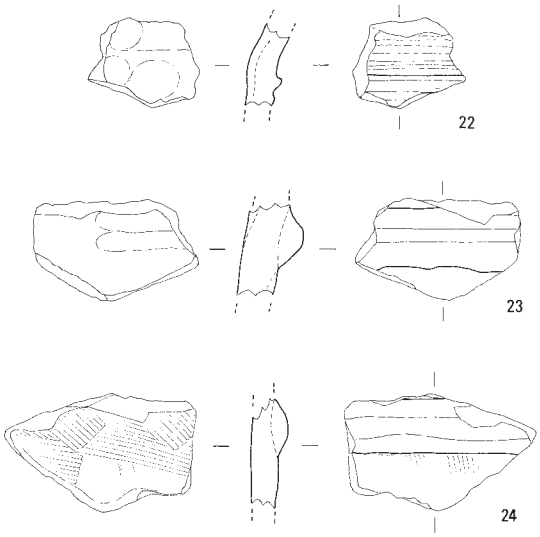
17は台付甕である。体部内面にはヘラケズリが施される。体部外面には板ナデ状の粗いハケが縦方向に施されている。脚部外面には、上半部に斜め方向のハケが短く連続的に施され、下半部には連続する指頭圧痕が顕著に認められる。脚端部には面を持つ。

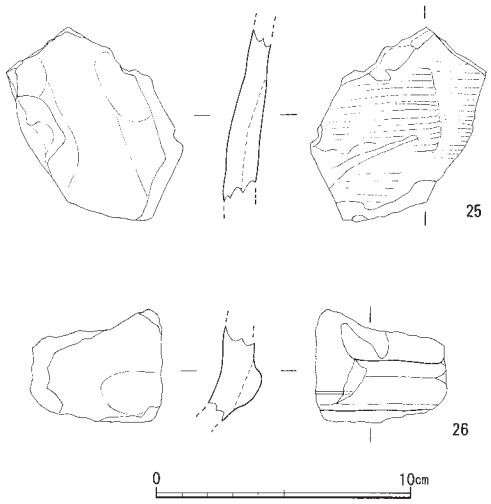
埴輪（22・23）　22・23は円筒埴輪の突帯部分の破片である。いずれも土師質のものである。22は外面にヨコハケが施されており、低い突帯をもつ。突帯の中央部は強い横ナデによりかなり凹んでいる。内面には指頭圧痕が認められる。23は器壁が厚く、突帯も突出度が高くしっかりしている。器壁の残存状況はよいが、内外面ともにハケなどの明瞭な調整は認められない。

以上のＳＤ９出土遺物のうち、５～９・11・16・17が西側遺物集中部から出土しており、10・12・13・15が東側遺物集中部から出土している（第10図）。

ＳＺ18出土遺物（第11・12図）

須恵器（１・４）　１は坏身の口縁部である。小片





22・23：ＳＤ９　24・26：ＳＤ12　25：排土中

第13図　埴輪実測図（1:3）

のため、法量は復元できなかった。表土掘削中に出土したが、出土状況からみてＳＺ18に伴うものと考えられる。口縁端部は丸く収める。胎土や焼成などの特徴が４とよく類似している。

４は坏蓋の天井部である。坏身底部の可能性もある。遺構検出中にＳＺ18から出土した。左方向[2]のヘラケズリを施す。内面には同心円状の当て具痕が認められる。

土師器（18・19・21）　18・19は直口壺である。いずれも表土掘削中に出土したが、出土時の状況からみてＳＺ18に伴うものと考えられる。18は頸部から口縁にかけての破片である。口縁は頸部から直線的に立ち上がり、口縁端部でやや内湾している。19は頸部から口縁にかけての破片であり、口縁端部は遺存していない。18と類似した器形・法量であるが、色調や器壁の厚さなどからみて18とは別個体と考えられる。

21は短頸壺である。頸部の締まりが弱く、壺というより鉢状の器形をなす。小片のため、法量は復元できなかった。また風化により器壁の調整も判然としない。胎土には砂粒が多く含まれる。

以上の遺物のほか、小片で図化は不可能であったが、土師器直口壺や甕などの体部と思われる破片もごく少量出土している。

近世遺構・遺構外出土遺物（第11～13図）

須恵器（２・３）　２は坏身の口縁部片である。排土中から採集された。小片のため、法量は不明である。口縁端部は丸く収めているが、やや肥厚している。３は坏蓋の天井部ないし坏身の底部と考えられる。表土掘削中にｂ11グリッドないしその付近から出土した。外面には右方向の回転ヘラケズリが施されている。

土師器（20）　20は高坏の脚部と考えられる。ＳＤ12から近世遺物に混じって出土した。外面にはタテナデが認められる。内面には絞り痕が明瞭に残る。古墳時代後期のものと思われる。

埴輪（24～26）　24・25は円筒埴輪の破片である。24はＳＤ12から近世の遺物とともに出土した。焼成があまり良くなく、風化が進んでいる。突帯は低平であまり突出しない。外面調整は風化により不明瞭だが、一部にタテハケと思われる痕跡が遺存している。内面には不整なヨコハケが施されている。25は排土中から採集された。外面にはヨコハケが認められる。明瞭な静止痕は認められないが、内面には斜め方向のナデが認められる。焼成は良好で、やや硬質である。黒斑は認められない。

26は朝顔形埴輪とも考えられる。ＳＤ12から出土した。器壁は緩く屈曲し、屈曲部には低い突帯を貼り付けている。突帯が剥離した部分には、沈線と思われるものが認められる。内面には不明瞭であるが指頭圧痕が認められる。

これらの埴輪はいずれも土師質で、須恵質のものは認められない。

以上の遺物のほかに、小片のため図化できなかったものの、ＳＤ12からは他にも埴輪片と思われるものが出土している。また、ＳＫ２埋土中から須恵器広口壺の体部片が出土している。

註

（1）便宜上、体部を閉塞している面を裏側、その反対の面を表側と呼ぶ。

（2）ヘラケズリの方向は、本書では須恵器を回転台に据えた状態でヘラが動いている方向（砂粒が動いている方向）を記述している。

第Ⅴ章　中世の遺構・遺物

今回の調査では、確実に中世に属する遺構は検出されていないが、中世に属する可能性がある土坑が１基検出されている。また、ごく少量ながら中世の遺物も出土している。本章ではこれらの遺構・遺物について述べたい。

第１節　遺構

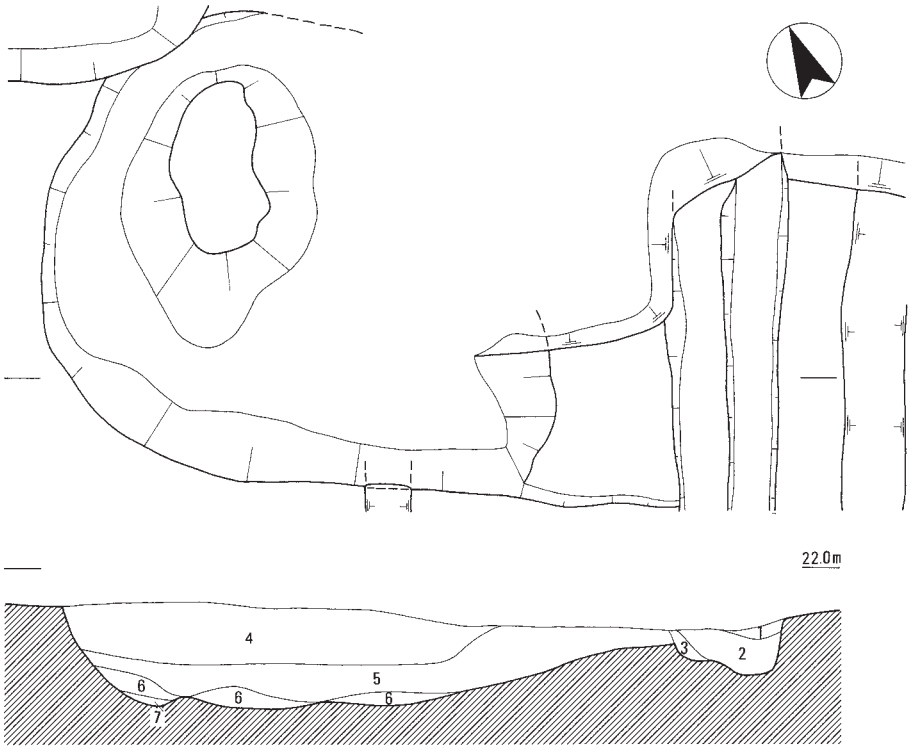
中世に属すると思われる遺構は、土坑１基のみである。これ以外に、中世に属する可能性のある遺構は検出されていない。

ＳＫ11（第14図）　調査区東側で検出された大型の土坑である。北側が半分以上撹乱によって破壊されており、全形をうかがうことはできないものの、元々は長楕円形の平面形を呈していたものと思われる。長軸はおよそ3.1m、深さは0.7mである。

底はほぼ平坦であるが、東側では一段浅くなっている。また、底面西側には円形の高まりが認められる。側壁は底面からかなり急角度で立ち上がる。

遺物は第５層から古墳時代のものと思われる土師器の小片が１点出土したのみである。したがって、帰属時期は判然としない。しかしながら、ＳＫ11は近世後期の遺構であるＳＤ８とＳＫ10によって一部を壊されており、これらの遺構より前に形成されたものと思われる。

埋土は黒色土を基調としており、ＳＤ９など東鷹



［ＳＤ８］
１：2.5Y2/1黒色シルト～極細粒砂　10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック（径0.2～0.5cm）を10％含む
２：10YR2/2黒褐色シルト～中粒砂　礫（径１cm）を少量含む。遺物含む
３：10YR2/1黒色シルト～中粒砂　10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック（径0.5～１cm）を20％含む

［ＳＫ11］
４：10YR1.7/1黒色シルト～極細粒砂　10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック（径0.2～４cm）を30％含む
５：10YR1.7/1黒色シルト～極細粒砂　10YR3/2黒褐色シルト・10YR5/4にぶい黄褐色シルトのブロック（径0.2～１cm）を30％含む
６：10YR1.7/1黒色シルト～極細粒砂　均質
７：10YR1.7/1黒色シルト～極細粒砂　10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック（径0.2～0.5cm）を５％含む

第14図　ＳＫ11実測図（1:50）

跡古墳の周溝埋土と似ている。ただし、周溝埋土とは異なり、地山に由来すると思われる黄褐色の粘質土ブロックを多量に含んでいる。このことから、ＳＫ11は掘り込まれた後に、東鷹跡古墳の周溝内や墳丘上に堆積した黒色土と、掘り返された地山もしくは墳丘盛土が混ざった土で埋め戻された可能性が高いと考えられよう。

東鷹跡古墳の周溝が中世前期にほぼ埋没したと考えられることや、古代の遺物が出土していないことからみて、ＳＫ11の掘り込まれた時期は中世前期以降であるとみてよいだろう。さらに、近世前期の遺物が調査区内で出土していないことを考えれば、ＳＫ11の帰属時期は中世後期までに収まる可能性が高いと判断した。

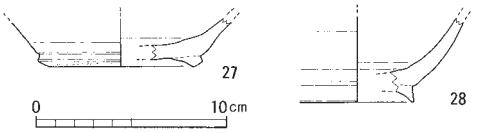
第２節　遺物

中世の遺物のうち、図化できたのはＳＤ９出土の山茶碗２点のみである。これらはいずれもＳＤ９の掘削中に、かなり上層から出土した。

ＳＤ９出土遺物（第15図）

山茶碗（27・28）　27・28は山茶碗である。27は体部から高台にかけての破片である。外面と内面にロクロナデを施している。内面は摩滅しており使用痕が認められる。高台は断面形が台形状につぶれ、貼り付け痕跡が明瞭である。また、高台端部には不明瞭ながら籾殻痕が認められる。藤澤編年[1]によると、渥美型第５型式と思われる。

28は体部から高台にかけての破片である。外面と内面にロクロナデを施している。内面は摩滅しており使用痕が認められる。高台は、断面形が三角形状を呈している。藤澤編年によると、渥美型第４型式と思われる。



第15図　山茶碗実測図（1:4）

註

（1）藤澤良祐1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター

第Ⅵ章　近世の遺構・遺物

調査地は藩主居館にも近い久居城下町の一角に位置するため、調査前から武家屋敷等に関わる近世の遺構が存在することが推定されていたものの、近代以降の削平によって遺構の遺存状況は悪いと予測されていた。しかしながら、調査の結果、削平を免れた部分を中心に比較的多くの遺構が検出された。そして、近世の遺物も多量に出土している。本章では、これらの近世の遺構・遺物について述べたい。

第１節　遺構

遺構としては、土坑や溝などが検出されている。これらの遺構は、主に調査区の東よりと西よりに集中して検出された。調査区の中央部では遺構はほとんど見つかっていない。また、礎石などの建物に関係するような遺構は検出されていない。以下、個々の遺構について土坑・溝・その他の遺構に大きく分けて詳述したい。

①土坑

ＳＫ２（第16図）　調査区西部で検出された土坑である。ＳＤ５に一部を壊されているため、ＳＤ５より古い遺構であると思われる。一方で、ＳＤ12を壊して掘り込まれているため、ＳＤ12よりは新しい遺構である。コンクリートの建物基礎による撹乱によって一部を壊されているが、平面形態は長さ6.1ｍほどの台形で、東側小口よりも西側小口の方が幅広である。

側壁は大部分でオーバーハングしており、西側小口壁も強くオーバーハングする。ただし、東側小口壁や南側側壁の東半分はほぼ垂直に立ち上がる。床面は東側小口から階段状に西側へ向かって低く造られており、東側小口付近では深さは検出面から0.6ｍほどであるが、西側小口付近の最も深くなっている部分では検出面から1.4mほどの深さがある。

以上のような構造からみて、この土坑は地下室などの地下空間として利用された、いわゆる地下式土坑と呼ばれるものと考えられる。江戸や京都でも地下式土坑が検出されており、いくつかの形態のものがあることが指摘されている(1)。

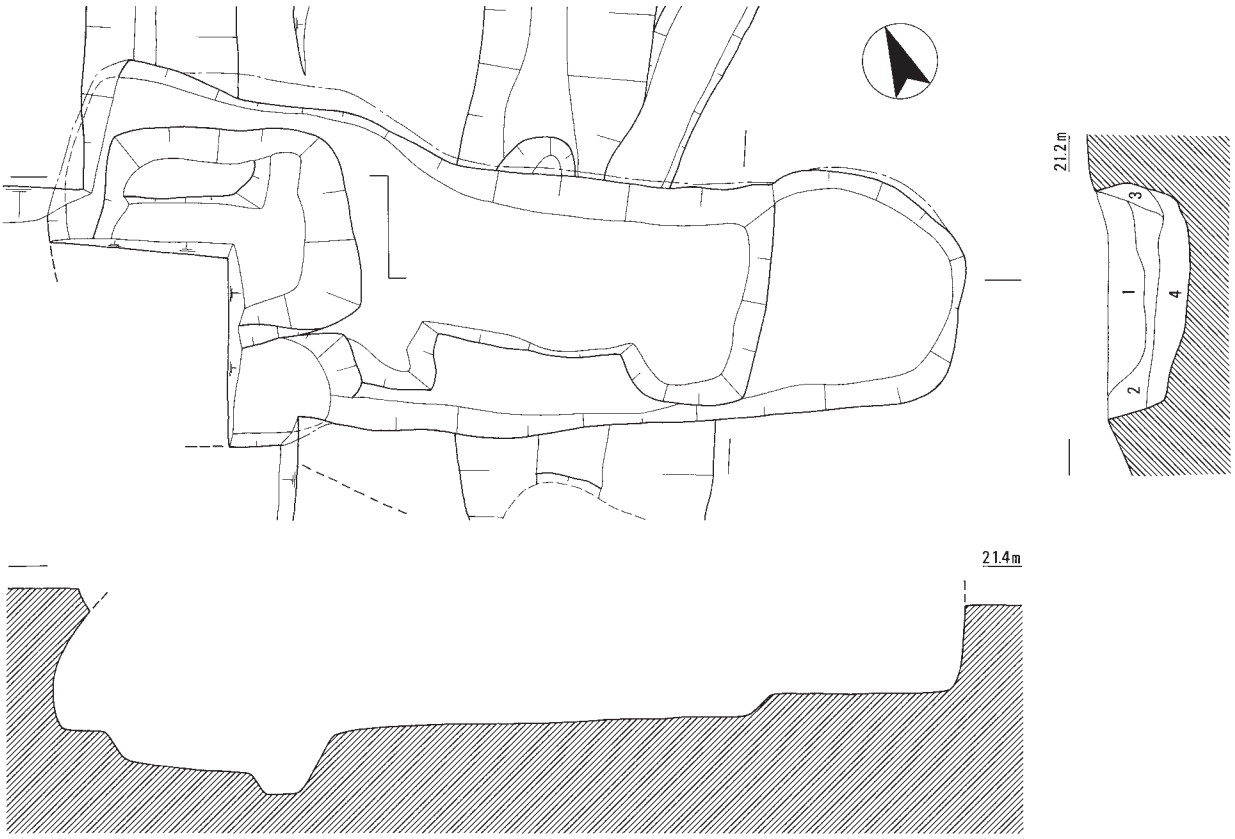
構造からみると、東小口側から内部へと入っていくようになっているようである。入り口となる東小口周辺には覆い屋などの存在も想定されるため精査を行ったが、柱穴などは検出されなかった。この土坑の天井部自体も削平されていると考えられることを踏まえれば、もし地上施設があったとしても削平によって消滅している可能性が高い。

壁面には漆喰の塗布などは認められなかった。床面にはピットや溝などもなく、土層断面からみても板などを壁面に貼っていた様子は認められなかった。したがって、この土坑は素掘りであったものと思われる。掘り込まれている基盤の地山は粘質でしまりがよく、素掘りでも壁の強度は保てたものと推定される。

ＳＫ２に類似する遺構としては、平面形態などに差異があるものの、東京都白山四丁目遺跡(2)などで検出されているものなどが開口部の位置や進入部の階段状施設の存在などの点で近い形態を示しているといえよう。ＳＫ２の天井部については削平のため不明であるが、これらの類似例を参考にすれば、地山を掘り残すことによってある程度の天井を造り出していた可能性が高い。

この遺構の内部からは、陶磁器や瓦、土師質土器が多量に出土しており、また鉄釘や銅製品、板石なども出土している。埋土中には漆膜の小さな断片も含まれており、腐食して消滅しているものの漆器類も存在していたものと考えられる。こうした出土状況からみて、この地下式土坑は使用されなくなった後に廃棄土坑として埋め戻され、それ以降にＳＤ５が掘り込まれたものと考えられる。

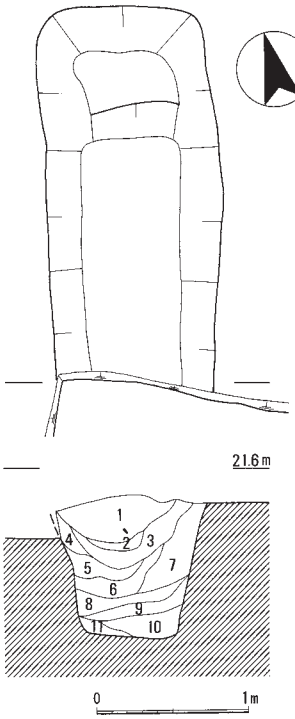
ＳＫ６（第17図）　調査区南壁際で検出された遺構である。南側は調査区外へのびており全体の規模や形状は不明であるが、確認長2.5m、最大幅1.2m、深さ１ｍである。床面は平坦で、側壁はほぼまっすぐ上方へ立ち上がる。北側小口は段状に１段浅く



※一点鎖線はオーバーハング部分の奥行きを示す

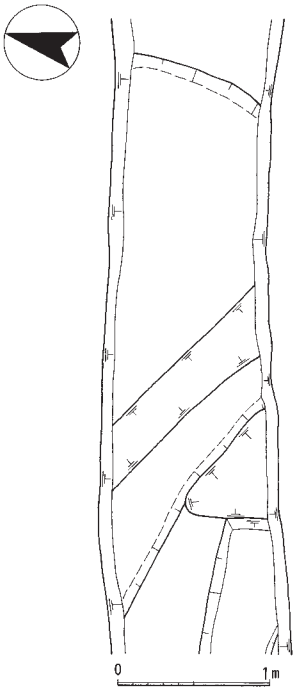
1：10YR3/1黒褐色シルト～中粒砂　遺物・炭化物多量に含む
2：10YR3/2黒褐色シルト～中粒砂　5YR4/4にぶい赤褐色シルト～中粒砂・10YR7/4にぶい黄橙色シルトのブロック（径0.5～２cm）を１～３％含む。遺物含む
3：10YR3/2黒褐色シルト～中粒砂　5YR4/4にぶい赤褐色シルト～中粒砂・10YR7/4にぶい黄橙色シルトのブロック（径0.5～１cm）を20～50％含む。遺物・炭化物ほとんど含まない
4：10YR6/4にぶい黄橙色シルト　10YR3/1黒褐色シルト～中粒砂を50％斑状に含む。遺物・炭化物含まない

第16図　ＳＫ２実測図（1:50）

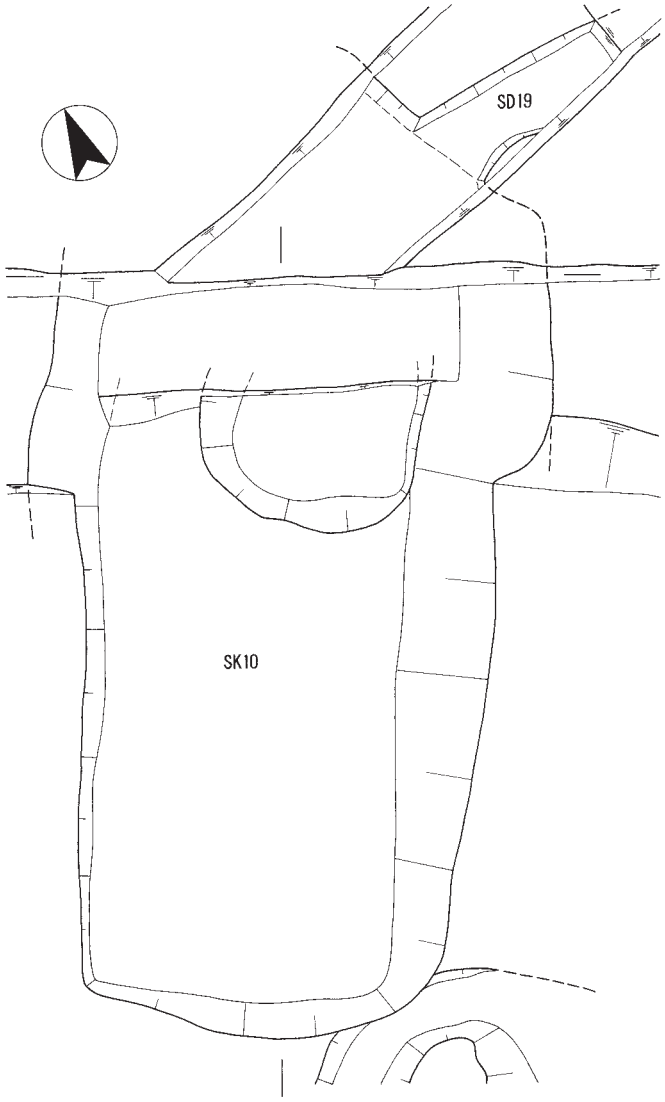


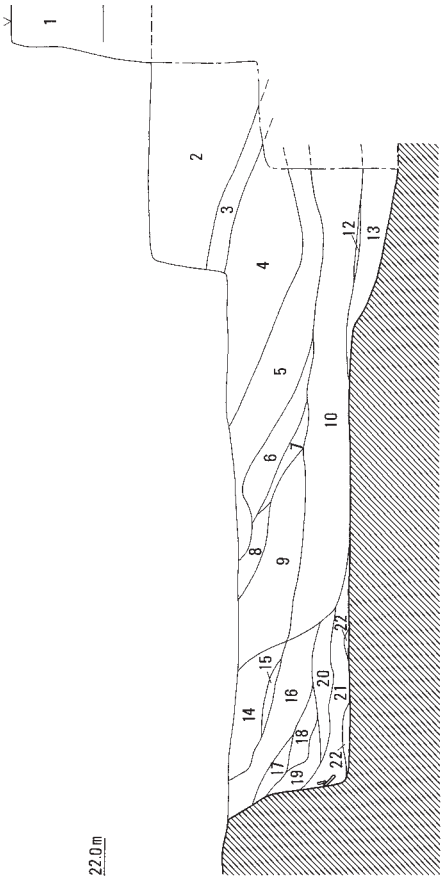
1：10YR2/2黒褐色シルト～中粒砂　炭化物・遺物含む
2：10YR4/6褐色細粒砂～粗粒砂　礫（径0.5cm）を少量含む。炭化物含む。砂質
3：10YR2/2黒褐色シルト～中粒砂　10YR6/6明黄褐色シルトブロック（径0.2～0.5cm）を少量含む。炭化物含む
4：10YR3/2黒褐色シルト～中粒砂　10YR6/6明黄褐色シルトブロック（径0.2cm～0.4cm）を30％含む
5：10YR3/1黒褐色シルト～中粒砂　2.5Y6/4にぶい黄色シルトブロック（径0.2～１cm）を30％含む。部分的に鉄分沈着。炭化物含む
6：10YR3/1黒褐色シルト～中粒砂　炭化物ごく少量含む
7：10YR3/1黒褐色シルト～中粒砂　10YR6/6明黄褐色シルトブロック（径0.2～１cm）を10％含む。10YR1.7/1黒色シルト～細粒砂ブロック（径２～３cm）を部分的に含む
8：７層と同じ　明黄褐色シルトブロックの含有量が30％。黒色シルト～細粒砂ブロックも全体的に３～５％含む
9：７層と同じ　明黄褐色シルトブロックの径が0.2～２cm。ブロックの含有量が50％以上
10：10YR2/1黒色シルト～中粒砂　10YR6/6明黄褐色シルトを層状に含む
11：10YR2/3黒褐色シルト～中粒砂と10YR5/8黄褐色シルトが斑状に混じりあう

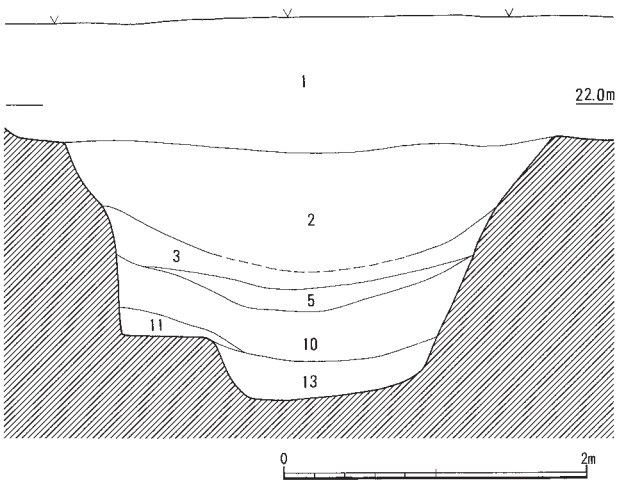
第17図　ＳＫ６実測図（1:50）



第18図　ＳＫ20実測図（1:50）







1：造成土
2：10YR2/2黒褐色シルト～中粒砂　10YR5/8黄褐色中粒砂・5Y4/8赤褐色シルト～中粒砂・10YR6/3にぶい黄橙色シルトのブロック（径0.2～1cm）を10～20%含む。炭化物含む
3：2層と同じ　含まれるブロックの径が0.2～0.3cm。ブロックの含有量が30～50%
4：2層と同じ　ブロックの含有量が20～30%
5：2層と同じ　含まれるブロックの径が0.2～5cm。ブロックの含有量が50%以上
6：10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂～粗粒砂　礫（径1～4cm）をごく少量含む。砂質
7：10YR3/1黒褐色シルト～粗粒砂
8：10YR3/1黒褐色シルト～粗粒砂　10YR5/6黄褐色シルト～粗粒砂ブロック（径1cm）を5%含む
9：10YR2/2黒褐色シルト～中粒砂と10YR5/6黄褐色シルト～粗粒砂が混じりあう
10：4層と同じ
11：10YR3/1黒褐色シルト～粗粒砂　7.5Y5/8明褐色シルト・2.5Y6/4にぶい黄色シルトのブロック（径1～3cm）を40～50%含む。炭化物含む
12：10YR5/6黄褐色シルト～中粒砂　ごく薄い層
13：10YR2/1黒色シルト～中粒砂　炭化物・遺物含む
14：10YR3/1黒褐色シルト～中粒砂　10YR6/4にぶい黄橙色シルトブロック（径1～2cm）を少量含む。礫（径1cm）を少量含む。炭化物含む
15：10YR3/1黒褐色シルト～中粒砂と7.5YR1.7/1黒色シルト～細粒砂が混じりあう
16：7.5YR3/1黒褐色シルト～中粒砂　礫（径0.5～2cm）を少量含む。炭化物含む
17：10YR6/6明黄褐色シルト　部分的に7.5YR3/1黒褐色シルト～中粒砂が層状に混じる。粘質
18：10YR2/2黒褐色シルト～中粒砂
19：10YR6/6明黄褐色シルト　粘質
20：10YR3/2黒褐色シルト～中粒砂
21：17層と同じ　遺物多く含む。炭化物含む
22：2.5Y4/3オリーブ褐色シルト　10YR5/6黄褐色シルト～粗粒砂ブロック（径0.2～0.5cm）を3～5%含む

第19図　ＳＫ10・ＳＤ19実測図（1:50）

なっている。埋土は細かく分層でき、また地山に由来するブロック土を多く含むことなどから、人為的に埋め戻されているものと考えられる。

出土遺物はごく少量であるが、磁器の碗などが出土している。

ＳＫ10（第19図）　調査区北東で検出された大型の土坑である。北側は調査区外へとのびているが、配管に伴う調査区によって北側小口部分が確認された。それによれば長さ6.4m、幅3.2mの平面長方形の土坑で、最大深さは1.7mである。側壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ平坦であるが、北部にはやや深く掘り込まれた部分が存在する。柱や板張りなどの構造物の痕跡は認められなかった。

埋土の状況から見ると、この土坑は人為的に短期間に埋められたようで、埋土のほとんどは地山ブロックを多量に含む質のよく似た土からなる。床面の皿状に深くなっている部分は真っ先に床面と同じ高さまで埋められ、その後、主に南側から大量の土砂を流し込んで埋めたものと考えられる。ただし、第２～10層と第14～22層との間にはやや埋積状況に差があり、埋め戻し工程に間断があった可能性もある。

この土坑も、ＳＫ２と同じく地下式土坑とされる遺構であると考えられる。江戸や京都などでは地下式土坑としてＳＫ10同様の方形大型土坑が検出されている。東京都真砂遺跡12号地下室[3]などが類似するものとしてあげられるが、こうした類例では天井部が開口していたものと推定されている[4]。また、スロープ状の出入りのための施設が設けられているものがあり、ＳＫ10の場合も未調査である北側にこうした施設が存在する可能性もあろう。

出土遺物は土坑の規模にくらべてそれほど多くはないが、陶器の擂鉢・灯明皿、磁器の碗や土師質土器の小皿・焜炉、瓦などが出土している。焜炉は１個体が出土しているが、この焜炉の破片は第21層からまとまって出土している。

ＳＫ14（第８図）　調査区北壁際で検出した土坑である。ＳＫ７を切って掘り込まれている。調査区内にあたる部分は削平を受けており残存状況が良くないが、北壁の土層断面で確認する限り、長さ2.1m、深さ0.6mほどの土坑であるものと思われる。

出土遺物としては、陶器や瓦が出土しているが、いずれも小片で図化はできなかった。出土した遺物は、18世紀後半～19世紀前半頃のものと思われる。

ＳＫ20（第18図）　北東側配管部で検出した。大部分が調査区外へとのびており、全体の形状を把握することは不可能であったが、おそらく平面形は長方形を呈するものと推定される。床面まで掘削を行っていないため、深さなども不明である。

出土遺物としては、陶器の鉢の破片がある。

②溝

ＳＤ５（第21図）　調査区西部で検出された南北方向にのびる溝である。最大幅１ｍ、深さ0.6mである。底面には西側に細い溝状の掘り込みがある。側壁はほぼまっすぐ上方に立ち上がる。北端は調査区外へとのびている。底の細い溝状の掘り込みなどからみて板を立てて板塀状の施設としていた可能性もあるが、土層断面からは確認できなかった。

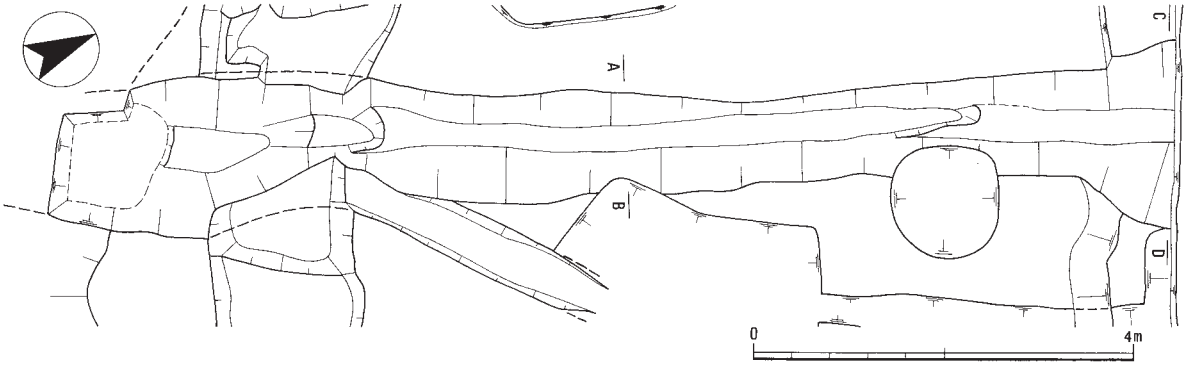
出土遺物としては磁器の碗・蓋、陶器の小皿・擂鉢などがある。

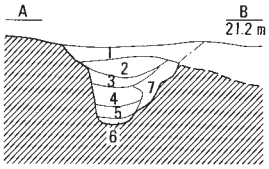
ＳＤ８（第22図）　調査区東部で検出された南北方向にのびる溝である。最大幅0.9m、深さ0.4mである。南北端は調査区外へとのびている。底面にはＳＤ５と同様に細い溝状の掘り込みが認められた。側壁はほぼまっすく上方に立ち上がる。ＳＤ８についても、細い溝状の掘り込みを利用して板を立てていたような様子は土層断面からは確認できなかった。

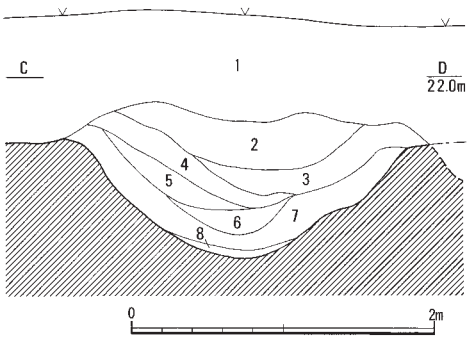
出土遺物としては、陶器の碗・土瓶・小瓶、土師質土器、瓦などがある。

ＳＤ12（第20図）　調査区西部で検出された南北方向にのびる溝である。最大幅2.4m、深さ１ｍで、横断面形はＶ字状を呈する。北端は調査区外へとのびている。南端はＳＺ３最上層の造成土によって覆われており、その終端は不明である。

このＳＤ12は北側から南側へ向かって段状に徐々に深くなっており、南端ではＳＺ３最上層の造成土を除去して掘削を進めたが、検出面から1.5mほど掘り下げても底に達せず、途中で安全面を考慮して掘削を中止した。ＳＺ３とＳＤ12の先後関係は不明瞭であり、調査によっても明確には判断できなかった。掘削を中止した部分付近で、ＳＺ３の埋土とＳＤ12の埋土がほとんど区別できなくなった。後に述



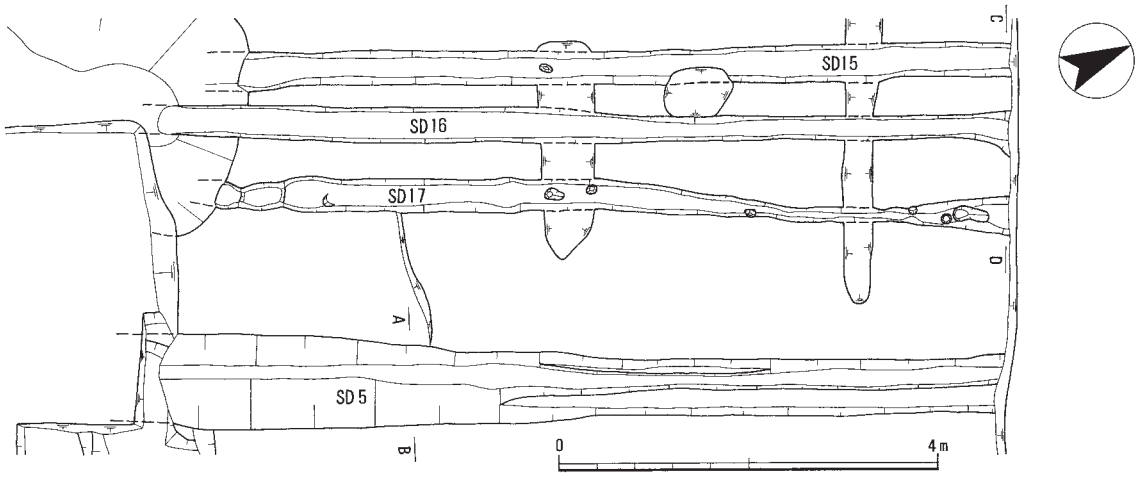


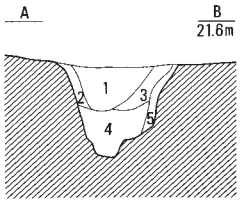


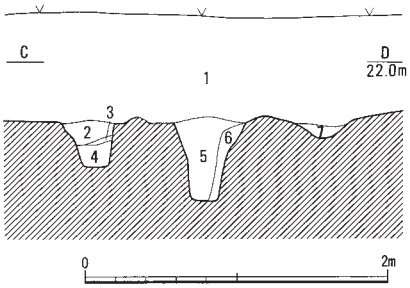
1：5Y4/2シルト～中粒砂［撹乱層］
2：10YR2/1黒色シルト～細粒砂
3：10YR2/2黒褐色シルト～中粒砂
10YR6/6明黄褐シルト～中粒砂ブロック（径0.2～1cm）を20%含む
4：10YR3/1黒褐色シルト～粗粒砂
礫（径0.2～2cm）を10%含む
5：2.5Y3/1黒褐色シルト～中粒砂
6：2.5Y3/1黒褐色シルト～中粒砂
10YR5/6黄褐色シルト～中粒砂ブロック（径0.2～0.4cm）を20%含む
7：10YR2/3黒褐色シルト～中粒砂

1：造成土
2：7.5YR3/1黒褐色シルト～粗粒砂
10YR4/6褐色シルトブロック（径0.4～1cm）を20%含む。
礫（径1～3cm）を少量含む
3：10YR3/3暗褐色シルト～中粒砂
4：2層と同じ　ブロックを30%、礫を5%含む。遺物含む
5：10YR2/2黒褐色シルト～粗粒砂
炭化物含む
6：10YR2/1黒色シルト～中粒砂
礫（径1～3cm）を5%含む
7：10YR3/2黒褐色シルト～中粒砂
8：10YR2/1黒色シルト～中粒砂
7.5YR5/8明褐色シルト～細粒砂ブロック（径0.2～0.5cm）を30%含む

第20図　ＳＤ12実測図（平面図1：80、土層断面図1:50）



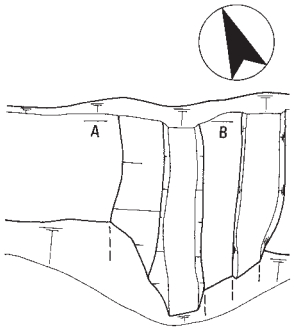


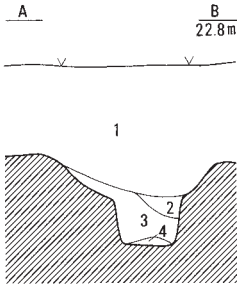


1：10YR1.7/1黒色シルト～中粒砂
2：10YR1.7/1黒色シルト～中粒砂
10YR6/6明黄褐色シルトブロック（径0.2～0.5cm）を5%含む
3：10YR2/2黒褐色シルト～中粒砂
4：10YR3/1黒褐色シルト～中粒砂
10YR6/6明黄褐シルトブロック（径0.4～1cm）を10%含む
5：10YR6/6明黄褐シルトブロックと10YR3/1黒褐色シルト～中粒砂が斑状に混じりあう

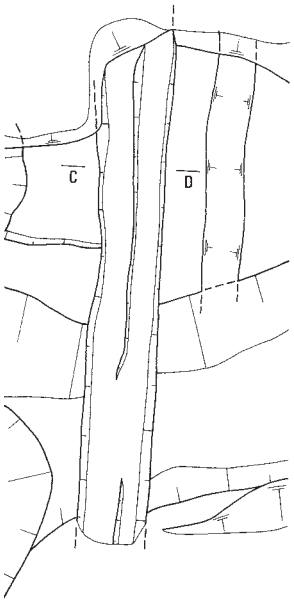
1：造成土
［ＳＤ15］
2：10YR3/1黒褐色シルト～中粒砂
3：2.5Y4/6オリーブ褐色シルト
4：10YR3/1黒褐色シルト～中粒砂
10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック（径0.2～0.5cm）を3%含む
［ＳＤ16］
5：10YR2/2黒褐色シルト～中粒砂
6：10YR2/2黒褐色シルト～中粒砂
2.5Y5/4黄褐色シルトブロック（径1～3cm）を30%含む
［ＳＤ17］
7：2.5Y3/2黒褐色シルト～中粒砂
2.5Y4/6オリーブ褐色シルトブロック（径0.2～0.5cm）を10%含む

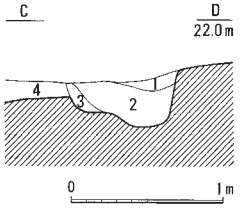
第21図　ＳＤ５・15・16・17実測図（平面図1：80、土層断面図1:50）



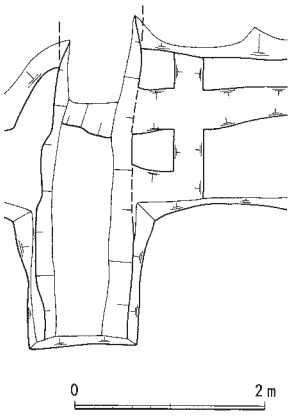


1：造成土
2：10YR3/1黒褐色シルト～中粒砂
3：10YR2/2黒褐色シルト～中粒砂
10YR5/4にぶい黄褐色シルト
ブロック（径0.2～1cm）を
30%含む。炭化物含む
4：10YR3/2黒褐色シルト～中粒砂

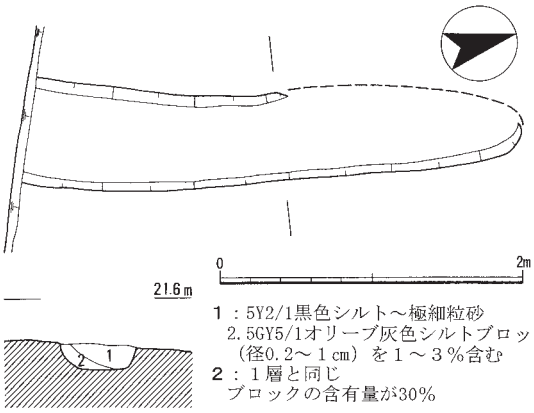




1：2.5Y2/1黒色シルト～極細粒砂
10YR5/4にぶい黄褐色シルト
ブロック（径0.2～0.5cm）を
10%含む
2：10YR2/2黒褐色シルト～中粒砂
礫（径1cm）を少量含む。
遺物含む
3：10YR2/1黒色シルト～中粒砂
10YR5/4にぶい黄褐色シルト
ブロック（径0.5～1cm）を
20%含む
4：10YR1.7/1黒色シルト～極細粒砂
10YR3/2黒褐色シルト・10YR5/4
にぶい黄褐色シルトのブロック
（径0.2～1cm）を30%含む
［ＳＫ11埋土］

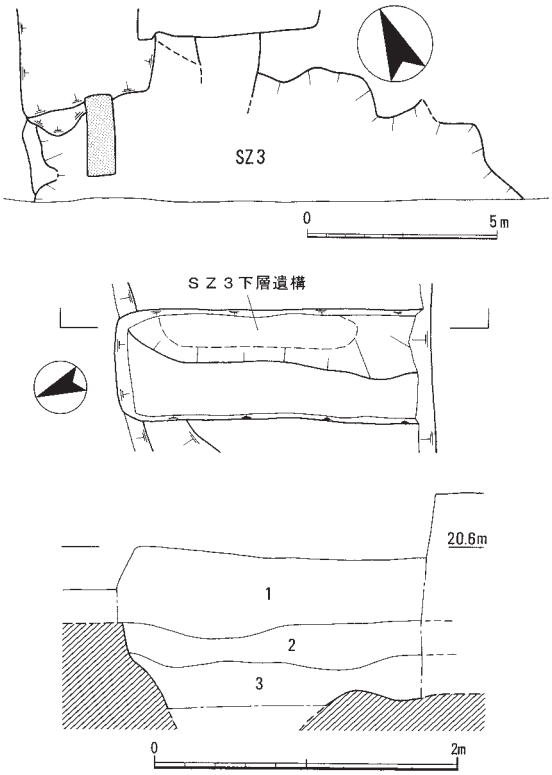


第22図　ＳＤ８実測図（平面図1:80、土層断面図1:50）



1：5Y2/1黒色シルト～極細粒砂
2.5GY5/1オリーブ灰色シルトブロック
（径0.2～1cm）を1～3%含む
2：1層と同じ
ブロックの含有量が30%

第23図　ＳＤ13実測図（1:50）



1：造成土　ガラス・レンガ含む
2：10YR3/1黒褐色シルト～中粒砂　10YR6/6明褐色のシルト
ブロック（径0.2～2cm）を10%含む。遺物・炭化物含む
［下層遺構埋土］
3：10YR3/1黒褐色シルト～中粒砂［下層遺構埋土］

第24図　ＳＺ３断ち割り実測図（1:50）

べるように、ＳＤ12はＳＺ３の下層へと続いていた可能性がある。

ＳＤ12はＳＫ２によって切られているが、ＳＫ２のすぐ北側で、北東側からのびてくる幅0.6m、深さ0.4mの細い溝がＳＤ12に合流している。ＳＤ12とこの溝との先後関係は埋土の状況からは明確に判断することができず、むしろ、この細い溝はＳＤ12の支溝として同時に機能していたと考えた方がよいと思われる。この支溝の北側は近代のものと考えられる土坑によって壊されている[5]。したがって、どこからのびていたものなのかは判然としない。

ＳＤ12からは、陶器の碗・火消壺・擂鉢、土師質土器の小皿などが出土した。遺物はＳＫ２より北側で多く検出され、ＳＫ２より南側のＳＺ３と接する部分では遺物はほとんど出土しなかった。

ＳＤ13（第23図）　調査区中央部の南壁付近で検出された、南北方向にのびる小規模な溝である。最大幅0.7m、深さ0.2mである。削平を被っているため、本来はもう少し深かったものと思われる。この溝はまっすぐにのびるのではなく、やや湾曲している。南端は調査区外へのびている。北端は撹乱により削平を受け、途切れている。

出土遺物としては、18世紀後半～19世紀前半頃のものと思われる陶器・土師質土器の破片があるが、小片のため図化できたものはなかった。

ＳＤ15（第21図）　調査区西部で検出された。最大幅0.4m、深さ0.3mである。ＳＤ16・17とほぼ平行して南北方向へのびている。底は平坦で、側壁は上方にまっすぐ立ち上がっており、横断面形は台形を呈している。土層断面では板塀の痕跡などは確認できなかった。北端は調査区外へとのびており、南端はＳＤ１を切っているが、近代の削平により、ＳＤ１上面で途切れており、その先の状況は不明である。

出土遺物としては磁器の碗や、陶器の小瓶・行平鍋蓋・植木鉢などがある。

ＳＤ16（第21図）　調査区西部で検出された南北方向にのびる溝である。最大幅0.4m、深さ0.6mである。底は平坦で、側壁は上方にまっすぐ立ち上がっており、横断面形は台形を呈している。土層断面では板塀の痕跡などは確認できなかった。北端は調査区外へとのびており、南端はＳＤ１を切っているが、近代の削平により、ＳＤ１上面で途切れている。

出土遺物としては磁器の碗や土師質土器の焙烙などがある。

ＳＤ17（第21図）　調査区西部で検出された南北方向にのびる溝である。ＳＤ15・16と平行している。最大幅0.3m、深さ0.1mである。底には凹凸があり、また側壁も凹凸を持つ不整形な溝である。深さも平行してのびるＳＤ15・16にくらべて浅い。

出土遺物はごく少量である。磁器の破片などが出土しているが、小片のため図化はできなかった。

ＳＤ19（第19図）　北東側配管部で検出された最大幅0.5mの浅い溝である。南側はＳＫ10に続いている。埋土の状況からみて、もともとＳＫ10に連続する溝であったものと思われる。北側は撹乱によって破壊されている。

出土遺物としては磁器の碗の破片が１点出土したのみである。

③その他の遺構

ＳＺ３（第24図）　調査区西北部で検出された大きな落ち込み状のものである。検出面においては遺構としての掘り方が明瞭ではなく、またガラスやレンガなどを含んでいたことから、近代の造成に伴うものと考え、掘削を中止した。したがって、調査時に図化した平面形態は近代造成土の堆積範囲である。

しかしながら、調査の終盤に一部を断ち割ったところ、この近代の造成土（第24図第１層）の下にガラス・レンガなどを含まない近世の堆積土と思われる土層（第24図第２・３層）が確認された。こうした土層の状況や、ＳＤ12の南端の掘削時の状況などからみて、近代造成土の広がりとほぼ同じ範囲に近世の落ち込みが存在しているものとみられる。

ただし、ＳＤ12付近のＳＺ３の埋土には遺物がほとんど含まれておらず、ＳＤ５付近の第２・３層の様相とは異なっていた。ＳＺ３は実際にはＳＤ５とＳＤ12付近で別遺構となっている可能性も考えられる。いずれにしても、ＳＤ12が形成された時期からＳＺ３が完全に埋没する近代まで、ＳＺ３付近が地形的に低くなっていた可能性が高い。

また、ＳＺ３の断ち割り時に、第３層の下から地山を掘り込んだ深い土坑状の落ち込みの一部を検出

した（ＳＺ３下層遺構）。この遺構はＳＺ３の検出面から２ｍ近く掘り下げても底に達せず、安全面を考慮して途中で掘削を中止した。ＳＺ３下層遺構はＳＤ５の延長上にあり、ＳＤ５と一連の溝である可能性もある。ただし、ＳＤ５との間には大型の建物基礎が存在しており、その連続性を確認することはできなかった。ＳＺ３下層遺構をＳＤ５と一連のものと見た場合、底面の深さがかなり異なるほか、土坑状の形態を示す点などが問題となる。ただし、ＳＤ12は南端部のＳＺ３と接する部分で急激に深くなっており、ＳＤ５もＳＺ３の下層にあたる部分では急激に深さを増している可能性がある。

ＳＺ３最上層の造成土中からは、ガラス・レンガなどの近代遺物とともに、近世後期の陶磁器や土師質土器、瓦などが出土した。第２・３層中からは、主として19世紀前半の陶磁器や土師質土器、瓦などが出土している。ＳＺ３下層遺構埋土は第３層と同じであり、したがって埋没時期はＳＺ３の第２・３層と同時期と考えられる。

以上に述べてきた遺構は、個別の記述の中でも述べたように、主に屋敷地に関わる遺構であると考えられる。特に、溝についてはほとんどが同じ方向へのびていることが注目される。ただし、礎石や柱穴など、家屋建築に関わる遺構の検出はなかった。第Ⅲ章でも述べたように、調査地全体が近代の建築物の構築に伴ってかなりの削平を被っており、中でもＳＤ15～17とＳＤ８の間の家屋が建っていたと想定される空間部分の削平が著しいことに起因するものと思われる。

本節で報告した近世遺構群から復元される屋敷地の様相については、第Ⅶ章第２節で整理したい。

なお、近世後期の城下町遺跡という性格上、検出された溝や土坑の中には近代の撹乱と区別がつけ難いものもいくつか存在した。したがって、調査時には撹乱と判断したものの遺構の可能性がある溝や土坑が存在する。ＳＤ８の東側の細い溝やＳＤ12東側の土坑については遺構の可能性があるものの、埋土上層でガラスやレンガの包含が確認されたことや、他の遺構との切り合い関係などから撹乱と判断し、掘削を中止している。調査区内では大型の曲げ物による木枠を持つ井戸ないし水溜状のもの（ＳＥ４）も検出されているが、底板下から板ガラス片が多量に見つかっており、近代のものと考えられる。ＳＤ12東側の土坑などもＳＥ４と同じく近代のものである可能性が高い。

註

（１）小林克1986「地下室考」『物質文化』47　物質文化研究会、古泉弘1990『江戸の穴』　柏書房、菅谷通保1990「「地下式坑」の系列と変遷」『東京大学本郷構内の遺跡　法学部４号館・文学部３号館建設地遺跡』　東京大学文学部、堀内明博1992「穴蔵に関する遺構群をめぐってー中世から近世に至る京都検出の地下式土坑群の類型化と変遷ー」『関西近世考古学研究』Ⅲ　関西近世考古学研究会

（２）白山四丁目遺跡調査会1981『文京区白山四丁目遺跡』

（３）真砂遺跡調査会1987『真砂遺跡』

（４）小林1986、古泉1990

（５）近代土坑によって溝が壊されている様子は、土層からも明瞭に観察できた。

第２節　遺物

今回の調査では、久居城下町に関わる近世の遺物が、陶磁器や土師質土器を中心に多量に出土している。以下、遺構ごとに出土遺物のおもだったものについて述べていきたい[1]。

①遺構出土遺物（第25～31図）

ＳＫ２出土遺物（第25～28図29～97）

ＳＫ２からは、全遺構中最も多量の遺物が出土している。その種類や器種も多様である。

磁器（29～51）　磁器は多数出土しており、器種や文様も様々である。

29～34は小坏である。31のように端反りになるものと、30のように丸碗状を呈するもの、そして34のように底部と体部の境界で明瞭な屈曲を持つものがある。31は薄手で作りがよい。文様としては29の羽子板文や31の唐草文がみられる。33の外面にはコンニャク印判による桐と思われる文様が認められる。

35～48は丸碗である。口径10㎝程度のものが多

い。すべて畳付が露胎となっている。外面の染付文様には44の蕪文や48の交差草文など、多様なものが見られる。銘款としては「大明年製」と渦福が認められるが、「大明年製」の文字はいずれも判読不能なほど崩れている。渦福は二重枠線を持つ。

49は変形小皿である。内面には唐草文が型打による陽刻によって描かれ、また外面には丸と線からなる花と思われる文様が染付顔料によって描かれている。口縁端部には口銹が施されている。この個体の破断面には漆状の付着物が認められ、破損に際して補修が試みられていた可能性もある。

50は蓋である。口縁部内側に返りをもつ。外面には微塵唐草文と思われる文様が認められる。かえり付近は露胎となっている。

51は仏餉具である。脚部と口縁端部を欠損する。外面には一条の染付による圏線を除き文様などは認められない。

ＳＫ２から出土した磁器はすべて肥前系磁器であるとみられる。碗の高台の形態や、文様・銘款などからみて、ほとんどが18世紀代に属するものと思われる。中でも18世紀後半頃と考えられるものが目立つ。ただし、29のみは、上絵付けによって文様が施されており、時期が下るものと思われる。この個体は最上層から出土しており、混入品である可能性がある。

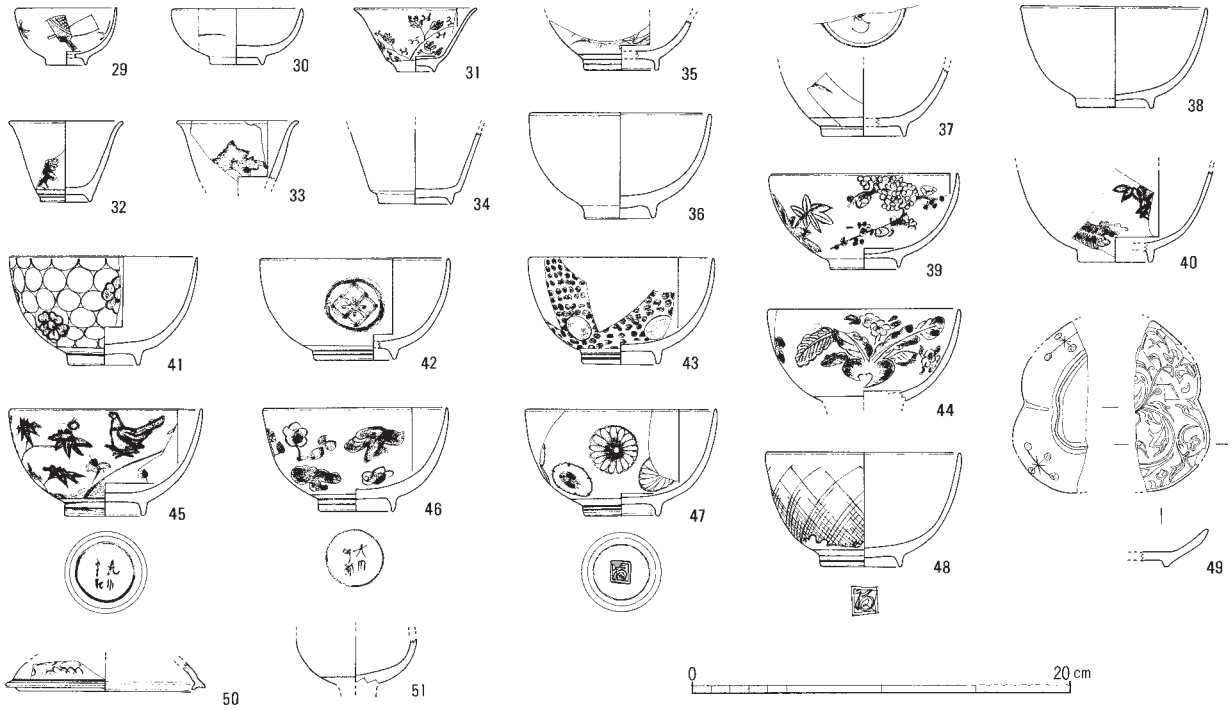
陶器（52～78）　陶器は様々な器種のものが出土している。

52～60は碗である。53は高台畳付以外の全面に灰釉を施し、体部外面には鉄釉による円形の文様を施している。瀬戸産で、18世紀後半のものと思われる。54は腰錆碗で瀬戸産と考えられる。18世紀前半頃のものと思われる。55は肥前産と考えられる碗で無文のものである。ただし、外面の一部には釉の色調に変化が認められる。56～58は肥前産の刷毛目碗である。内外面に打刷毛目による文様を施す。59は底部と体部の境界に明瞭な屈曲をもち、体部から口縁部へは比較的直線的にのびる。信楽産のいわゆる小杉碗であると思われる。18世紀後半～19世紀初頭頃のものであろう。

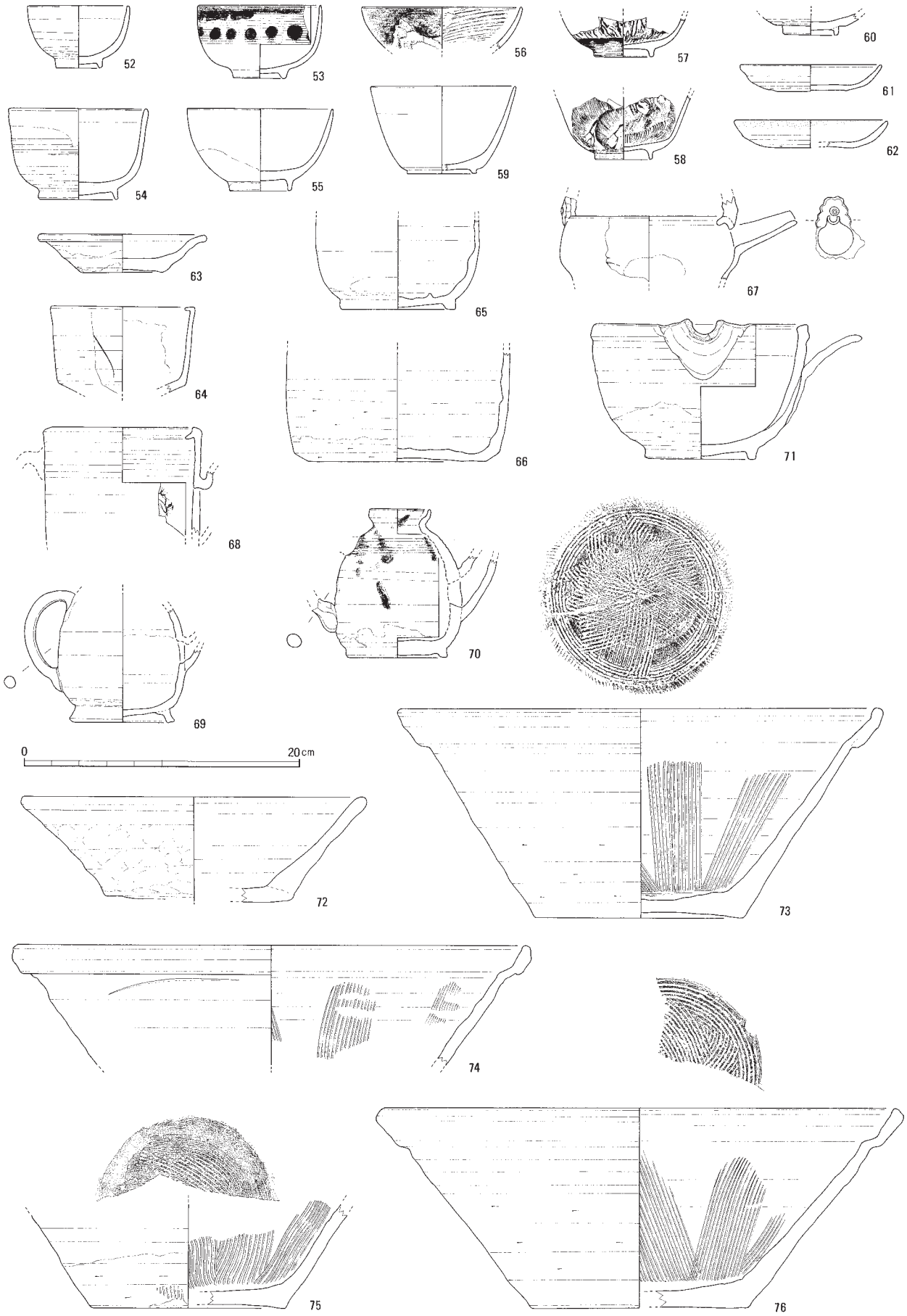
61・62は灯明皿である。外面下半部はヘラケズリによって整形されている。62の口縁部にはススが濃く付着している。いずれも美濃産と考えられる。

63は壺蓋と思われる。口縁部は外反し、底部外面には糸切り痕が残る。内外面の底部付近以外に柿釉を施している。18世紀前半頃の瀬戸産と考えられる。

64は蓋物の身である。口縁部は内側へ突出し、腰部は明瞭に屈折する。信楽産であり、18世紀後半～19世紀前葉のものと考えられる。



第25図　ＳＫ２出土遺物実測図①（1:4）



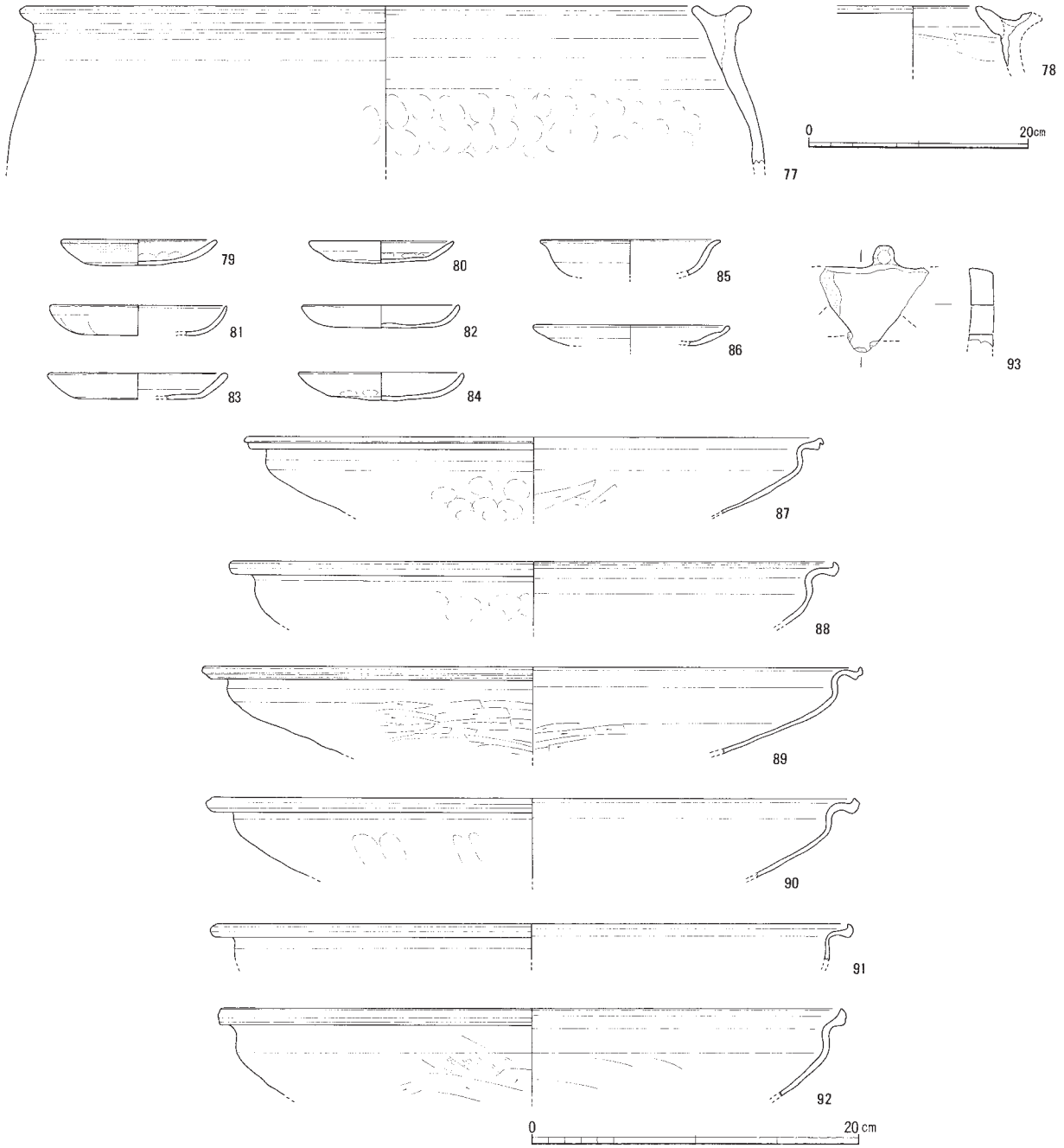
第26図　ＳＫ２出土遺物実測図②（1:4）

65は徳利である。底部のみが遺存している。高台は削り出しによって成形されている可能性が高い。外面には鉄釉が施されているが、高台付近は釉を掛け残すことによって露胎としている。高台や体部の形態などから18世紀後半～19世紀初頭の美濃産であると考えられる。

66は有耳壺である。底部のみが遺存している。底部外面には糸切り痕が残っており、体部外面はヘラケズリによって整形する。外面には鉄釉が施されている。18世紀後半～19世紀初頭の美濃産と考えられる。

67は土瓶または瘤鍋である。残存率は低いが片口状の注口をもち、一体成形の把手が付けられている。把手の基部には花を象ったと思われる装飾が付けられている。また、体部には連続した凹みが付けられるなど、装飾性が高い。

68は水注である。筒状の体部をもち、口縁部は内側へ突出する。外面には摺絵によると思われる文様がごく一部に遺存している。17世紀後半～18世紀前半の美濃産と考えられる。



第27図　ＳＫ２出土遺物実測図③（1:4、77・78のみ1:6）

69・70は汁次である。いずれも小型の徳利状の体部を持ち、半環状の把手を貼り付ける。両者ともに外面と内面上半部には釉を施しているが、外面底部付近は釉を掛け残すことによって露胎となっている。また、外面上半部には別色の釉を散らして文様としており、70では灰釉の上に緑釉を施している。いずれも美濃産で、69は18世紀前半、70は17世紀後半頃のものと考えられる。

71は片口である。体部は碗形をなし、口縁端部は肥厚する。見込みにはトチンの痕跡が残る。内外面には灰釉を施すが、底部付近は露胎となっている。18世紀後半～19世紀初頭の瀬戸産と考えられる。

72は練鉢である。外面にはユビナデやユビオサエによって成形された痕跡が明瞭に残る。軟質の焼成で釉薬は施されておらず、常滑産のいわゆる「赤もの」であると考えられる。

73～76は擂鉢である。いずれも類似した特徴を持つものである。口縁端部は肥厚し、口縁部直下に屈曲部をもつ。また、底部には糸切り痕が残る。内外面には錆釉が施されている。底部が遺存しているものが少ないため、見込みの摺り目も共通するかどうかは不明であるが、73のように放射状に施されたものが多いものと思われる。また、73などは内面がかなり摩耗しており、使い込まれていることが窺われる。これらの擂鉢は瀬戸産であると考えられる。

77・78は甕である。内傾する口縁部と、やや上方に突出する鍔部が認められる。いずれも焼成は軟質で釉薬は施されておらず、常滑産のいわゆる「赤もの」である。口縁部から体部への屈曲度合いなどからみて、おそらく18世紀後半のものと考えられる。

土師質土器（79～92）　土師質土器としては小皿と焙烙が出土している。

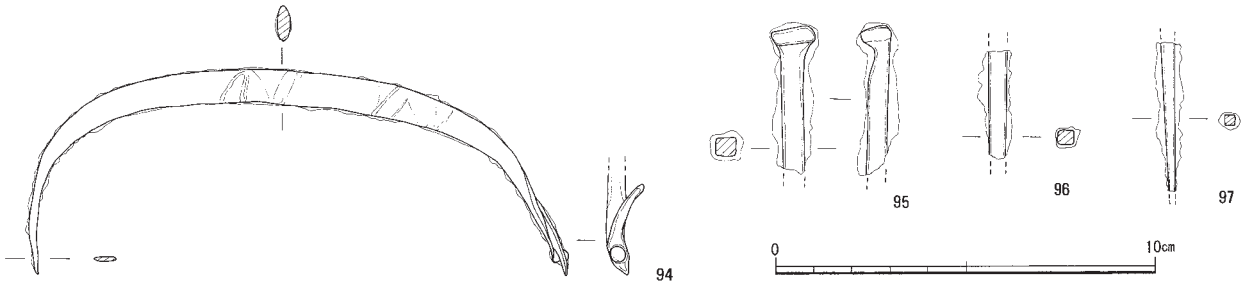
79～86は小皿である。小皿には多様な形態のものがある。79～84は最も多い形態のもので、口縁端部を丸く収める。内外面ともナデによって器面を整えているが、底部の内外面にはユビオサエの痕跡が残る。80・83のように口縁部と底部の境界が明瞭に屈曲するものもある。79は口縁部にススが濃密に付着しており、灯明皿として用いられたものと思われる。85はやや特異な形態のもので、口縁端部が強く外反する。器高はやや高い。86は口縁部内面をやや強くヨコナデすることによって、口縁端部がやや内湾気味になっているものである。内外面はナデにより整形しているが、器壁はややいびつであり、手捏ね成形と思われる。

87～92は焙烙である。焙烙は体部が薄いことから破片化しやすく、そのため出土した破片があまり接合できず、図化できたものは口縁部付近に限られる。いずれも口縁端部を上方につまみ上げ、頸部は強く屈曲する。口径は多くが36～40㎝の範囲に収まり、法量においても比較的共通性が高い。外面調整にはいくつかの種類が見られ、89のようにケズリが明瞭に用いられているものと、87・90などのようにユビナデが目立つものとが存在しており、また92のように一部にハケないしはイタナデ状の痕跡が残るものもある。

瓦質土器（93）　93は瓦質土器の破片である。口縁部の破片であり、口縁直下に三角形のスカシを持つことが分かる。また、口縁端部には直立する突起が付けられている。器種は不明であるが、火鉢類ではないかと思われる。

瓦　瓦は多く出土したが、瓦当は出土していない。桟瓦の破片が多く認められた。

銅製品（94）　94は土瓶の把手状の銅製品である。断面形は楕円形で、不明瞭ながら竹節状の文様が鋳出されている。両端は薄くのばされ、一端には小型



第28図　ＳＫ２出土遺物実測図④（1:2）

の鋲によって別の小型部品が取り付けられている。この小型部品は、もともと可動式のものであると思われる。もう一端には鋲が打ち込まれていた痕跡は認められず、小型部品は片側のみに付けられていた可能性が高い。

鉄製品（95～97）　95～97は小型の釘である。95は釘頭が扁平でやや幅広な方形を呈しており、釘頭を鍛打によって作り出しているものと思われる[2]。断面形は一辺0.5㎝の方形を呈する。96・97は細身で、両者とも釘頭を欠損する。

石製品　石製品としては、長辺10㎝ほどの方形の板石が出土している。片麻岩であると思われる。用途は不明であるが、同様の板石が表土掘削中にも出土している。

以上のＳＫ２出土遺物の多くは、18世紀代に位置づけられる。中でも18世紀後半～19世紀初頭頃に属すると考えられる陶磁器類が目立つことから、ＳＫ２の埋没時期は18世紀末～19世紀初頭であると思われる。

ＳＫ６出土遺物（第29図98・99）

磁器（98・99）　98・99は丸碗である。98には外面に草花文と思われる文様が描かれている。99は底部の小片であり、文様の有無は不明である。両者とも高台畳付は露胎となっている。これらの磁器は、いずれも18世紀代の肥前系磁器と考えられる。

ＳＫ10出土遺物（第29図100～116）

ＳＫ10からは、ＳＫ２の次に多くの遺物がまとまって出土している。器種も多様である。

磁器（100～103）　100は小坏である。文様は描かれていない。101～103は丸碗である。102には外面に草木文が描かれ、やや崩れた「大明年製」の銘款が認められる。103の外面には草花文が描かれている。これらの磁器はいずれも肥前系磁器で、器形や文様などからみて18世紀代のものと思われる。

陶器（104～112）　104～106は碗である。104は底部の破片で、18世紀後半の瀬戸産と考えられる。105は肥前産の刷毛目碗、106は同じく肥前産の京焼風の碗で、外面には鉄絵で文様が描かれている。

107は灯明皿である。底部外面には糸切り痕が残る。外面はヘラケズリによって整形しており、内面はナデによって平滑に仕上げている。口縁部にはススが濃く付着している。18世紀後半の美濃産であると考えられる。

108は小型の皿である。口縁部は平らな底部から屈曲してほぼ上方へ立ち上がる。高台は低い。底部外面を除き灰白色の釉薬が施されており、見込みには草文と雁と思われる鳥が飛ぶ様子が鉄絵で描かれている。18世紀後半の瀬戸産と考えられる。

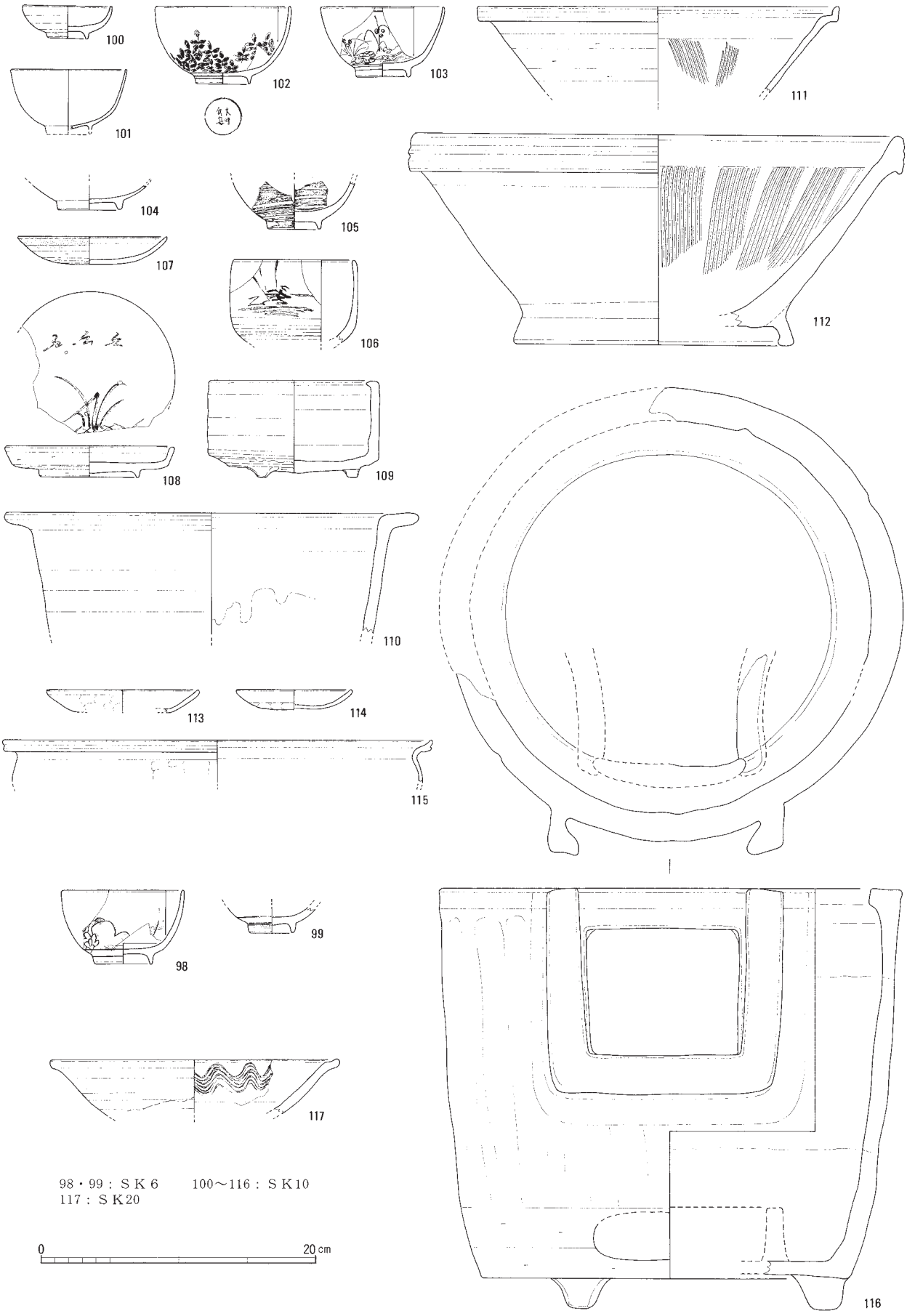
109は筒形香炉である。底部外面には突起状の脚が貼り付けられており、現状では２箇所のみが残存しているが、もとは３箇所に付けられていたものと思われる。底部外面と見込みを除き、浅黄色の釉が施されている。18世紀の美濃産であると思われる。

110は植木鉢である。北東側配管部から出土している。口縁部は強く外方へ屈折する。内外面には暗褐色の鉄釉が厚く施されている。18世紀後半の瀬戸産と考えられる。

111・112は擂鉢である。111は小型の擂鉢で、薄手の作りである。口縁部は屈曲し上方に立ち上がる。全面に錆釉が施される。18世紀代の瀬戸産と考えられる。112は土師質の軟質な焼成で、釉薬は施されていない。口縁部は肥厚しており、外方に面を作って凹線をめぐらせている。底部にはやや高い高台が貼り付けられている。内面の摺り目は使用によって摩耗し、底面付近では不明瞭となっている。形態的には備前・堺・明石などで生産されていたものと類似しているが、焼成や高台の形態などに違いが認められる。焼成という点では、常滑で生産されたいわゆる「赤もの」に類似しているといえよう。

土師質土器（113～116）　113・114は小皿である。115は焙烙である。口縁端部はやや上方へつまみ出され、頸部は強く屈曲する。体部はやや胴が張る。外面にはイタナデ状の調整が見られ、ススが付着している。

116は焜炉である。口径33.4㎝、高さ30.5㎝の円筒形を呈し、底部外面には３つの突起状脚をもつ。上部には方形の窓が開けられ、その周囲には凹状の溝を持つ桟が付けられており、板状のものをはめ込めるようになっている。また、窓の下の底部付近には風口が開けられている。破損しているため風口の形状は不明であるが、楕円形状をなすものと思われる。この風口の内側の底部内面には底部中心に向



第29図　ＳＫ６・10・20出土遺物実測図（1:4）

かって剥離痕が認められ、衝立状のものが貼り付けられていたことが窺われる。内面にはススの付着が認められるが、顕著な被熱痕は認められない。この焜炉は、18世紀前半頃のものと考えられる[3]。

以上のＳＫ10出土遺物には筒形香炉や植木鉢、焜炉など特色のある遺物が多いが、いずれも18世紀代に比定できよう。中でも18世紀後半頃の遺物が多く認められる。

瓦　瓦は少量出土したが、いずれも小片で瓦当は出土していない。

ＳＫ20出土遺物（第29図117）

陶器（117）　117は鉢である。口縁部はやや外方へ屈曲する。全面に鉄釉が施され、内面には刷毛目による波状文が施されている。肥前産で、おそらく18世紀代のものと考えられる。

ＳＤ５出土遺物（第30図118～125）

磁器（118・119）　119は端反碗で、118はその蓋である。染付の色合いなどから見て、両者はセットをなすものではないと考えられる。119は口縁端部が緩やかに外反し、また高台の内側と外側で器壁の厚さに大きな差がある。外面には横帯と垂下する短い棒状の文様が描かれている。118は口縁端部がわずかに外反している。外面には花文と思われる文様が認められる。これらの磁器はいずれも瀬戸産ないし美濃産と考えられ、19世紀前半に位置づけられよう。

陶器（120～124）　陶器は小片が多いが、様々な器種のものが出土している。

120は小皿の底部片である。高台は小さく低い。内面には鉄絵で草と鳥と思われる文様が描かれている。この図案はＳＫ10出土の小皿（108）と同じであり、この両者は大きさもほぼ同じである点からみても、おそらくセットをなすものであろう。

121は黄瀬戸鉢ないしは鉄絵鉢の口縁部である。内外面に灰釉が施されており、一部には緑釉も施されている。17世紀代の美濃産であると考えられる。

122は片口の底部と思われる。内面には灰釉が施されている。美濃産と考えられる。

123は半胴の底部と考えられる。内外面に柿釉が分厚く施されている。

124は擂鉢の口縁部である。口縁部は弱く屈曲する。錆釉が施されている。19世紀前半の瀬戸産であると思われる。

土師質土器（125）　125は小皿である。内外面ともにユビナデやユビオサエの痕跡が顕著に残っており、手捏ねで成形されているものと思われる。

ＳＤ８出土遺物（第30図126～133）

磁器（126）　126は端反碗である。器壁はやや厚く、口縁部の外反は緩い。外面には縦縞文を描いている。19世紀代の瀬戸産と考えられる。

陶器（127～131）　127は腰錆碗の底部片である。18世紀代の瀬戸産と考えられる。

128は有耳壺の口縁部である。18世紀後半～19世紀初頭の美濃産と考えられる。

129は土瓶の口縁部である。把手や注口部分は欠損している。19世紀前半の瀬戸産と考えられる。

130は小瓶である。かなりの小型品であり、ミニチュア状のものである。底部外面には糸切り痕が残る。19世紀前半の瀬戸産と考えられる。

131は鉢状の製品である。素焼きで釉は施されていない。常滑産の陶器と考えられる。

瓦（132）　132は連珠三つ巴文の軒桟瓦である。右回りの巴文の周囲に８個の珠文を配する。文様部の突出度はあまり高くない。

土製品（133）　133は小型の瓶の蓋状のものである。頂部にはつまみが付き、その周囲には浮き彫り状に花弁が表現されている。焼成は土師質で、外面には緑釉が施されている。

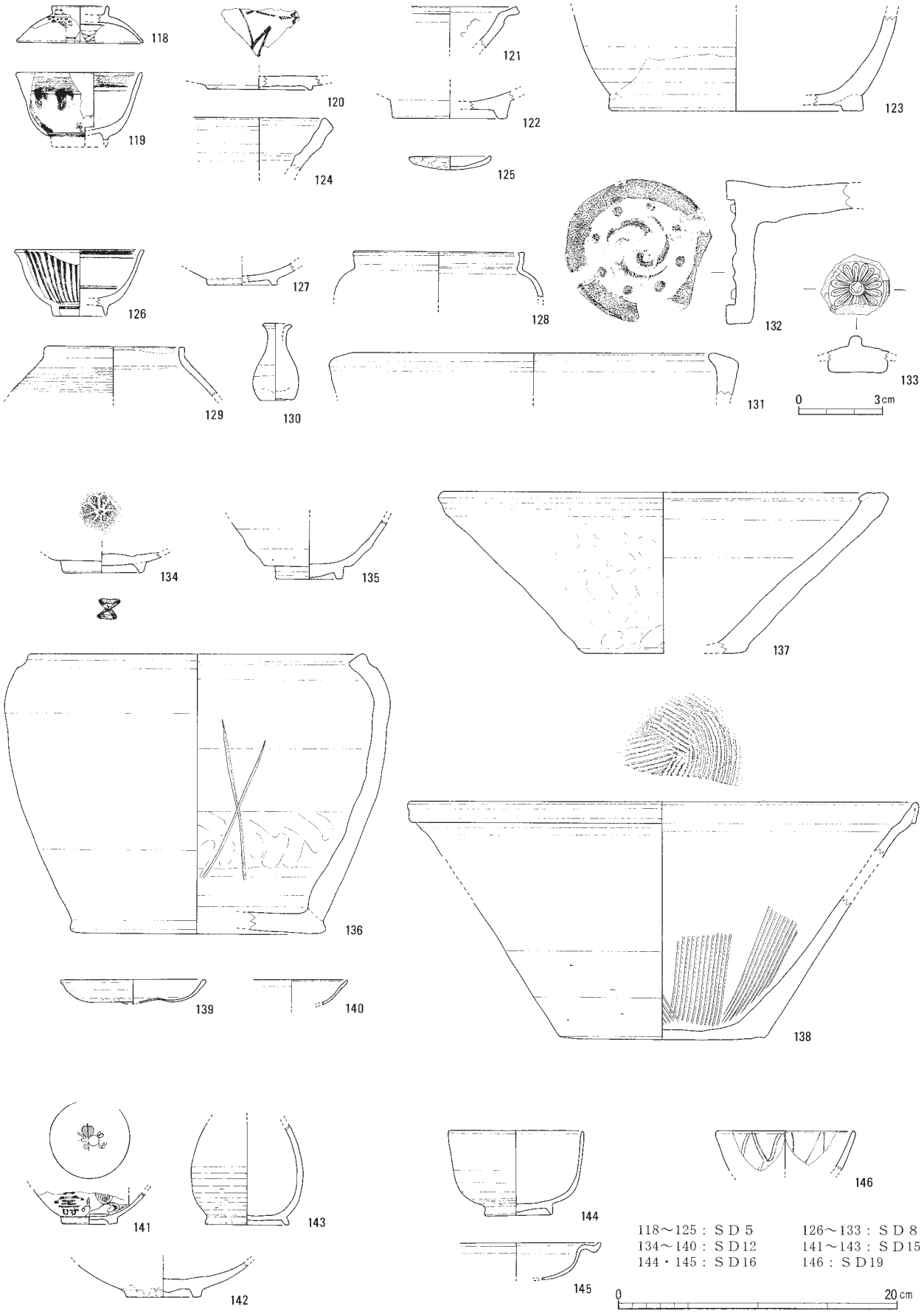
ＳＤ12出土遺物（第30図134～140）

陶器（134～138）　134は輪禿皿である。見込みの中央部には花文が印刻されている。高台内面には記号が墨書されている。17世紀前半の瀬戸産と考えられる。

135は天目茶碗である。内外面には鉄釉が厚く施されている。底部外面には明瞭に屈曲する部分があり、体部はそこからやや直線的に外方へ開いていく。17世紀後半の瀬戸産と考えられる。

136は火消し壺と考えられるものである。内面に炭化物などの付着は認められない。内外面とも回転ナデによって整形している。内面には×字状のヘラ記号が認められる。釉は施されていない。常滑産と考えられる。

137は練鉢である。口縁端部には強いナデによっ



第30図　ＳＤ５・８・12・15・16・19出土遺物実測図（1:4、133のみ1:2）

て面が作られており、また体部外面には全体にユビオサエの痕跡が残る。焼成は土師質で釉は施されておらず、常滑産の「赤もの」である可能性が高い。

138は擂鉢である。口縁端部は外面に折り返すことによって肥厚させているが、口縁部直下の屈曲は弱い。内外面に錆釉が施されている。17世紀後半の瀬戸産と考えられる。

土師質土器（139・140）　139・140は小皿である。いずれも口縁端部を丸く収めるが、140はやや口縁が外傾している。

ＳＤ15出土遺物（第30図141～143）

磁器（141・142）　141・142は碗の底部である。141の高台はやや幅広である。外面には壽字文と草花文と思われるものが描かれている。見込みには宝文が描かれている。142は明オリーブ灰色の釉薬を厚く施しているが、高台付近と内面には釉が施されていない。いずれも肥前系磁器で、141は19世紀前半頃のものと考えられる。

陶器（143）　143は小瓶である。口頸部を欠損する。外面には灰釉を施すが、高台付近は露胎となっている。18世紀後半の美濃産と考えられる。

ＳＤ16出土遺物（第30図144・145）

陶器（144）　144は丸碗である。内外面に灰釉が施されるが、外面の腰部以下は釉が施されていない。釉薬にやや発泡している部分が認められ、二次的に被熱しているようである。瀬戸産で、18世紀中頃から後半のものとみられる。

土師質土器（145）　145は焙烙である。口縁端部は上方へつまみ上げられ、頸部は強く屈曲する。体部内外面はナデによって整形されており、不整方向のユビナデやユビオサエの痕跡が残る。外面にはススが付着している。

ＳＤ19出土遺物（第30図146）

磁器（146）　146は丸碗の口縁部である。小片であるが、外面に二重の網目文が描かれており、内面にも網目文と思われる文様が認められる。肥前系磁器で、おそらく18世紀代のものと考えられる。

ＳＺ３出土遺物（第31図147～160）

磁器（147～153）　147・148は筒形碗である。両者とも底部のみが遺存する。

149は蕎麦猪口である。蕎麦猪口は今回の調査では出土個体数が少なく、図化できたのはこの１点のみである。

150は碗である。口縁部が直線的に開く。青磁染付碗であり、外面には青磁釉が施されている。口縁部内面には四方襷文が描かれる。

151は蓋である。内面にはかえりが付く。外面には文様があるが、小片のため詳細は不明である。

152は皿である。蛇ノ目凹形高台を持ち、見込みには楼閣山水文と思われる文様が描かれている。

153は鉢である。腰が張った碗状の体部を持ち、器高は高い。外面には草文が描かれている。

これらの磁器の多くは18世紀後半～19世紀前半の肥前系磁器であるが、152は19世紀前半の美濃産であると考えられる。また、148についても19世紀前半の瀬戸産である可能性が高い。

陶器（154～157）　154は碗または鉢である。肥前産の京焼系のものである。155は鉢である。同じく肥前産の刷毛目鉢で、大型品である。外面下半部には釉が施されていない。

156は有耳壺の底部と思われる。外面には灰釉が施されている。18世紀後半～19世紀前半頃の美濃産であると考えられる。

157は水甕である。口縁端部は内面に突出する。外面には文様を凹凸によって表現し、緑釉など数種類の釉薬を施している。19世紀前半の瀬戸産と考えられる。

土師質土器（158）　158は焙烙の口縁部である。口縁端部の上方へのつまみ上げは弱い。

瓦質土器（159）　159は瓦質の焙烙の口縁部である。小片であり、全体の形状は不明であるが、口縁部直下に鍔状の突出部を持つ。ススの付着などは認められない。19世紀のものである可能性が高い。

瓦（160）　160は軒桟瓦である。中心飾りは×形の文様の上に珠文を６個配している。唐草文はかなり簡略化されている。

以上のＳＺ３出土遺物は、表土掘削時や遺構検出中、または断ち割り時に出土したものであり、最上層の近代までの遺物を含む層から出土したものや、ＳＺ３下層遺構から出土したものが含まれている。149・154・158・159は最上層から出土した遺物で、また147・148・151～153・155～157はＳＺ３下層遺

構埋土と思われる層から出土した遺物である。ＳＺ３下層遺構埋土から出土したと思われる遺物をみると、19世紀前半に属するものが多いようである。

②遺構外出土遺物（第32図）

以上に述べてきた遺構内出土遺物の他にも、表土掘削中や遺構検出中などに多数の近世の遺物が出土している。その中でも、特徴的なものについて述べておく。

磁器（161～172）　161は小坏である。口縁部はやや外反する。外面には松と思われる文様が描かれており、口縁部内面には四方襷文が描かれている。また、見込みには手描きの五弁花文がみとめられる。今回出土した磁器のうち、五弁花文が認められるものはこの個体のみである。18世紀後半の肥前系磁器と考えられる。

162～167は丸碗である。他にも多数の破片が出土しているが、銘款や特徴的な文様を持ったものを図示した。163・166は見込みに蛇ノ目釉剥ぎが認められる。出土した磁器のなかで蛇ノ目釉剥ぎが認められるのはこの２個体のみである。銘款としては、164・165のような二重枠で囲んだ渦福と、166・167のような崩れた「大明年製」とが確認できる。文様には、164の松竹梅文や162の輪宝文などがある。いずれも18世紀後半～19世紀初頭頃の肥前系磁器と考えられる。

168は広東碗である。高台は高く、見込みには文様が認められる。19世紀前半の肥前系磁器と考えられる。今回の調査で出土した広東碗の個体数はごく少数である。

169は筒形碗であると思われる。口縁部付近の器壁はやや厚さを増し、口縁端部には不明瞭な面を作る。外面に蛸唐草文、口縁部内面に四方襷文が描かれている。

170は蓋である。広東碗と組み合うものであろうか。器壁はやや厚く、口縁端部は外反しない。つまみ内面には異体字風の銘款が認められる。外面には梅と思われる花文が描かれる。19世紀前半の瀬戸・美濃産と考えられる。

171・172は皿である。171は蛇ノ目凹形高台を持ち、見込みには帆掛船が描かれている。19世紀前半の美濃産と考えられる。172は底部の小片であるが、「富貴長春」の銘款を持ち、見込みには環状松竹梅文が描かれている。18世紀後半頃の肥前系磁器と考えられる。

以上のほかに、「大明成化年製」の銘款をもつ碗の底部片が出土している（写真図版16）。この種の銘款をもつものは、今回の調査ではこの１点のみしか出土していない。また、小片で図化はできなかったものの、陶胎染付の破片も数点出土している。

陶器（173～176）　173・174は灯明皿である。174は受付き灯明皿で、ほぼ完形である。受け部の開口部は方形に切り取られている。173・174ともに錆釉が施されており、またススの付着はほとんど認められない。いずれも18世紀後半の美濃産と考えられる。

175は土瓶と思われる。把手は亀を象ったような形状をなす。外面には鉄釉が施されている。18世紀後半～19世紀前半の瀬戸産と考えられる。

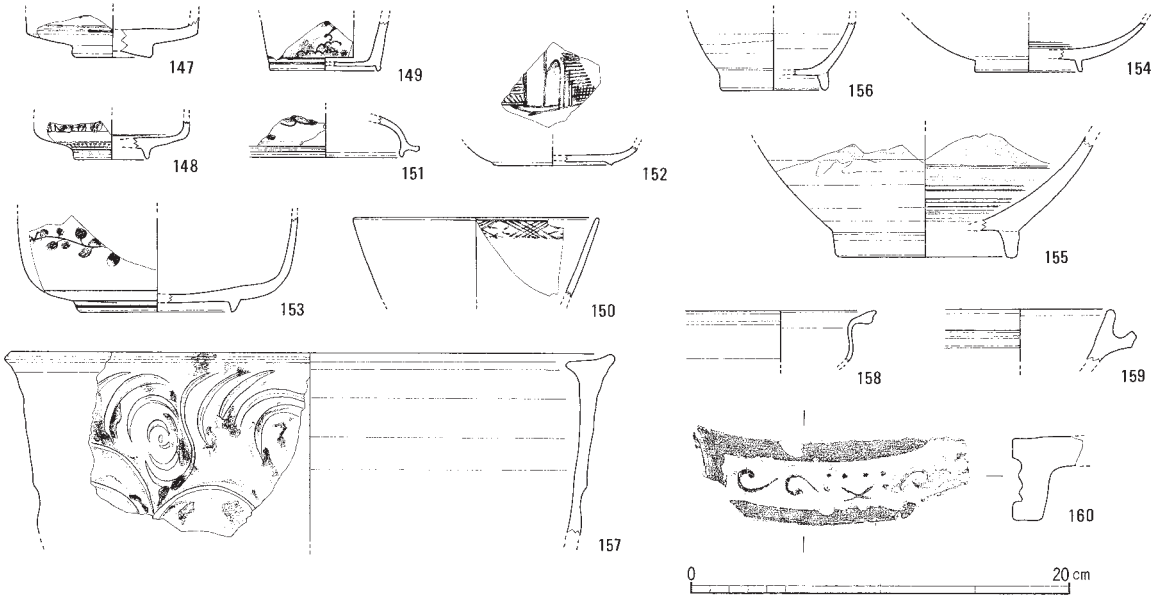
176は擂鉢の底部である。見込みには△状と×状とを組み合わせた摺目が認められる。摺目は使用によってかなり摩滅している。

土師質土器（177）　177は焙烙である。口縁端部は上方につまみ上げられる。内外面ともイタナデ状のヘラケズリによって整形され、体部は薄く仕上げられている。

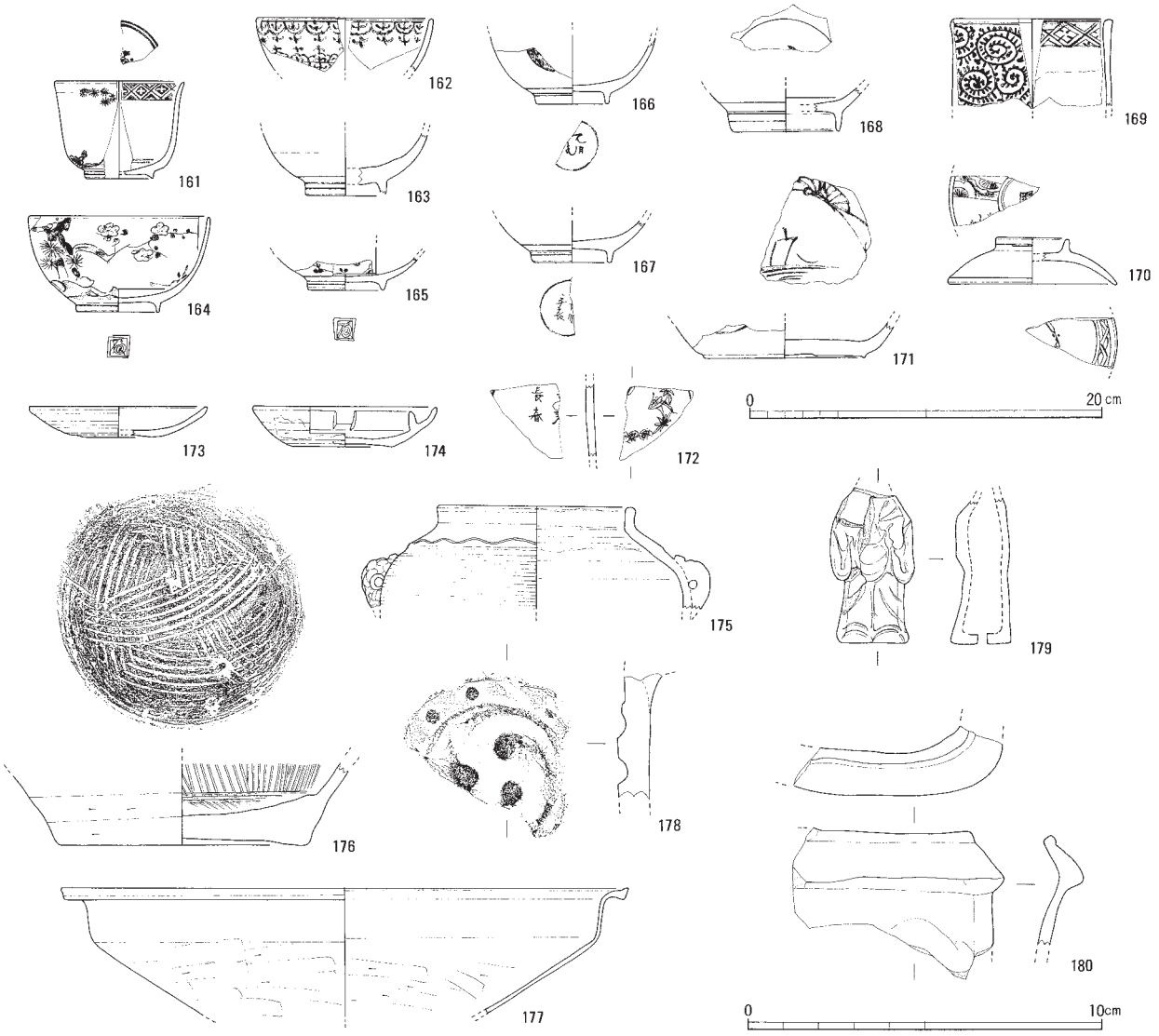
瓦（178）　178は連珠三つ巴文の軒丸瓦もしくは軒桟瓦の瓦当部分である。中央部には左回りの巴文を配する。巴文の外側は二重の圏線で区画されており、その区画内には珠文を配している。ＳＤ８から出土した132とは異なる文様構成となっている。丸瓦ないし桟瓦との接合部にはヘラで深い刻み目を入れて接合を強化している。

土製品（179・180）　179は土製人形である。首より上を欠損しているが、服装や体前面中央部の円形状の突出部分などからみて、西行を表現したものであると考えられる。２枚合わせの型作りで成形されており、内部は中空である。底面には小孔が開けられている。胎土は灰白色で、いわゆる白色系のものに属し、京都あるいは瀬戸・美濃の土で作られた可能性がある[(4)]。

180は用途不明の土製品である。胎土は肌理が細かく浅黄橙色を呈する。小片で全体の形状は不明で



第31図　ＳＺ３出土遺物実測図（1:4）



第32図　遺構外出土遺物実測図（1:4、179・180のみ1:2）

あるが、四角い箱形をなすものと思われる。口縁部下の屈曲部は一見屋根を表現したようにも見えることから、家や塀などを模した箱庭道具である可能性も考えられる。

註

（1）陶磁器の器種や編年、産地、暦年代観などについては藤澤良祐氏にご教示をいただいたほか、以下の文献を主として参考にした。

中野晴久1986「近世常滑焼における甕の編年的研究ノート」『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅱ　常滑市教育委員会、大橋康二1989『肥前陶磁』考古学ライブラリー55　ニュー・サイエンス社、堀内秀樹1997「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1　東京大学埋蔵文化財調査室、東京大学遺跡調査室（編）1990『東京大学本郷構内の遺跡　医学部付属病院地点』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3、大橋康二1994『古伊万里の文様－初期肥前磁器を中心に－』　理工学社、瀬戸市1998『瀬戸市史』陶磁史篇6、九州近世陶磁学会（編）2000『九州陶磁の編年』、畑中英二2003『信楽焼の考古学的研究』　サンライズ出版、（財）瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター（編）2006『江戸時代のやきもの－生産と流通－』記念講演会・シンポジウム資料集

（2）金箱文夫1984「近世の釘－川口市赤山陣屋跡の事例を中心に－」『物質文化』43　物質文化研究会

（3）類似した形状のものが東京都真砂遺跡・東京大学構内遺跡御殿下記念館地点などから出土している。暦年代観については以下の文献を参考にした。

小林謙一1991「江戸における近世瓦質・土師質焜炉について」『江戸在地系土器の研究』Ⅰ　江戸在地系土器研究会

（4）安芸毬子1994「成形技法から見る土人形」『江戸在地系土器の研究』Ⅱ　江戸在地系土器研究会

遺構名	性格	時期	グリッド	長さ・長径（m）	幅・短径（m）	深さ（m）	出土遺物	備考
ＳＤ１	溝	古墳時代後期？	ｂ１・２	(6.7)	2.9	0.8	―	
ＳＫ２	地下式土坑	江戸時代後期	ｃ２・３	6.1	2.5	1.4	磁器・陶器・土師質土器・瓦・鉄釘・銅製品・漆膜等	ＳＤ12を切る・ＳＤ５に切られる
ＳＺ３	落ち込み	江戸時代中期～近代	ｂ２～５、ｃ３	(12.8)	(3.8)	(1.4)	磁器・陶器・土師質土器・瓦・ガラス等	一部のみ掘削・下層遺構はＳＤ５の一部か
ＳＥ４	井戸	近代	ｅ３・４	―	―	―	陶器・ガラス等	遺構から除外
ＳＤ５	溝	江戸時代末	ｃ～ｅ２	(8.9)	1.0	0.6	磁器・陶器・土師質土器	ＳＺ３へ接続？
ＳＫ６	土坑	江戸時代後期	ｂ５	(2.5)	1.2	1.0	磁器	
ＳＫ７	古墳周溝？	古墳時代後期？	ｅ４・５	5.8	(0.8)	0.6	―	
ＳＤ８	区画溝	江戸時代末	ａ～ｅ12	(16.2)	0.9	0.4	磁器・陶器・土師質土器・瓦等	
ＳＤ９	古墳周溝	古墳時代後期	ｂ10～12、ｃ９～13	(15.0)	5.0	1.0	須恵器・土師器・埴輪・山茶碗	
ＳＫ10	地下式土坑	江戸時代後期	ｄ11・12、ｅ11・12	(6.4)	3.2	1.7	磁器・陶器・土師質土器・瓦	
ＳＫ11	土坑	鎌倉時代～室町時代？	ｃ12、ｄ11・12	(4.2)	3.1	0.7	土師器	土師器は混入か
ＳＤ12	区画溝	江戸時代中期	ｂ～ｅ３	(11.6)	2.4	1.0	磁器・陶器・土師質土器・埴輪	ＳＺ３へ接続？
ＳＤ13	溝	江戸時代後期～末	ｂ７	(3.3)	0.7	0.2	陶器・土師質土器	
ＳＫ14	土坑	江戸時代末	ｅ５	2.1	(0.7)	0.6	陶器・瓦	
ＳＤ15	区画溝	江戸時代末	ｃ～ｅ１	(5.1)	0.4	0.3	磁器・陶器	
ＳＤ16	区画溝	江戸時代後期	ｃ～ｅ１	(9.0)	0.4	0.6	陶器・土師質土器	
ＳＤ17	区画溝	江戸時代末	ｃ～ｅ２	(8.4)	0.3	0.1	磁器	やや不整形
ＳＺ18	古墳周溝？	古墳時代後期	ｃ６～８、ｄ７・８	7.3	4.3	0.1	須恵器・土師器	
ＳＤ19	溝	江戸時代後期	北東側配管部	(1.3)	0.5	―	磁器	
ＳＫ20	土坑	江戸時代末	北東側配管部	(3.4)	(2.1)	―	陶器	未掘

※（　）内の数値は残存長

第１表　遺構一覧表

遺物観察表凡例

※№は遺物図版・写真図版中の各遺物の番号と対応する。
※実測番号は実測図作成時に各遺物の実測図に付与した整理番号である。
※出土遺構の欄中に―もしくは小文字のアルファベットと数字の組み合わせが記入されているものは、表土掘削中に出土した遺物で、アルファベットと数字は出土したグリッドを示している。
※須恵器のうち、壺・提瓶については底部径の欄に体部最大径を記している。
※胎土・釉薬などの色調は『新版　標準土色帖』に拠る。釉薬の色調などは合致する色名が存在しない場合もあるが、その場合は最も近似すると思われる色名を記している。
※色調欄の「胎」は胎土、「釉」は釉薬の色調を表す。また、「表」は表面、「内」は内面、「外」は外面の色調を表す。なお、磁器については透明釉であるため表面の色調を記している。
※土器・陶磁器等の残存率は、基本的に口縁部ないし底部・体部の周を12分割し、そのうちの残存度を記している。

図	№.	写真図版	実測番号	種別	器種	出土遺構	口径(cm)	底部径(cm)	器高(cm)	胎土	色調	残存率	備考
第11図	1	7	006-03	須恵器	坏身	—	—	—	—	密	灰N4/	2/12	ＳＺ18に伴うか
第11図	2	7	006-04	須恵器	坏身	—	—	—	—	密	灰N5/	3/12	
第11図	3	7	006-01	須恵器	坏蓋	—	—	—	—	密	灰5Y5/1	1/12	
第11図	4	7	006-02	須恵器	坏蓋	ｃ５	—	—	—	密	灰N6/	1/12	
第11図	5	7	003-06	須恵器	直口壺	ＳＤ９	—	16.6	—	密	外：灰N4/・黄灰2.5Y6/1 内：黄灰2.5Y5/1	5/12	
第11図	6	7	003-01	須恵器	装飾付脚付壺	ＳＤ９	—	6	—	密	外：暗灰N3/ 内：灰N4/	2/12	子壺
第11図	7	7	003-05	須恵器	装飾付脚付壺	ＳＤ９	—	—	—	密	外：暗灰N3/ 内：灰N4/	1/12	親壺
第11図	8	7	003-04	須恵器	装飾付脚付壺	ＳＤ９	—	—	—	密	灰N4/	2/12	脚部
第11図	9	7	002-01	須恵器	装飾付高坏形器台	ＳＤ９	27.6	—	—	密	外：暗灰N3/ 内：灰白5Y7/1	4/12	坏部
第11図	10	8	001-03	須恵器	高坏形器台	ＳＤ９	—	—	—	密	灰N5/	1/12	脚部
第11図	11	8	001-01	須恵器	高坏形器台	ＳＤ９	—	—	—	密	灰N5/	1/12	脚部
第11図	12	8	001-02	須恵器	高坏形器台	ＳＤ９	—	26	—	密	黄灰2.5Y5/1	1/12	脚部
第11図	13	8	003-03	須恵器	装飾付高坏形器台	ＳＤ９	—	—	—	密	黄灰2.5Y5/1	—	子持
第11図	14		003-02	須恵器	器台？	ＳＤ９	—	—	—	密	灰5Y5/1	—	
第11図	15	8	004-01	須恵器	提瓶	ＳＤ９	—	20.8	—	密	外：にぶい黄橙10YR7/2 内：灰黄褐10YR6/2	5/12	
第12図	16	9	005-03	土師器	甕	ＳＤ９	—	—	—	密	外：にぶい赤褐5YR5/4 内：にぶい黄橙10YR6/3	1/12	
第12図	17	9	005-04	土師器	台付甕	ＳＤ９	—	9.3	—	密	にぶい黄橙10YR7/3	12/12	
第12図	18	9	006-06	土師器	直口壺	ＳＺ18	8.8	—	—	密	にぶい橙7.5YR7/4	2/12	
第12図	19	9	006-05	土師器	直口壺	ＳＺ18	—	—	—	密	橙7.5YR6/6	2/12	
第12図	20		006-07	土師器	高坏？	ＳＤ12	—	—	—	密	にぶい橙5YR6/4	12/12	
第12図	21	9	006-08	土師器	短頸壺	ＳＺ18	—	—	—	密	灰黄2.5Y7/2・浅黄橙10YR8/3	2/12	
第13図	22	9	007-01	埴輪	円筒埴輪	ＳＤ９	—	—	—	密	浅黄橙10YR8/4	—	ヨコハケ
第13図	23	9	007-04	埴輪	円筒埴輪	ＳＤ９	—	—	—	密	橙5YR6/6	—	
第13図	24	9	007-02	埴輪	円筒埴輪	ＳＤ12	—	—	—	密	浅黄橙10YR8/3	—	
第13図	25	9	007-05	埴輪	円筒埴輪	—	—	—	—	密	にぶい黄橙10YR6/4	—	ヨコハケ
第13図	26	9	007-03	埴輪	朝顔形埴輪？	ＳＤ12	—	—	—	密	橙7.5YR6/6	—	
第15図	27	9	005-02	山茶碗	碗	ＳＤ９	—	7.4	—	密	灰白5Y8/1	1/12	渥美産
第15図	28	9	005-01	山茶碗	碗	ＳＤ９	—	—	—	密	灰白2.5Y7/1	2/12	渥美産

第２表　古墳時代・中世遺物一覧表

図	No.	写真図版	実測番号	種別	器種	出土遺構	口径(cm)	底部径(cm)	器高(cm)	色調	残存率	備考
第25図	29		022-02	磁器	小坏	ＳＫ２	5.4	—	3	胎：灰白N8/ 表：白N9/	6/12	上絵
第25図	30		014-07	磁器	小坏	ＳＫ２	7	2.8	2.95	胎：白N9/ 表：灰白N8/	8/12	肥前系
第25図	31	10	022-03	磁器	小坏	ＳＫ２	6.5	—	3.35	胎：灰白N8/ 表：灰白7.5Y8/1	5/12	肥前系
第25図	32		018-07	磁器	小坏	ＳＫ２	6	2.7	4.2	胎：灰白7.5Y8/1 表：灰白N8/	1/12	肥前系
第25図	33		016-04	磁器	小坏	ＳＫ２	6.4	—	—	胎：灰白N8/ 表：灰白5GY8/1	2/12	肥前系
第25図	34		016-02	磁器	小坏	ＳＫ２	—	3.8	—	胎・表：白N9/	5/12	肥前系
第25図	35		013-03	磁器	丸碗	ＳＫ２	—	3.9	—	胎：灰白N8/ 表：白N9/	4/12	肥前系
第25図	36		013-02	磁器	丸碗	ＳＫ２	9.7	3.6	5.6	胎：灰白5Y8/1 表：灰白10Y7/1	7/12	肥前系
第25図	37		018-04	磁器	丸碗	ＳＫ２	—	4.4	—	胎：灰白7.5Y8/2 表：灰白10Y8/1	4/12	肥前系・銘款あり？
第25図	38		018-01	磁器	丸碗	ＳＫ２	9.8	4	5.3	胎・表：白N9/	3/12	肥前系
第25図	39	10	013-07	磁器	丸碗	ＳＫ２	10	3.6	5.1	胎：灰白7.5Y8/1 表：灰白2.5GY8/1	11/12	肥前系
第25図	40		016-05	磁器	丸碗	ＳＫ２	—	3.85	—	胎：白N9/ 表：灰白2.5GY8/1	1/12	肥前系
第25図	41	10	014-03	磁器	丸碗	ＳＫ２	9.9	3.8	5.7	胎：白N9/ 表：灰白5GY8/1	3/12	肥前系
第25図	42		018-05	磁器	丸碗	ＳＫ２	10	4.3	5.5	胎：白N9/ 表：灰白5Y8/2	9/12	肥前系
第25図	43		016-03	磁器	丸碗	ＳＫ２	9.8	4.2	5.6	胎：白N9/ 表：灰白5GY8/1	4/12	肥前系
第25図	44		014-06	磁器	丸碗	ＳＫ２	10.2	—	—	胎：白N9/ 表：灰白5GY8/1	4/12	肥前系
第25図	45	10 16	022-01	磁器	丸碗	ＳＫ２	10.2	—	5.6	胎：灰白5Y8/1 表：灰白10Y7/1	9/12	肥前系・「大明年製」
第25図	46	10 16	018-06	磁器	丸碗	ＳＫ２	9.8	4.1	5.4	胎：灰白7.5Y8/1 表：灰白N8/	8/12	肥前系・「大明年製」
第25図	47	16	022-04	磁器	丸碗	ＳＫ２	10	4	5.6	胎：灰白5Y8/2 表：灰白N8/2	12/12	肥前系・渦福
第25図	48	10 16	018-02	磁器	丸碗	ＳＫ２	10.4	4.3	6	胎：白N9/ 表：灰白5Y8/2	11/12	肥前系・渦福
第25図	49	10	013-04	磁器	変形小皿	ＳＫ２	—	—	—	胎：灰白7.5Y8/1 表：明緑灰7.5GY8/1	5/12	肥前系・補修痕
第25図	50		013-06	磁器	蓋	ＳＫ２	9.1	10.5	—	胎：灰白7.5Y8/2 表：白N9/	1/12	肥前系
第25図	51		016-06	磁器	仏餉具	ＳＫ２	—	—	—	胎：白N9/ 表：灰白2.5GY8/1	—	肥前系
第26図	52		015-05	陶器	小碗	ＳＫ２	7.5	3.4	4.5	胎：灰黄2.5Y7/2 釉：オリーブ褐2.5Y4/3	8/12	美濃産
第26図	53	10	013-05	陶器	碗	ＳＫ２	9	3.9	5.3	胎：灰白5Y7/1 釉：にぶい赤褐5YR4/3・黒褐5YR2/1	5/12	瀬戸産
第26図	54	11	019-01	陶器	腰錆碗	ＳＫ２	10.2	3.7	6.6	胎：灰白2.5Y8/2 釉：灰白5Y8/2・暗褐7.5YR3/3	3/12	瀬戸産
第26図	55	11	014-02	陶器	碗	ＳＫ２	10.7	4.5	6	胎：白N9/ 釉：灰白10Y8/1・にぶい赤褐5YR4/4	8/12	肥前産
第26図	56		018-03	陶器	碗	ＳＫ２	11.7	—	—	胎：黄灰2.5Y4/1 釉：灰白2.5Y8/2・暗褐10YR3/4	3/12	肥前産

第３表　近世土器・陶磁器一覧表①

図	No.	写真図版	実測番号	種別	器種	出土遺構	口径(cm)	底部径(cm)	器高(cm)	色調	残存率	備考
第26図	57		021-06	陶器	碗	ＳＫ２	—	4.3	—	胎：にぶい褐7.5YR6/3 釉：灰白10YR8/2	12/12	肥前産
第26図	58		015-06	陶器	碗	ＳＫ２	—	4.2	—	胎：黄灰2.5Y6/1 釉：淡黄2.5Y8/3	4/12	肥前産
第26図	59	11	014-04	陶器	碗	ＳＫ２	10.6	5	6.3	胎：灰白2.5Y8/2 釉：灰白5Y7/2	10/12	信楽産・小杉碗
第26図	60		021-03	陶器	碗	ＳＫ２	—	4	—	胎：灰白7.5Y7/1 釉：灰白7.5Y7/2	12/12	美濃産
第26図	61		021-05	陶器	灯明皿	ＳＫ２	10.3	—	1.9	胎：褐灰7.5YR4/1 釉：暗赤褐5YR3/2	4/12	美濃産
第26図	62		015-04	陶器	灯明皿	ＳＫ２	11.2	—	—	胎・釉：にぶい赤褐2.5YR 4/4	3/12	美濃産
第26図	63		019-02	陶器	壺蓋？	ＳＫ２	12.2	6.1	2.7	胎：灰白2.5Y8/2 釉：褐7.5YR4/3	1/12	瀬戸産
第26図	64		014-05	陶器	蓋物（身）	ＳＫ２	10.4	—	—	胎：灰白2.5Y8/1 釉：淡黄2.5Y8/3	1/12	信楽産
第26図	65		014-01	陶器	徳利	ＳＫ２	—	8.4	—	胎：灰白5Y8/1 釉：暗オリーブ褐2.5Y3/3	8/12	美濃産
第26図	66		017-02	陶器	有耳壺	ＳＫ２	—	12.9	—	胎：にぶい黄橙10YR7/3 釉：灰褐7.5YR4/2	9/12	美濃産
第26図	67		016-01	陶器	土瓶	ＳＫ２	11.4	—	—	胎：灰白5Y8/1 釉：灰白5Y7/2	3/12	瘤鍋の可能性あり
第26図	68	11	021-04	陶器	水注	ＳＫ２	11.5	—	—	胎：にぶい褐7.5YR6/3 釉：灰白10YR8/2・浅黄5Y 7/3	2/12	美濃産・摺絵？
第26図	69	11	009-03	陶器	汁次	ＳＫ２	—	7.5	—	胎：灰黄2.5Y7/2 釉：オリーブ褐2.5Y4/3・褐10YR4/4	12/12	美濃産
第26図	70	11	021-02	陶器	汁次	ＳＫ２	4.5	7.4	10.8	胎：にぶい黄2.5Y6/3 釉：にぶい黄橙10YR7/4	12/12	美濃産
第26図	71	11	021-01	陶器	片口	ＳＫ２	15.9	—	9.8	胎・釉：灰白5Y8/1	12/12	瀬戸産
第26図	72		017-01	陶器	練鉢	ＳＫ２	25.2	13.6	7.6	浅黄橙10YR8/4	6/12	常滑産
第26図	73	11	012-02	陶器	擂鉢	ＳＫ２	35.2	15	15.2	胎：2.5Y7/3浅黄 釉：にぶい赤褐5YR4/3	9/12	瀬戸産
第26図	74		009-01	陶器	擂鉢	ＳＫ２	39.6	—	—	胎：2.5Y8/3淡黄 釉：にぶい赤褐5YR5/4	2/12	瀬戸産
第26図	75		009-02	陶器	擂鉢	ＳＫ２	—	14	—	胎：橙5YR6/6 釉：にぶい赤褐2.5YR5/3	12/12	瀬戸産
第26図	76		008-01	陶器	擂鉢	ＳＫ２	37	15.6	14.5	胎：2.5Y7/3浅黄 釉：灰赤2.5YR4/2	3/12	瀬戸産
第27図	77		012-01	陶器	甕	ＳＫ２	57	—	—	にぶい黄橙10YR7/4	2/12	常滑産
第27図	78		010-01	陶器	甕	ＳＫ２	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	—	常滑産
第27図	79	12	017-04	土師質土器	小皿	ＳＫ２	9.5	—	1.6	橙7.5YR6/6	7/12	美濃産・スス付着
第27図	80		020-05	土師質土器	小皿	ＳＫ２	8.8	—	1.3	橙5YR6/6	3/12	
第27図	81		013-01	土師質土器	小皿	ＳＫ２	9.8	—	1.8	橙7.5YR6/6	3/12	
第27図	82		015-03	土師質土器	小皿	ＳＫ２	9.3	—	1.4	橙5YR7/6	9/12	
第27図	83		020-06	土師質土器	小皿	ＳＫ２	11	—	1.6	浅黄橙10YR8/3	2/12	
第27図	84	12	020-04	土師質土器	小皿	ＳＫ２	10.1	—	1.7	橙5YR7/4	10/12	
第27図	85		017-05	土師質土器	小皿	ＳＫ２	11	—	—	にぶい橙7.5YR6/4	1/12	
第27図	86		015-02	土師質土器	小皿	ＳＫ２	12	—	—	灰黄褐10YR4/2	2/12	
第27図	87		015-01	土師質土器	焙烙	ＳＫ２	35.2	—	—	橙7.5YR7/6	1/12	
第27図	88	12	017-03	土師質土器	焙烙	ＳＫ２	37	—	—	橙5YR6/6	1/12	
第27図	89	12	020-03	土師質土器	焙烙	ＳＫ２	40.2	—	—	橙5YR7/6	2/12	
第27図	90	12	020-02	土師質土器	焙烙	ＳＫ２	39.6	—	—	橙5YR6/6	2/12	
第27図	91		008-02	土師質土器	焙烙	ＳＫ２	38.4	—	—	外：にぶい橙7.5YR6/4 内：橙7.5YR7/6	1/12	
第27図	92	12	020-01	土師質土器	焙烙	ＳＫ２	38.2	—	—	外：にぶい橙5YR7/4 内：橙5YR7/6	2/12	

第４表　近世土器・陶磁器一覧表②

図	No.	写真図版	実測番号	種別	器種	出土遺構	口径(cm)	底部径(cm)	器高(cm)	色調	残存率	備考
第27図	93	12	015-07	瓦質土器	不明	ＳＫ２	—	—	—	灰白2.5Y8/2	—	スカシあり
第29図	98		031-01	磁器	碗	ＳＫ６	8.8	4.2	5.3	胎：灰白5Y8/1 表：灰白7.5Y8/1	4/12	肥前系
第29図	99		031-02	磁器	碗	ＳＫ６	—	3.3	—	胎：灰白7.5Y8/1 表：灰白10Y8/1	5/12	肥前系
第29図	100		025-01	磁器	小坏	ＳＫ10	6.5	2.9	2.4	胎・表：白N9/	9/12	肥前系
第29図	101		027-02	磁器	丸碗	ＳＫ10	8.4	—	—	胎・表：灰白2.5GY8/1	3/12	肥前系
第29図	102	12 16	025-03	磁器	丸碗	ＳＫ10	9.9	4	5.65	胎：白N9/ 表：灰白10Y8/1	12/12	肥前系・「大明年製」
第29図	103	12	027-01	磁器	丸碗	ＳＫ10	9.9	4	5.1	胎・表：灰白2.5GY8/1	2/12	肥前系
第29図	104		027-03	陶器	碗	ＳＫ10	—	4.6	—	胎・釉：灰白5Y8/2	12/12	瀬戸産
第29図	105		025-02	陶器	碗	ＳＫ10	—	3.9	—	胎：にぶい黄橙10YR7/3 釉：にぶい黄2.5YR6/3・灰白2.5Y8/2	7/12	肥前産
第29図	106		025-04	陶器	碗	ＳＫ10	9	—	—	胎・釉：灰白2.5Y8/2	1/12	肥前産
第29図	107	13	024-03	陶器	灯明皿	ＳＫ10	10.8	—	2	にぶい赤褐2.5Y5/3	5/12	美濃産・スス付着
第29図	108	13	025-05	陶器	小皿	ＳＫ10	12.3	7.3	2.3	胎・釉：灰白2.5Y8/2	5/12	瀬戸産・120とセットか
第29図	109	13	024-04	陶器	筒形香炉	ＳＫ10	12.3	9.3	6	胎：淡黄2.5Y8/3 釉：浅黄2.5Y7/4	8/12	美濃産
第29図	110		024-02	陶器	植木鉢	ＳＫ10	30	—	—	胎：灰白2.5Y8/2 釉：暗褐10YR3/3	2/12	瀬戸産
第29図	111		023-02	陶器	擂鉢	ＳＫ10	26.2	—	—	胎：灰白2.5Y8/2 釉：にぶい赤褐5YR4/4	2/12	瀬戸産・小型品
第29図	112		023-01	陶器	擂鉢	ＳＫ10	35.8	20.2	15.4	橙2.5YR5/6	7/12	常滑産？・高台あり
第29図	113		023-04	土師質土器	小皿	ＳＫ10	11	—	—	橙5YR6/6	2/12	
第29図	114	13	023-03	土師質土器	小皿	ＳＫ10	8.4	—	1.4	橙7.5YR6/6	4/12	
第29図	115		024-01	土師質土器	焙烙	ＳＫ10	31.1	—	—	橙7.5YR6/6	1/12	
第29図	116	13	026-01	土師質土器	焜炉	ＳＫ10	33.4	—	30.5	灰褐7.5YR5/2	9/12	第21層出土
第29図	117		031-03	陶器	鉢	ＳＫ20	21	—	—	胎：灰褐7.5YR4/2 釉：灰オリーブ5Y5/2・灰白2.5Y8/2	2/12	肥前産
第30図	118		032-01	磁器	蓋	ＳＤ５	9	4	2.6	胎：灰白10Y8/1 表：白N9/	1/12	瀬戸美濃産
第30図	119		031-06	磁器	端反碗	ＳＤ５	9	—	4.2	胎：灰白N8/ 表：灰白10Y7/1	1/12	瀬戸産
第30図	120	14	031-07	陶器	小皿	ＳＤ５	—	7.4	—	胎：灰白2.5Y8/2 釉：淡黄2.5Y8/3	3/12	瀬戸産・108とセットか
第30図	121	14	031-09	陶器	黄瀬戸鉢	ＳＤ５	—	—	—	胎・釉：灰黄2.5Y7/2	1/12	美濃産
第30図	122		031-04	陶器	片口	ＳＤ５	—	8.2	—	胎：灰白5Y7/1 釉：にぶい黄橙10YR4/3	4/12	美濃産
第30図	123	14	032-02	陶器	半胴	ＳＤ５	—	18.2	—	胎：灰白2.5Y8/2 釉：褐7.5Y4/3	1/12	瀬戸産？
第30図	124	14	031-08	陶器	擂鉢	ＳＤ５	—	—	—	胎：にぶい黄橙10YR7/2 釉：にぶい赤褐2.5Y4/3	1/12	瀬戸産
第30図	125	14	031-05	土師質土器	小皿	ＳＤ５	5.8	—	1	橙7.5YR6/6	3/12	
第30図	126		032-05	磁器	端反碗	ＳＤ８	9.2	4	4.7	胎：灰白5Y8/1 表：灰白7.5Y8/1	1/12	瀬戸産
第30図	127		032-03	陶器	腰錆碗	ＳＤ８	—	6	—	胎：灰白2.5Y7/1 釉：灰白7.5Y7/2・黒褐7.5YR3/2	5/12	瀬戸産
第30図	128		032-07	陶器	有耳壺	ＳＤ８	12.2	—	—	胎：灰白5Y7/1 釉：灰オリーブ5Y5/2	1/12	美濃産
第30図	129		032-04	陶器	土瓶	ＳＤ８	10	—	—	胎：灰白5Y8/1 釉：灰白7.5Y7/2	1/12	瀬戸産
第30図	130	14	032-06	陶器	小瓶	ＳＤ８	2.1	2.4	5.5	胎：灰黄2.5Y7/2 釉：灰白7.5Y7/1	12/12	瀬戸産
第30図	131		033-01	陶器	鉢？	ＳＤ８	29	—	—	橙7.5YR6/6・にぶい黄橙10YR6/4	1/12	常滑産

第５表　近世土器・陶磁器一覧表③

図	No.	写真図版	実測番号	種別	器種	出土遺構	口径(cm)	底部径(cm)	器高(cm)	色調	残存率	備考
第30図	132	14	033-02	瓦	軒桟瓦	ＳＤ８	—	—	—	表：暗灰N3/ 胎：灰白N8/	12/12	
第30図	134	14	028-02	陶器	輪禿皿	ＳＤ12	—	5.9	—	胎：浅黄2.5Y7/3 釉：灰白2.5Y8/2	12/12	瀬戸産・墨書
第30図	135		030-02	陶器	天目茶碗	ＳＤ12	—	—	—	胎：灰白10YR8/1 釉：黒10YR2/1	12/12	瀬戸美濃産
第30図	136	14	029-01	陶器	火消壺	ＳＤ12	24	18	19.9	外：赤灰2.5YR4/1 内：にぶい赤褐2.5YR5/4	2/12	常滑産・ヘラ記号
第30図	137		041-01	陶器	練鉢	ＳＤ12	32	12	16.5	橙5YR6/8	2/12	常滑産
第30図	138		028-01	陶器	擂鉢	ＳＤ12	36.4	14.6	—	胎：灰白10YR8/2 釉：灰褐5YR4/2	6/12	瀬戸産
第30図	139		030-04	土師質土器	小皿	ＳＤ12	10.4	—	—	橙5YR7/6	3/12	
第30図	140		030-05	土師質土器	小皿	ＳＤ12	—	—	—	灰黄2.5Y7/2	1/12	
第30図	141	16	028-03	磁器	碗	ＳＤ15	—	3.9	—	胎・表：灰白10Y8/1	12/12	肥前系
第30図	142		030-03	磁器	碗	ＳＤ15	—	5.4	—	胎：灰白10Y8/1 釉：明オリーブ灰5GY7/1	6/12	肥前系
第30図	143		030-01	陶器	小瓶	ＳＤ15	—	6	—	胎：灰白5Y8/2 釉：灰白5Y7/2	6/12	美濃産
第30図	144	14	029-02	陶器	丸碗	ＳＤ16	9.6	4.9	6.1	胎：灰白N7/ 表：灰白7.5Y7/2	11/12	瀬戸産
第30図	145		030-06	土師質土器	焙烙	ＳＤ16	—	—	—	外：暗灰N3/ 内：灰褐5YR5/2	1/12	
第30図	146		032-08	磁器	丸碗	ＳＤ19	10	—	—	胎：灰白7.5Y7/1 表：灰白10Y7/1	2/12	肥前系
第31図	147		036-02	磁器	筒形碗	ＳＺ３	—	4	—	胎：灰白5Y8/2 表：灰白7.5Y8/1	3/12	肥前系
第31図	148		036-03	磁器	筒形碗	ＳＺ３	—	4	—	胎：灰白5Y8/2 表：灰白7.5Y8/1	3/12	瀬戸産？
第31図	149		035-06	磁器	蕎麦猪口	ＳＺ３	—	5.8	—	胎：灰白5Y8/1 表：明緑灰7.5GY8/1	3/12	肥前系
第31図	150		035-05	磁器	碗	ＳＺ３	12.8	—	—	胎：灰白10Y8/1 表：明緑灰10GY8/1	2/12	肥前系・青磁染付
第31図	151		036-01	磁器	蓋	ＳＺ３	—	—	—	胎：灰白N8/ 表：灰白5GY8/1	1/12	肥前系
第31図	152		036-04	磁器	皿	ＳＺ３	—	6	—	胎：灰白7.5Y8/1 表：灰白7.5Y7/1	4/12	美濃産
第31図	153		036-05	磁器	鉢	ＳＺ３	—	8	—	胎・表：白N9/	2/12	肥前系
第31図	154		035-04	陶器	碗	ＳＺ３	—	5.6	—	胎：灰白2.5Y8/1 釉：淡黄2.5Y8/1	2/12	肥前産・鉢？
第31図	155		034-02	陶器	鉢	ＳＺ３	—	9.6	—	胎：赤褐10YR5/4 釉：暗赤褐2.5YR3/2	1/12	肥前産
第31図	156		035-03	陶器	有耳壺	ＳＺ３	—	5.7	—	胎：淡黄2.5Y8/3 釉：灰白5Y8/2	3/12	美濃産
第31図	157	15	034-03	陶器	水甕	ＳＺ３	32	—	—	胎：灰白2.5Y7/1 釉：灰白5Y8/2・黒褐10YR 2/2・暗オリーブ7.5Y4/3	1/12	瀬戸産
第31図	158		035-01	土師質土器	焙烙	ＳＺ３	—	—	—	外：褐灰10YR4/1 内：橙5YR7/6	1/12	
第31図	159	15	035-02	瓦質土器	焙烙	ＳＺ３	—	—	—	表：灰N4/ 胎：灰白5Y7/2	1/12	
第31図	160		034-01	瓦	軒桟瓦	ＳＺ３	—	—	—	表：N3/ 胎：灰白5Y7/2	10/12	
第32図	161		037-03	磁器	小坏	—	7.2	4.8	—	胎：灰白N8/ 表：灰白5GY8/1	2/12	肥前系・五弁花
第32図	162		040-03	磁器	丸碗	—	10	—	—	胎・表：灰白10Y8/1	2/12	肥前系
第32図	163		040-01	磁器	丸碗	—	—	4.6	—	胎：灰白7.5Y8/1 表：明緑灰7.5GY8/1	5/12	肥前系・蛇ノ目釉剥ぎ

第６表　近世土器・陶磁器一覧表④

図	No.	写真図版	実測番号	種別	器種	出土遺構	口径(cm)	底部径(cm)	器高(cm)	色調	残存率	備考
第32図	164	15 16	037-01	磁器	丸碗	—	10.3	4.7	5.4	胎：灰白5Y7/2 表：浅黄5Y7/3	7/12	肥前系・渦福
第32図	165	16	037-04	磁器	丸碗	—	—	4.2	—	胎：灰白N8/ 表：灰白2.5GY8/1	9/12	肥前系・渦福
第32図	166	16	037-07	磁器	丸碗	—	—	4	—	胎：灰白N8/ 表：灰白5GY8/1	6/12	肥前系・「大明年製」・蛇ノ目釉剥ぎ
第32図	167	16	037-05	磁器	丸碗	—	—	4.4	—	胎：灰白N8/ 表：灰白2.5GY8/1	6/12	肥前系・「大明年製」
第32図	168		038-03	磁器	広東碗	—	—	6	—	胎：灰白7.5Y8/1 表：灰白5GY8/1	5/12	肥前系
第32図	169		037-02	磁器	筒形碗	—	9.2	—	—	胎・表：灰白2.5GY8/1	2/12	肥前系
第32図	170		040-02	磁器	蓋	—	9.5	4	2.6	表：白N9/ 胎：灰白N8/	1/12	瀬戸美濃産・銘款
第32図	171		037-06	磁器	皿	—	—	9	—	胎・表：灰白7.5Y7/1	3/12	美濃産
第32図	172	16	040-04	磁器	皿	—	—	—	—	胎・表：白N9/	—	肥前系・「富喜長春」
第32図	173	15	039-03	陶器	灯明皿	—	10	4	—	にぶい赤褐2.5Y4/4・灰7.5Y6/1	3/12	美濃産
第32図	174		039-04	陶器	受付き灯明皿	—	8.4	5.4	—	にぶい赤褐2.5Y4/4・褐灰7.5YR6/1	11/12	美濃産
第32図	175	15	040-05	陶器	土瓶？	—	11.2	—	—	胎：灰白5YR3/1 釉：黒褐5YR3/1	2/12	瀬戸産
第32図	176	15	038-01	陶器	擂鉢	—	—	14.2	—	胎：にぶい黄橙10YR7/2 釉：黒褐7.5YR3/1	12/12	瀬戸美濃産
第32図	177		039-01	土師質土器	焙烙	—	32	—	—	外：黒褐7.5YR3/1 内：にぶい黄橙10YR7/4	2/12	
第32図	178		038-02	瓦	軒桟瓦？	—	—	—	—	表：灰7.5Y5/1 釉：灰白N8/	5/12	軒丸瓦？

第７表　近世土器・陶磁器一覧表⑤

図	No.	写真図版	実測番号	材質	種別	出土遺構	長さ・高さ(cm)	重量(g)	胎土	備考
第28図	94	12	042-02	銅	不明	ＳＫ２	14.3	32.5	—	把手状製品
第28図	95	12	042-01	鉄	釘	ＳＫ２	3.8	6	—	
第28図	96	12	042-04	鉄	釘	ＳＫ２	2.9	1.7	—	
第28図	97	12	042-03	鉄	釘	ＳＫ２	4	1.9	—	
第30図	133	14	033-03	土	小型蓋	ＳＤ８	2.1	—	胎：浅黄橙10YR8/3	上面に緑釉
第32図	179	15	039-02	土	人形	—	4.4	—	灰白2.5Y8/2	西行か・中空
第32図	180	15	038-04	土	不明	—	4.1	—	浅黄橙7.5YR8/4	家形？・箱庭道具か

第８表　金属製品・土製品一覧表

第Ⅶ章　調査のまとめと考察

久居城下町遺跡における今回の発掘調査では、それほど広い面積の調査ではなかったものの、古墳時代後期の古墳を新規に発見し、また近世後期の久居城下町の構造についても様々な知見を得ることができた。本章では、これまでに述べてきた調査内容を踏まえつつ、調査によって得られた成果について整理と検討を行い、調査のまとめとしたい。

第１節　東鷹跡古墳の位置づけ

今回の調査で検出された東鷹跡古墳は、須恵器の出土などから古墳時代後期の古墳であると考えられた。雲出川下流域北岸では、これまであまり大型の後期古墳は見つかっておらず、東鷹跡古墳の発見は大きな意味を持つ。したがって、本節において東鷹跡古墳の内容について検討し、その意義について述べていきたい。

①墳形・規模の復元

東鷹跡古墳は近世以降の削平を大きく被っており、墳丘盛り土や埋葬施設の痕跡は調査区内では確認できず、周溝が部分的に検出されたのみである。第Ⅳ章では、周溝の一部となる可能性がある複数の遺構について、個別に報告を行った。ここでは、それをもとに東鷹跡古墳の周溝を復元し、墳形や規模について考えていきたい。

周溝の復元　東鷹跡古墳の周溝として確実な遺構としては、須恵器や土師器、埴輪が良好な状態で出土したＳＤ９があげられる。この溝については、規模や埋没状況、遺物の出土状況、出土遺物の器種などからみても古墳周溝とみて間違いなかろう。ただし、東端は調査区外へのびており詳細は不明で、また西端は後世の削平によって途切れている。

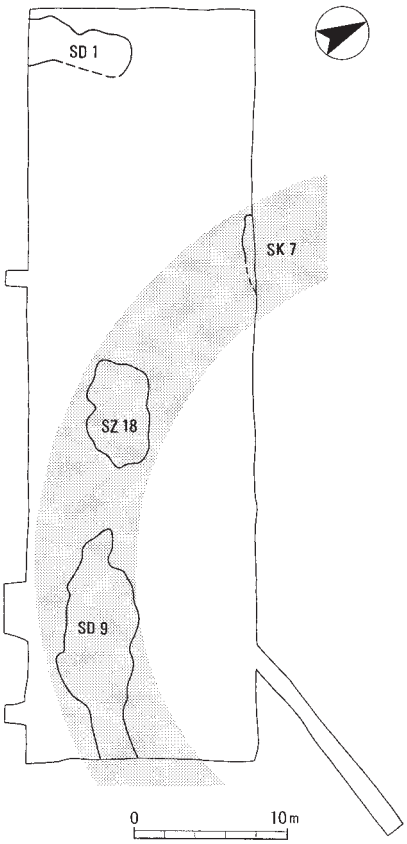
ここで注目されるのは、ＳＤ９が途切れた部分からやや西側に広がるＳＺ18の存在である。この遺構については、掘り方が明瞭ではなく溝などとして認識することは難しい。ただし、ＳＺ18の直上にはＳＤ９と同様の黒色土が堆積しており、ガラスやレンガを含んでいたものの、土師器直口壺・甕の破片も含んでいた。また、この黒色土と、撹乱を受けていないＳＺ18の埋土として認識される灰オリーブ色土との境界付近で須恵器や土師器を集中的に検出している。こうした点からみれば、このＳＺ18は東鷹跡古墳の周溝底がごくわずかに遺存したものと考えられるのではなかろうか。

ＳＤ９・ＳＺ18を連続する溝として復元すると、その溝は北に向かってやや内湾する傾向があるように感じられる。そうみれば、近代の撹乱があまり及んでいない調査区北壁(1)にこの溝の続きが現れている可能性が高い。

このように考えると、その候補としてあげられる遺構は、調査区北壁で検出されたＳＫ７である。この遺構は、近世後期の遺構との切り合いからみてそれ以前の時期に属するものと考えられる。また、第Ⅳ章でも述べたように、埋土の状況はＳＤ９に類似する。幅や底面のレベルなどをＳＤ９と比べてみても、比較的共通性が高いとみることができよう。こうした点からみて、ＳＫ７は東鷹跡古墳の周溝の一部を構成する可能性が高いと思われる。

なお、埋土の共通性からみると、ＳＤ１もＳＤ９やＳＫ７と類似している。検出当初は、このＳＤ１を古墳周溝の一部と考え、ＳＤ１を前方部端の区画とする前方後円墳に復元する案も想定していた。しかしながら、掘削の結果、このＳＤ１は北端が浅くなり、完全に途切れてしまうことが判明した。また、出土遺物もなく、帰属時期も明確にできなかった。こうした点から、ＳＤ９と一連の古墳周溝を形成するのではなく、別個の遺構として考えた方がよいと判断した。

墳形・規模等の推定　さて、以上のようにＳＤ９・ＳＺ18・ＳＫ７が東鷹跡古墳の周溝の一部となると推定した。周溝はきれいに円弧を描くとは言い難いが、明瞭な周溝の屈曲もみられないため、円墳である可能性が高い。大部分が調査区外へ出ているため



第33図　東鷹跡古墳復元図（1:500）

に、墳形や規模の確定は難しいが、ここでは直径30～40m程度の円墳を推定しておきたい（第33図）。

埋葬施設については全く不明である。調査区内で墓壙や石室石材等は確認できていない。時期的にみて横穴式石室を採用している可能性が高いが、もしそうであれば、周溝の残り方などからみて石室構築に伴う墓壙の一部が調査区外に遺存している可能性もあろう。

②築造時期と埋没・削平過程

次に、東鷹跡古墳の築造時期および、埋没・削平された過程について考えていきたい。

築造時期　東鷹跡古墳は、墳丘・埋葬施設など大部分が削平を被っているものの、周溝内から出土した土器類によってその築造時期を知ることが可能である。これらの土器類は、周溝内下層からまとまって出土していることから、古墳築造時期を示すものと考えてよい。

出土した土器類の中で、最も時期を端的に示すものは須恵器である。したがって、ここでは須恵器の時期について検討していきたい。

東鷹跡古墳から出土した提瓶（第11図15）は半環状の把手を持ち、体部は扁平ではなく丸みを帯びる。この形態は、陶邑窯跡群の須恵器編年と照らし合わせた場合にはＭＴ15～ＴＫ10型式期に位置づけられる特徴であろう[2]。東海地方ではこの形態がＴＫ43型式期まで残るようであるが、伊勢湾西岸地域の状況を見ると、ＴＫ43型式期には提瓶は半環状把手を残しながらも小型化している。したがって、器高が本来は25cm程度あるとみられる本例は、ＭＴ15～ＴＫ10型式期までの範疇に入る可能性が高い。

直口壺（第11図５）は、頸部がやや締まっており、肩部が張るのが特徴的である。こうした形態的特徴や、肩部直下に文様を施していることなどから短頸壺ではなく直口壺であると判断したが、通常この形態の直口壺には脚台が付けられている。本例には脚台が付かない点が特徴的であるといえよう。脚台が付き肩の張る直口壺は、およそＴＫ10型式期新段階から出現し、ＴＫ43型式期にかけて増加していく。また、古いものほど頸部のしまりが弱く、頸部から口縁端部までの長さが短いものが多い。本例の頸部の締まりは、ＴＫ43型式期に通有にみられるものにくらべ、やや弱いように思われる。この点からみて、本例はＴＫ10型式期新段階に属する可能性が高いであろう。そうみれば、脚台が付かないのも脚付直口壺出現期における形態的揺籃の一様相として捉えることができるのかもしれない。

高坏形器台に装飾を付した装飾付器台は、主にＴＫ10型式期～ＴＫ43型式期に製作されるようである。東鷹跡古墳から出土した装飾付器台のうち、動物や人物などの装飾が付いていたと思われるもの（第11図９）は、わずかに残存している脚部上端部が脚部中位にむけてやや窄まっていく様相を見て取ることができる。こうしたやや脚部中位が窄まる形状の高坏形器台は、ＴＫ10型式期以降に一般化する。また、近畿地方での様相として、高坏形器台に波状文ではなくヘラもしくは櫛状工具による列点文が施される個体が増加するのは、ＴＫ10型式期新段階以降のようである。こうした点からみれば、装飾付高坏形器台はＴＫ10型式期新段階～ＴＫ43型式期に位置づけられる可能性が高い。

また、遺構内から出土したわけではないものの、東鷹跡古墳に伴う可能性が高い坏身（第11図１・２）には、口縁端部に段が認められない。また、たちあがりはＴＫ10型式のものより矮小化傾向が見られるものの、ＴＫ43型式の坏身よりはやや高いとみることができる。したがって、ＴＫ10型式期新段階に位置づけられるものと考えてよいだろう[3]。

以上のように、東鷹跡古墳出土須恵器は総体として６世紀中葉～後葉のＴＫ10型式期新段階に位置づけられる可能性が高いものと思われる。さらにこれを補強する材料として、装飾付高坏形器台（第11図９）の類例が和歌山県井辺八幡山古墳から出土している[4]。口縁から垂下する半環状の装飾や、口縁端部形態など、かなりの共通点を見いだすことができる。井辺八幡山古墳の装飾付器台はクビレ部造り出しからの出土であり、これに伴う須恵器としてＴＫ10型式期古段階～新段階の坏身・坏蓋・有蓋高坏などの一群が出土している。東鷹跡古墳出土の装飾付器台と、この井辺八幡山古墳の例とで時期が大幅に異なるとは考えにくく、やはり下ってもＴＫ10型式期新段階までに収まるものと考えられよう。

なお、出土した須恵器の中に、以上の年代観から外れるような時期のものは含まれておらず、時期的にまとまりのある資料であると考えられる。

埋没・削平過程　東鷹跡古墳の周溝の埋没時期は、周溝内上層から出土した山茶碗によって12世紀後半～13世紀前半頃であると考えられる。周溝内埋土の均質な状況からみて、埋没過程において人工的な撹乱などが及ぼされた形跡はない。また、古代の遺物は全く確認されておらず、周溝が完全に埋没するまで古墳周辺における人の活動はあまり活発ではなかったものと思われる。周溝内埋土は黒色土で占められており、墳丘が削平されて周溝内に削平土が流入している様子もない。したがって、中世前期に周溝が完全に埋没した段階では墳丘は残存していた可能性が高いであろう。

では、いつ頃に墳丘が削平を被ったのであろうか。中世前期に東鷹跡古墳の墳丘が残存していたとすれば、削平は中世後期以降になされたことになる。

第Ⅴ章で報告したように、今回検出した遺構で唯一中世に属する可能性があるのは、ＳＫ11である。この土坑は墳丘があったと思われる位置に掘り込まれており、その形成時に墳丘の破壊が行われたとも想定できる。ただ、この遺構の形成時期については、実質上不明である。調査地付近には久居城下町が形成されるまで戸木村の集落が存在していたともされており、近世前期の遺構である可能性もある。しかしながら、調査区全体でも中世～近世前期の遺物の出土量がごくわずかにすぎないことを踏まえれば、調査地近辺が集落域として機能していた状況は認めがたい。したがって、調査地近辺は中世以降、久居城下町の形成まで大きな開発は被らなかったものと推定できる。

以上の状況を鑑みれば、近世後期までに部分的に破壊を受けていたとしても、東鷹跡古墳は久居城下町の形成に伴って大きく削平を受けたと考えるのが妥当であろう。

また、この点をやや補強すると考えられるのは、近世後期の遺構からの古墳時代遺物の出土である。ＳＫ２から須恵器片、ＳＤ12から埴輪片が出土しており、こうした近世後期の遺構に東鷹跡古墳に関係すると思われる遺物が混入しているのは、これらの遺構が形成されたのと近い時期に古墳の破壊が行われたためとも考えられよう。

③装飾付須恵器について

今回出土した須恵器の中に装飾付高坏形器台が２個体確認でき、また、装飾付脚付壺と考えられるものも認められた。こうした装飾付須恵器の伊勢地域での出土個体数は40個体程度とあまり多くはなく[5]、東鷹跡古墳の出土品は当該地域における貴重な例となる。東鷹跡古墳の歴史的評価を考える上でも、この装飾付須恵器群について伊勢地域の資料の中での位置づけを図っておきたい。

装飾付須恵器は、器種によって器台、壺、その他の大きく３種類に分類できる[6]。また、付加されている装飾の種類としては、人物・動物などの小像と、小型の壺・坏身などのいわゆる子持とに大きく分けられよう。中には小像と子持とが共に用いられているものもある。こうした装飾と、器種との組み合わせによって、様々なバリエーションの装飾付須恵器が作られている。東鷹跡古墳出土例には、壺－

子持、器台－子持、器台－小像、の３種類の組み合わせが存在している。

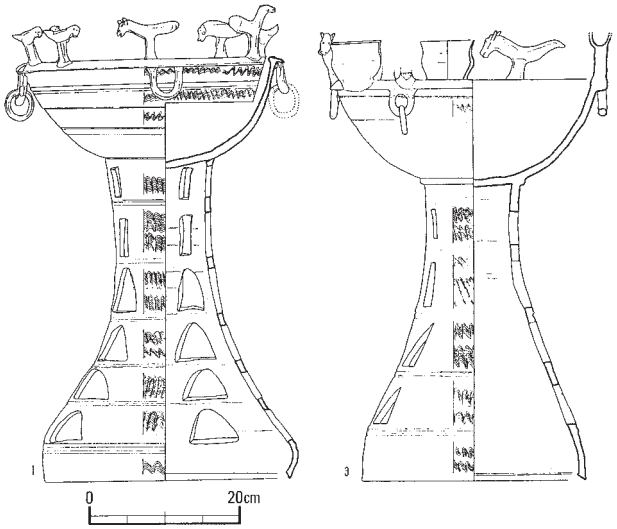
子持の脚付壺は、全国的に見ても出土例の多いものであり、装飾付須恵器の中では伊勢地域でも出土例の多いものである。古墳からの出土例としては、四日市市御池２号墳例[7]や松阪市口南戸古墳例[8]がある。口南戸古墳例は部分的にしか遺存していないものの、形態的に東鷹跡古墳例に類似たものであった可能性が高い。

子持の高坏形器台については、伊勢地域の古墳からの出土例としては東鷹跡古墳とは雲出川を挟んで南に位置する松阪市西野５号墳例[9]や、御池２号墳例が存在している。西野５号墳例は形態的に東鷹跡古墳出土例（第11図13）と類似すると考えられ、ＴＫ43型式期とみられることから時期的にも東鷹跡古墳と近い。御池２号墳例についてはＴＫ209型式期のものと考えられ、やや時期が下り、形態的にも異なっている。

小像の付加された高坏形器台については、全国的にも例が少なく、伊勢地域では類例は確認されていない。ただし、亀山市井田川茶臼山古墳[10]と御池２号墳では脚付壺に小像が付加されたものが出土している。

伊勢地域の古墳出土装飾付須恵器の様相と、東鷹跡古墳出土の装飾付須恵器に関する類例については以上の通りであるが、これらを概観すると、装飾付須恵器を出土した古墳は、各地域内でも有力な人物を葬った墓と思われる場合が多い[11]。東鷹跡古墳と時期が近いものでは、西野５号墳や井田川茶臼山古墳がその代表的なものであり、金銅装馬具などが副葬されている。したがって、出土須恵器という点から見ても、やはり東鷹跡古墳も当該地域における有力な被葬者を葬った古墳である可能性が高いとみることができよう。

なお、東鷹跡古墳から出土した装飾付高坏形器台（第11図９）において注目されるのは、口縁部から垂下して取り付けられた半環状と推定される装飾である。同様の装飾は全国的に見ても非常に例が少ない。しかし、先に述べたように、この装飾も含め口縁部の形状などが類似する例が、和歌山県井辺八幡山古墳クビレ部出土例[12]に存在している（第34図）。井辺八幡山古墳例と東鷹跡古墳例が全く無関係であるとは考えがたい。伊勢地域を越えた広域にわたる須恵器の生産・流通や工人の交流などについて考える上でも一石を投じる資料であるといえる。



第34図　井辺八幡山古墳出土装飾付須恵器
（『井辺八幡山古墳』より転載、1:10）

④雲出川下流域の後期古墳と東鷹跡古墳

以上、東鷹跡古墳の発掘調査成果について遺構・遺物から検討を加えてきたが、最後に東鷹跡古墳の当該地域における位置づけについて、他の後期古墳との関わりを交えながら述べておきたい。

雲出川下流域における後期古墳の分布状況からは、いくつかのグループの存在を見て取ることができる（第35図）[13]。大きくみて、雲出川下流域北岸（Ａ）・榊原川流域（Ｂ）・雲出川下流域南岸（Ｃ）・天花寺丘陵（Ｄ）・半田丘陵（Ｅ）[14]の５グループに分けられよう。

東鷹跡古墳は雲出川下流域北岸グループ（以下北岸グループ）に属する。このグループには規模の大きな群集墳は含まれず、数基程度の古墳群が散漫に分布する状況が見て取れる。６世紀中葉には東鷹跡古墳に匹敵するような大規模な古墳は確認されていない。東鷹跡古墳より前の段階では、前方後円墳の善応寺１号墳が当該グループの盟主的位置を占めていたものと思われる。ただし、善応寺１号墳は築造時期が明確ではなく、５世紀後葉～６世紀前葉の時間幅の中に位置づけておきたい。

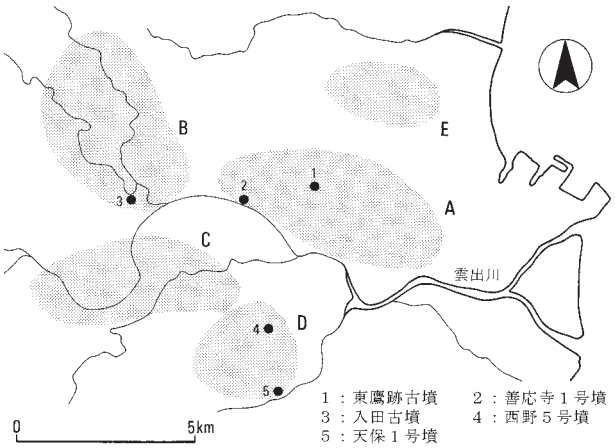
北岸グループと雲出川を挟んで対岸の雲出川下流域南岸グループと、天花寺丘陵グループは数多くの古墳群で構成されることが特徴的で、この２グループで一連の大きなグループを形成しているようである（以下南岸・天花寺グループ）。このグループに含まれている古墳群は、径10m前後の規模の古墳を中心に構成され、その中に墳丘規模や副葬品などから盟主的な位置にあると考えられる古墳がごく少数営まれている。天花寺丘陵グループに存在している西野５号墳や天保１号墳がその代表格である。墳丘規模は20m前後とそれほど大きくはないが、金銅装の馬具などが出土している。

榊原川流域グループでは小規模な後期古墳群が散在的に分布するが、その中では入田古墳が東鷹跡古墳と同時期かやや下る時期の盟主的な位置にある古墳としてあげられよう。

以上のように各グループの東鷹跡古墳と前後する時期の盟主的古墳を見ていくと、特に有力な勢力は南岸・天花寺グループであると思われる。北岸グループは、群集墳のあり方や、散在的な古墳の分布、そして善応寺１号墳のような前方後円墳を築造している点など、南岸・天花寺グループとはかなり異なった様相を見せている。東鷹跡古墳は南岸・天花寺グループの墓域となっている一志丘陵を望むことのできる台地端に立地しており、そうした点ではこれらのグループを意識した占地であるとみることができよう。

これまで北岸グループでは時期が不明確な善応寺１号墳が首長墳としてあげられる程度で、その内容としては南岸・天花寺グループと比べるべくもなかったが、東鷹跡古墳の発見により、南岸グループと対抗しうるような勢力の存在を想定することもできるようになったといえよう。

ただし、他のグループの有力な後期古墳の墳丘規模が径20m前後であるのに対し、東鷹跡古墳の30～40mという墳丘規模は非常に大きい。伊勢地域全体を見渡しても当該期の30mを越えるような円墳の存在は希薄である。先に述べた出土須恵器に関しての検討や、埴輪の出土などからも削平された有力古墳である可能性が高いことは間違いないが、ＳＤ９の埋土に墳丘流土と考えられる土層の存在が明瞭ではないことなども踏まえ、東鷹跡古墳の扱いについてはなお慎重を要するといえよう。



第35図　雲出川下流域の後期古墳のグループ（1:210000）

註

（1）第Ⅲ章で述べたように、近代の撹乱によって大きく削平を被っているのは旧農業土木棟が建っていた調査区内中央部である。調査区北壁付近については削平をあまり被っておらず、遺構の残存状況も良好である。

（2）本報告では、須恵器の年代観については田辺昭三の編年（田辺昭三1966『陶邑古窯址群Ｉ』　平安学園考古学クラブ、田辺昭三1981『須恵器大成』　角川書店）に基づいて記述を行う。この編年は陶邑窯跡群の須恵器に基づくものであるが、雲出川下流域の須恵器は基本的に近畿地方の須恵器に類似する部分が大きいため、大過ないものと考える。なお、須恵器の編年に基づいて時期を記述する際には、須恵器型式名に「期」を付して時期を表す。

（3）坏身の形態は、ややＴＫ43型式に近い様相を示しているととらえられるかもしれない。

（4）同志社大学文学部文化学科1972『井辺八幡山古墳』同志社大学文学部考古学調査報告第５冊

（5）山本雅靖2005「装飾須恵器」『三重県史』資料編考古１　三重県

（6）器台では高坏形器台が主である。壺ではほとんどが脚付壺であるが、高坏形器台と壺が結合している状態を脚付壺体部に鍔を付けることによって表現しているものが多い。

（7）四日市市遺跡調査会1993『御池古墳群』四日市市遺跡調査会文化財調査報告書Ｘ

（8）松阪市教育委員会1991『口南戸古墳発掘調査報告書』

（9）一志町・嬉野町遺跡調査会1991『天花寺山』

(10) 三重県教育委員会1988『井田川茶臼山古墳』

(11) 清水政宏2002「三重県における古墳出土の装飾付・特殊須恵器についてーその受容と展開ー」『三重県史研究』第17号 三重県

(12) 同志社大学文学部文化学科1972

(13) 当該地域の古墳は未調査の古墳が大半を占めており、ここでは墳形・規模や同一古墳群中の古墳出土資料などによる推定をもとに、古墳時代後期に属すると考えられる古墳を抽出した。

(14) 半田丘陵グループの古墳は半田丘陵北部に集中し、岩田川流域に広がる平野を意識しているものと思われ、雲出川下流域の他のグループとは区別される可能性が高い。

第２節　久居城下町の構造

久居城下町については、絵図や文献記録が比較的多く残されており、その全体構造などについてはかなり詳細に知られていた。しかしながら、一定程度の規模の発掘調査が行われたのは今回の調査が初めてといえる。発掘調査によって、屋敷地の構造やその変遷など、文献や絵図には残されていない多くの情報を得ることができた。本節では、これらの情報について整理していきたい。

①調査地における屋敷地の様相

遺構の変遷　検出された近世の遺構は、出土遺物や遺構同士の重複関係から大きく３時期に分けることができよう。

［第１期］　第１期にあたる遺構としてはＳＤ12があげられる。形成時期は正確には把握することができないが、17世紀中頃の遺物が若干出土していることから、17世紀中頃に形成された可能性がある。出土遺物からみておよそ18世紀前半に廃絶を迎えたと考えられる。また、ＳＺ３についても埋没は19世紀であるものの、ＳＤ12との関係からみて第１期から落ち込みとして存在していた可能性もある。

ＳＺ３を除けばこの時期に該当すると考えられる遺構はＳＤ12のみであり、屋敷地の様相を把握することは難しいが、ＳＤ12は屋敷地の区画施設と考えられ(1)、西側の屋敷地境は定められていた可能性がある。

［第２期］　第２期にあたる遺構はＳＫ２・６・10・20、ＳＤ19・16などである。ＳＤ13もこの時期に属すると考えられるが、次の第３期に属する可能性もある。ＳＤ12埋没後にＳＫ２が掘削されていることからみて、第１期の施設が廃絶した後の18世紀前半～中頃に形成されたとみられる。そして、出土遺物からみておよそ18世紀末頃に廃絶を迎えたと考えられる。

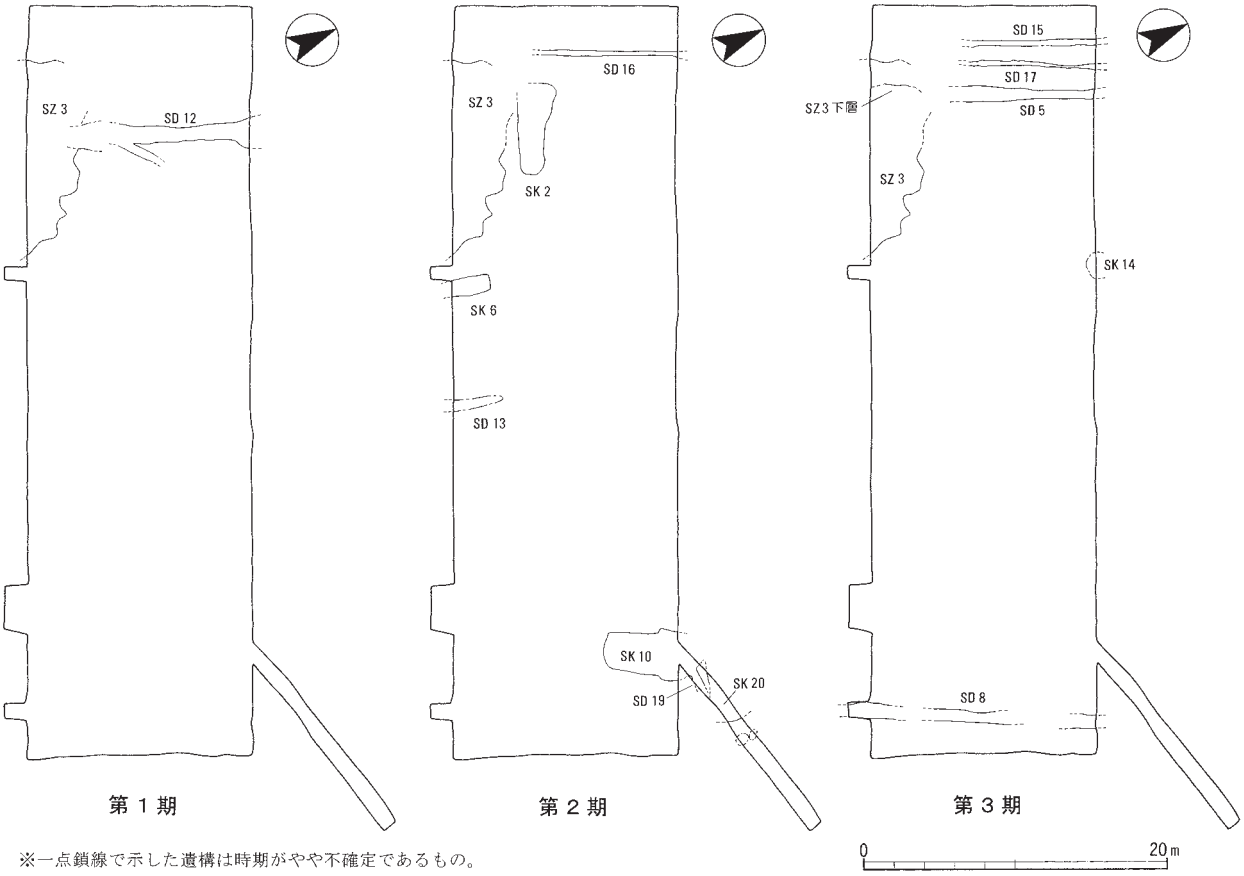
第２期は、地下式土坑など大型の施設を備えており、当該屋敷地が最も充実していた時期であるといえよう。また、ＳＤ16は出土遺物が少なく時期が判断しにくいものの、この時期に屋敷地の区画施設として機能していた可能性が高く、第１期と近い位置に屋敷地境が設けられていたと考えられる。

［第３期］　第３期にあたる遺構はＳＤ５・８・15・17、ＳＺ３下層遺構などである。ＳＫ14もこの時期に属する可能性がある。ＳＫ２の埋没後にＳＤ５が掘削されていることなどから、これらの遺構は18世紀末～19世紀初頭に形成されたとみられる。そして、出土遺物からみておよそ19世紀中頃に廃絶を迎えたと考えられる。

この時期には、ＳＤ８の掘削により、東側の屋敷地境が形成されたことが窺われる。ＳＤ８のすぐ東に並行して走る溝も調査時には近代のものと判断したが、ＳＤ８とともに東側の区画境を形成していた当該期の遺構である可能性がある。また、西側には第２期の屋敷地境と考えられるＳＤ16とほぼ同じ位置に、第３期の屋敷地の区画施設と考えられれるＳＤ15・17が形成されている。

なお、調査区南西隅にＳＺ３が存在するが、これについては不明な部分が多い。ただし、この部分に関してはＳＤ12との関係からみて第１期から落ち込み状になっていたものとみられ、第３期の末にほぼ埋まりながらも、浅い落ち込みとしての状態が近代まで続いていたものと思われる。この位置に長期間にわたってこうした落ち込みが存在したのは、第Ⅲ章第２節で述べたように南西側が地形的にやや低くなっていることが影響している可能性がある。

この第３期をもって調査地に存在した屋敷地は解体されるものとみられる。その後、敷地の一部は耕



※一点鎖線で示した遺構は時期がやや不確定であるもの。

第36図　近世遺構変遷図（1:500）

地として利用されていた可能性が高い。

屋敷地の構造　これまで、久居城下町の個々の屋敷地の構造については、藩主居館を除いてほとんど知られていなかった。今回の調査では、屋敷地区画内部の全体を調査できたわけではなく、近代以降の建物などによる遺構の破壊も著しいが、それでもある程度の屋敷地構造に関する手がかりを得ることができたといえる。

第１期から第３期の中で、最も屋敷地に関する情報が豊富な時期は第２期である。そこで、第２期の当該地における屋敷地区画の内部構造についてみておきたい。

遺構の変遷でもみたように、今回の調査地では東西に屋敷地の区画溝と考えられる遺構が検出されている。調査区中央部については大きく削平を被っていたが、残存状況のよい北壁付近でも、この東西区画境の溝と同様の遺構の痕跡は確認されなかった。したがって、調査区中央部には屋敷地の境界となるような施設がなかったものと思われる。西側についてはＳＤ16などが屋敷地境となっており、それより東側が一つの屋敷地の内部であると考えられる。

また、ＳＫ２・ＳＫ10などのように、調査区中央部のレベルよりかなり深くまで掘り込んでいる遺構が多数あるにも関わらず、調査区中央部では区画溝に限らず近世後期の遺構が全く検出されていないことも注意されよう。こうした点は、この遺構の空白部分に地面を深く掘り込むことを必要としない、家屋などの施設があったことを示しているのではなかろうか。

地下式土坑ＳＫ２は区画境付近に存在しており、屋外に設けられていたものと思われる。武家屋敷では地下式土坑は屋外に設けられることが多いという従来の指摘とも一致する(2)。ＳＫ10も地下式土坑と考えられるが、これも東よりに位置しており、屋外に設けられていた可能性がある。

また、これらの遺構は区画溝と並行あるいは直交する方向に主軸をとっている。施設の構築にあたって、屋敷地の地割り方向が意識されていたと考えてよい。

第２期の屋敷地は、家屋の痕跡こそ検出できな

かったものの、屋敷地区画の中心となる位置に家屋を設け、その外側の屋敷地境との間の空閑地に貯蔵庫等の機能を持った地下式土坑などの施設を配する構造であったものと推定される。

街路への出入り場所に関する情報は得られなかったが、ＳＫ10の位置取りや西側の区画溝が途切れないことなどをみると、街路への出入り口は調査区より北側にあった可能性が考えられる。絵図によれば、城下町計画当初から調査区の東側には南北方向の街路が設けられていたようであり、おそらくＳＫ10の北側付近にこの街路に面した出入り口が設けられていたのであろう。北東側配管部ではＳＤ８の延長が検出できなかったことからみても、こうした点が裏付けられるのではなかろうか。

②絵図との対比

以上のように、発掘調査の結果をもとに調査地における屋敷地内部の様相を復元した。では、この屋敷地の区画は、残されている絵図の地割りとはどのように対応するのであろうか。

残されている久居城下町の絵図には、久居城下町の建設計画図ともされる『久居外構要害図（久居開闢旧図）』や、明治時代中期に作られた『久居町全図』などがある。また、大正時代に刊行された『藤影記』には、「植木升安縄張」と注記されており久居城下町形成期に近い時期のものと考えられる『御家中地割図』（第37図）と、「時代不明但廃藩より少しく前」と注記されている『藩士屋敷割図』（第38図）の２つの絵図の写しが収録されている(3)。この『藤影記』に載せられている２枚の絵図には、地割りや屋敷の居住者の名称が整然と描かれており、遺存している遺構の状況ともある程度重ね合わせることができよう。

この２種類の絵図に描かれた街路に、それと対応する現在の道路などを重ね合わせることなどによって、それぞれの絵図に調査区の位置を当てはめたものが第39図である(4)。これによれば、今回調査を行った場所は、『御家中地割図』では「和田三郎右エ門」という人物の屋敷地、『藩士屋敷割図』では「平井庄兵衛」という人物の屋敷地にあたっている可能性が高い(5)。

『御家中地割図』はおそらく17世紀後半頃のものと思われるが、遺構としては第１期のものが対応する。ＳＤ12は和田三郎右エ門屋敷地の西側境界と対応するものと見られる。

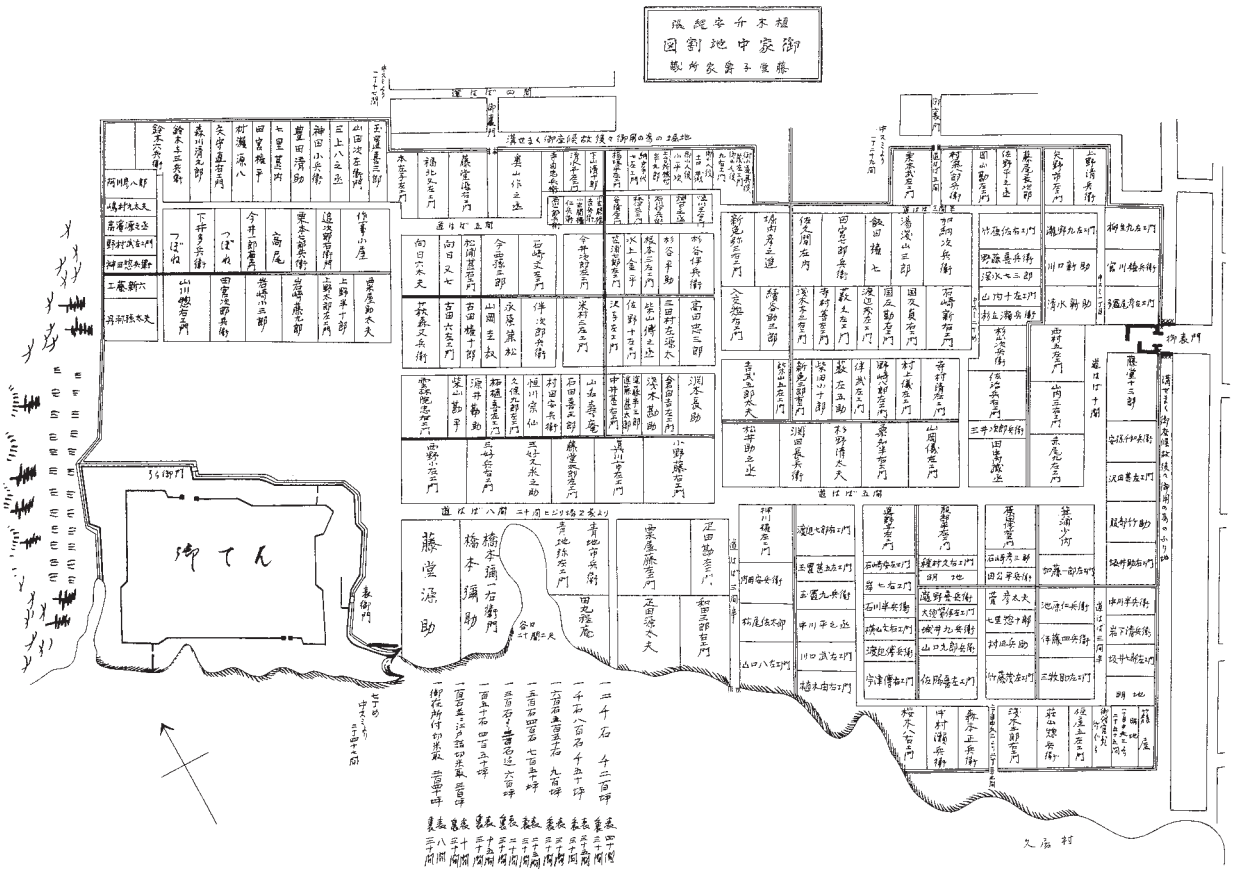
そして、『藩士屋敷割図』は19世紀中頃のものと考えられるため、第３期の遺構群がそれに対応すると考えられる。第３期の遺構には東西の屋敷地境の溝があるが、この東西の屋敷地境は幕末期の平井庄兵衛屋敷地の地割りの東西境界ラインと一致してくる可能性が高い。

ただし、両絵図からみると調査地の東側は城下町形成当初から幕末まで一貫して街路であった可能性が高い。したがって、第３期に新たにＳＤ８が設けられた原因が不明である。『御家中地割図』と『藩士屋敷割図』に描かれた東側街路を、周辺の屋敷地や街路との位置関係からよく見てみると、幕末の『藩士屋敷割図』では街路の幅がやや広くなっているようにも見ることができる。ＳＤ８の新設はこうした街路の拡幅に伴うものであった可能性も考えておく必要があるのかもしれない。

また、絵図では和田三郎右エ門屋敷地の東南部はやや不整に北側へ入り込んでいることも注目される。この部分は、実際に第Ⅲ章第２節で述べた台地端部のやや地形が落ち込んでいる部分に相当する可能性が高い。こうした台地端の屋敷地の地形的な様相と関連して、ＳＺ３が存在していると考えることもできよう。このような屋敷地東南部が不整な状況は、平井庄兵衛の屋敷地となってからも見受けられ、ＳＺ３が19世紀前半頃にも存在していたこととも対応する。

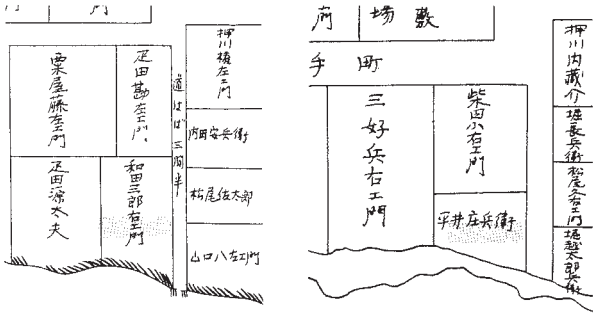
以上のように見てくると、屋敷地の地割りについては、調査によって得られた情報と『御家中地割図』・『藩士屋敷割図』の両者に描かれた城下町の様相とが比較的一致していると見ることができるのではなかろうか。また、屋敷地の居住者が和田氏から平井氏へと替わっていることは、遺構から見た場合に屋敷地に３時期の変遷が認められることと何らかの関係がある可能性も指摘できよう。

これまで、久居城下町遺跡では絵図と発掘調査の成果との比較検討は行われていなかったが、発掘調査によって絵図に残された地割りの検証が行える可



第37図　『御家中地割図』（『藤影記』より転載）

第38図　『藩士屋敷割図』（『藤影記』より転載）



：調査区

第39図　絵図・調査区位置対照図（1:2500）

能性が示唆できた点は、今回の調査の大きな成果であるといえる。

③久居城下町の形成時期と変遷

最後に、今回の調査によって得られた屋敷地の変遷に関する情報をもとに、久居城下町全体の形成時期や変遷についてもある程度考えてみたい。

形成時期　久居城下町は、寛文９年（1669年）の久居藩成立を受けて、寛文10年（1670年）に建設が開始された。城下町の建設予定地は、『勢陽五鈴遺響』という文書にも記されているように「野辺（のんべ）」と呼ばれる広野で、田畑が広がる地であったようである[6]。

城下町の中でも先に完成が急がれたのは、寛文10年に早くも久居藩主藤堂高通が入居することとなった藩主居館であろう。したがって、城下町全体の完成は、藩主居館よりは遅れたものと思われる。

しかしながら、久居城下町の設計図であるとも考えられている『御家中地割図』によれば、久居城下町全体の地割りが策定されており、城下町全体の工事も大きく遅れることなく行われたものと考えられる。この絵図では調査地近辺の屋敷地に居住者の名前が記されていることからみても、調査地近辺は藩主居館の造営に大きく遅れることなく整備が図られたものと推定されよう。今回の調査の結果を見ても、第１期の遺構は17世紀後半には存在していた可能性が高く、城下町の造成が17世紀後半には調査区近辺の地区でも開始されていたことが分かる。

ただし、遺物からみると17世紀後半に属する遺物の数量はかなり少なく、またＳＤ12以外には第１期に属する遺構は明確ではない。こうした点から見ると、調査地近辺における屋敷の完成と本格的な居住の開始は18世紀に入ってからであった可能性もあるのではなかろうか。そう考えれば、寛文年間に作成された地割図に描かれている城下町全体の形成がほぼ完遂され、居住施設などが本格的に整備されていくのは、18世紀以降のことになる可能性も出てくる。この点については、今後の久居城下町における調査例の蓄積を待って検討されるべき課題であろう。

18世紀後半の画期　今回検出された遺構のうち、ＳＫ２やＳＫ10など主要な遺構の廃絶時期が18世紀末に比定できることは、この時期に当該屋敷地に大きな変化が生じたことを示している。

この変化に際して問題となるのは、ＳＤ８の掘削時期である。ＳＤ８は屋敷地の東側境界となるものと考えられるが、先にも述べたようにＳＫ２やＳＫ10より時期が下るものである可能性が高い。このＳＤ８近辺にこの溝に先行する区画施設が認めがたいことを考慮すれば、18世紀末に屋敷地の区割りにも変化があった可能性が指摘できる。これらのことからみれば、18世紀末に屋敷地の構造に大きな変化が生じたのであり、そこには住人の交替や屋敷の建て替えなどがあったことが想定されよう。

これが久居城下町全体における動態を反映しているのかどうかは不明である。しかしながら、城下町の一部の状況であるとはいえ、屋敷地の区割りにも変化が生じている可能性が指摘できるのであり、何らかの契機によって、住人の配置換えなどを伴う城下町の再編が行われた可能性を考えておく必要もあ

年号（西暦）	主な出来事
寛文９（1669）年	津藩より久居藩分藩 藤堂高通が初代藩主に就く
寛文10（1670）年	藩主居館・城下町造営開始
元禄10（1697）年	高堅が２代目藩主に就く
宝永２（1705）年	三千石を加領し藩領が五万三千石になる
寛政２（1790）年	高兌が12代目藩主に就く
寛政９（1797）年	義倉制度の開始
文化１（1804）年	高兌による藩政改革（文化の改革）
文政４（1821）年	城下町に大火（久居焼け）
文政６（1823）年	不作で藩政困窮、知行取を停止
天保７（1836）年	天保の大飢饉
弘化４（1847）年	藩主居館焼失
安政１（1854）年	安政の大地震
文久３（1863）年	高邦が16代目藩主に就く 天誅組討伐のために出兵
明治２（1869）年	廃藩置県により久居県となる

第９表　久居藩沿革略表

るのではなかろうか。

城下町の変容　最終的に屋敷地と関わると考えられる遺構は、ＳＫ２を一部破壊して作られているＳＤ５やＳＤ８など第３期の遺構である。これらは19世紀中頃に廃絶したと考えられる。

この時期より後には、それまで存在していた屋敷地境の区画溝に代わるような境界構造物が設置されたような痕跡は確認しがたい。地上構造物であったため遺存していないという見方もできるが、どちらかといえば土地空間の利用状況に変化が生じたものとみたい。近代にはＳＥ４が設けられており、またＳＤ１最上層に耕作土と思われる土層が確認できることから、それまでの屋敷地としての区画の設定が解消されるとともに、家屋の移動や、耕作地への転換などがなされた可能性も考えられよう。

19世紀中頃のこうした屋敷地の解体は、城下町としての基本的な構造が変化しつつあることを示しているものと思われる。城下町内における耕地や荒れ地の存在は、城下町的な短冊形の屋敷地区画を基本とする地割りが崩壊しつつあったことも暗に示しているのではなかろうか。

こうした変化の原因は不明であるが、明治維新とそれに伴う近代化の動向によって、城下町としての空間利用形態が急激に崩壊していったことが原因となったとも考えられよう(7)。あるいは、今回の調査ではその痕跡を確認することはできなかったが、「久居焼け」として記録に残る文政４年（1821年）の大火や、安政元年（1854年）の地震などの災害も一因であったかもしれない。

註

（1）成田涼子2001「旗本・御家人屋敷の発掘」『図説　江戸考古学研究事典』　柏書房

（2）小林克1986「地下室考」『物質文化』47　物質文化研究会、古泉弘2001「穴蔵の位置」『図説　江戸考古学研究事典』　柏書房

（3）梅原三千1922『藤影記』

（4）絵図に描かれた街路の長さや谷の位置などを手がかりとして現在の都市計画図と絵図を重ね合わせることによって、調査区の位置を絵図中に示した。絵図が略図的なものであるため、調査区と屋敷地区画との位置関係に若干のずれはあると思われるが、大きくずれることはないであろう。

（5）樋田清砂によって作成された図でも調査地が平井庄兵衛の屋敷地にあたっていることが確認できる。
樋田清砂1991「久居陣屋」『定本・三重県の城』　郷土出版社

（6）久居市史編纂委員会1972『久居市史』上巻　久居市役所総務課

（7）玉井哲雄1997「近世城下町の都市空間とその特質－研究の視点と展望－」『関西近世考古学研究』Ⅴ　関西近世考古学研究会

第３節　久居城下町遺跡出土の近世遺物

今回の発掘調査では、多くの近世の遺物が出土した。なかでも、陶磁器や土師質土器についてはある程度まとまった量の資料を得ることができた。

伊勢地域の近世の陶磁器や土師質土器については、四日市市四日市代官所跡や桑名市桑名城下町遺跡など、伊勢地域北部でまとまった資料が報告されているが、伊勢地域中部から南部にかけての地域では、まとまった資料の報告はまだ少ない。したがって、久居城下町遺跡で出土した資料は当該地域における陶磁器や土師質土器などの流通状況を知る上で、良好な資料となりうるものと思われる。

本節では、特にまとまった資料が出土しているＳＫ２やＳＫ10などの資料を中心として、出土陶磁器類・土師質土器類の時期や器種組成、生産地、その他の特徴などについて整理しておきたい。

①ＳＫ２出土陶磁器類について

ＳＫ２は廃絶時に廃棄土坑として利用されたと考えられ、内部からは近世後期の遺物が多量に出土している。これらの遺物は、良好な一括資料であり、当時の生活の様相や、陶磁器の流通について考える上で貴重な資料となろう。ここでは、ＳＫ２出土の陶磁器類について器種・時期・生産地(1)といった点から資料の整理を行い、データとして提示しておきたい(2)。

時期　ＳＫ２出土資料は、土層の堆積状況や遺物の出土状況などからみてほぼ同時期に廃棄された資料であるとみることができるが、廃棄という行為の性

格上、出土した陶磁器にはやや時期幅がある。中には美濃産汁次（第26図70）のように、17世紀後半代まで遡るものもあるが、17世紀にまで遡ると考えられる個体はこの汁次のみで、ほとんどの陶磁器は18世紀代のものとみられ、中でも18世紀後半にその中心があるものと思われる。したがって、ここで提示するＳＫ２の陶磁器に関する各種のデータは、主に18世紀後半頃の様相を示していると考えてよいであろう。

種別　ＳＫ２から出土した遺物全体の中での磁器・陶器・土師質土器の組成は、磁器41％、陶器44％、土師質土器15％である[3]。土師質土器よりも、陶磁器の出土量の方がはるかに多い。

陶磁器に限ってみれば、磁器が全体の40％強を占めており、陶器も同じく40％強を占めるていることから、両者が同じくらいの数量出土しているといえる。磁器の器種は碗などに限られあまり多くないことを考えれば、磁器が占める率が比較的高いとみることができよう。

器種　磁器では、碗類が過半数を占める。次いで小坏が多く、皿・仏餉具はごく少量である。磁器は陶磁器全体のほぼ半数を占めており、このことはＳＫ２出土陶磁器類に占める碗類の多さを示している。陶器についても碗類が多く、その他には汁次や水注、擂鉢などが目立つ。陶器・磁器ともに皿類が少ないことが特徴的である。

磁器・陶器ともに皿類が少量であるものの、内容的には碗類・汁次・水注などの供膳具、擂鉢・行平鍋などの調理具があり、それに土師質土器の焙烙や小皿などが加わる点を見れば、ごく日常的な生活の様相を反映した組成といえよう。儀礼などに使用した道具類を一括廃棄したような様相は特には認められない。

産地　磁器については、器形や文様、銘款、胎土などからみて、すべてが肥前系であると考えられる。遺構の廃絶時期が、瀬戸において磁器生産が開始される19世紀初頭以前であるために、瀬戸産の磁器が含まれないのであろう。

陶器においては、全体を見渡すと瀬戸・美濃産が大部分を占めている（第40図）。ただし、器種ごとに見た場合には、器種によって産地が異なることが明瞭である（第10表）。擂鉢では瀬戸産が多く、水注・汁次では美濃産、片口は瀬戸産、甕は常滑産が多い。

碗類では美濃・肥前産が多いが、そこに信楽産なども少量加わる。碗のように多くの量を必要とする器種については、陶磁器全体において多数派を占める産地の製品が主体を占める一方で、少数派の産地のものも加わり多彩な内容となっていることが窺われる。

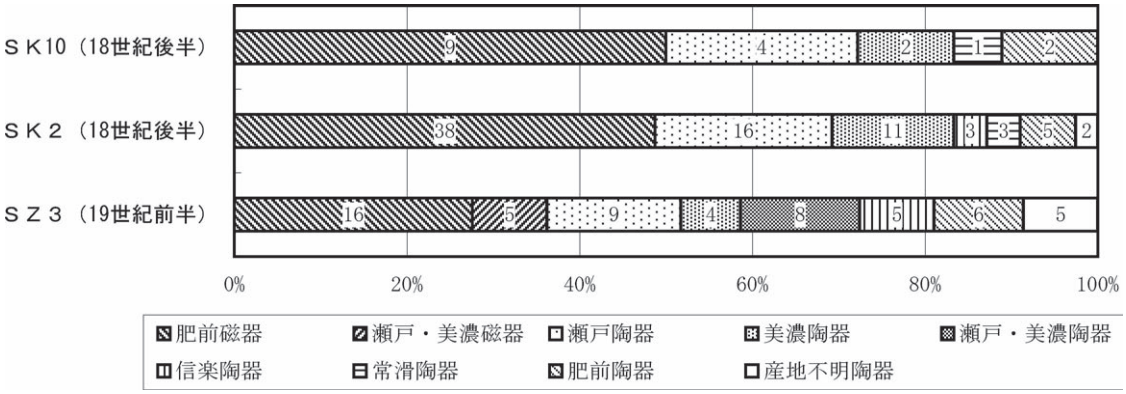
②出土陶磁器・土師質土器の特徴

ＳＫ２出土資料についてのデータを提示し、それについて述べてきた。同時期の遺構であるＳＫ10も産地組成や磁器・陶器の比率などについてほぼ同様の結果となっており（第40図）、このＳＫ２の様相は当屋敷地の18世紀後半の普遍的様相を示している可能性が高い。次に、このＳＫ２の資料分析の成果や、ＳＫ10などその他の出土資料の様相から、当該地域における陶磁器の流通状況や生活における陶磁器のあり方などについて述べたい。

陶磁器の流通の様相　磁器は、19世紀に入るまで肥前系で占められる。調査区全体で出土した磁器についても、ほとんどが肥前系磁器である。ただし、少量ながら瀬戸産磁器も出土している。

瀬戸産磁器としては、19世紀前半の端反碗などが出土しており、19世紀初頭に瀬戸で磁器生産が始まってからまもなく、久居城下町にも瀬戸産磁器が流通し始めたことが窺われる。ただし、19世紀前半を中心とするＳＺ３出土遺物の組成を見ても、依然として肥前系磁器が瀬戸・美濃産磁器にくらべて多く（第40図）、19世紀前半においてはまだ肥前系が優位であったものと思われる。同様の傾向は他の遺跡でも認められる。津市六大Ｂ遺跡では18・19世紀代の資料が多く出土しているが、19世紀前半には瀬戸産磁器も次第に増加し、19世紀中頃には瀬戸産磁器が磁器の主流を占めるようになっていく様相が窺われる[4]。

ただし、19世紀前半になると磁器の占める比率が下がることには注意が必要である（第40図）。磁器の数量自体が減るというよりは、陶器類の器種や数量が相対的に増加していると見ることができる。



第40図　ＳＫ２・ＳＫ10・ＳＺ３出土陶磁器産地

		器種																
		碗	鉢	片口	汁次	水注	行平	擂鉢	徳利	有耳壺	壺蓋	蓋	半胴	甕	筒形香炉	灯明皿	不明	計
産地	瀬戸	1		4				8			1		1		1			16
	美濃	4			2	1			1	1						2		11
	信楽	1										1					1	3
	常滑													3				3
	肥前	4	1															5
	不明						1		1									2

第10表　ＳＫ２出土陶器産地・器種一覧表

陶器については、ＳＫ２の資料から、18世紀代には器種ごとにほぼ決まった産地のものが流通していた様相が明瞭に把握できた。特に、擂鉢や灯明皿、片口、甕など、用途がある程度限定されるものについてはその傾向が強い。

擂鉢は、ＳＫ10から常滑産と考えられる擂鉢も出土しているものの、調査区全体で出土したものを概観しても瀬戸産が圧倒的多数である。19世紀に入ってからもＳＺ３出土遺物などには瀬戸産の擂鉢が多く見られ、擂鉢は前時期を通じて瀬戸産のものが独占的であることが窺われる。灯明皿・受付き灯明皿についても、陶器質のものについては出土したもののほとんどが美濃産で占められている。

こうした産地が決まっている器種に対して、碗類などは多くの産地のものが混じる。ＳＫ２の資料で見た場合、18世紀代には瀬戸産と肥前産が優位であったと思われるが、調査区全体で見た場合、信楽産なども多い。碗類には丸碗のほか腰錆茶碗や天目茶碗なども含むため、細かく見ていけば碗類の中でも種類によって特定の産地のものが持ち込まれている場合も多いであろう。

こうした点から見れば、久居城下町で流通していた陶器類は、器種ごとに決まった生産地のものが主体的に運び込まれていた可能性が高い。こうした流通状況がどのような背景に基づくものかは不明であるが、今後は周辺の遺跡や久居城下町の別地点などにおける状況とも比較しつつ、当該地域の陶磁器流通の様相を把握していくことが必要であろう。

伊勢地域の焙烙　今回の調査では、多数の焙烙が出土した。これらの焙烙のうち土師質のものについては、口縁部形態が中世後期の南伊勢系土師器[5]と呼ばれる一群の土師器の鍋とかなり類似する。外面にケズリを施すことによって器壁を薄く仕上げる点も、南伊勢系土師器鍋と共通する。

これらの焙烙は、中世の南伊勢系土師器鍋に系譜を持つものと考えられる[6]。中世後期の南伊勢系土師器は、伊勢地域南部にその分布の中心があり、生産もその地域内部の有尓郷（明和町・玉城町）付近で行われていたと考えられている[7]。南伊勢系土師器鍋に系譜を持つ焙烙についても、明和町外山遺跡の調査成果から有尓郷で生産されていたことが指摘されている[8]。

今回の調査で出土した焙烙は、19世紀代のものと思われる瓦質の焙烙１点を除き、すべてこの南伊勢系土師器鍋に系譜を持つ焙烙である。これらの焙烙はほとんどが18世紀代のものと思われる。したがって、18世紀代の久居城下町では、この形態の焙烙が一般的に流通し、使用されていたものと考えられる。久居城下町のような近世城下町の成立は、そこでの焙烙の集中的な消費という状況をもたらした可能性が想定される。では、その結果として、中世後期の南伊勢系土師器の段階とは生産・流通の様相は変化したのであろうか。ここでは、中世の南伊勢系土師器鍋に系譜を持つ近世の焙烙の分布ついて概観することで、わずかながらこうした問題に関わる基礎的な情報の整理を行っておきたい。

まず、久居城下町遺跡の他に、久居城下町遺跡から10㎞ほど北に位置する津市六大Ｂ遺跡では、18世紀から19世紀前半頃の陶磁器に伴って、南伊勢系土師器鍋に系譜を持つ焙烙が多数出土している(9)。また、津市安濃津遺跡群でも出土が確認できる(10)。したがって、安濃川流域から雲出川流域にかけての地域は、南伊勢系土師器鍋に系譜を持つ焙烙が使用されていた地域であったとみてよい。

一方、尾張地域では主に内耳が付くタイプの焙烙が使用されている。伊勢地域北部の四日市市四日市代官所跡から出土している焙烙は、尾張地域のものと同様に口縁部が内湾し、内耳が付く形態のものである(11)。この地域付近までは、尾張地域と同様の焙烙を使用する地域であるとみられる。

四日市代官所跡と六大Ｂ遺跡との間の地域の様相は、良好な資料が少ないために不明であるが、亀山市関宿跡では、17～18世紀のものと見られる南伊勢系土師器鍋に系譜を持つ焙烙が出土している(12)。しかしながら、同じく亀山市の亀山城跡では、16～17世紀代のものとみられる焙烙が出土しているものの南伊勢系土師器ではなく、中北勢系土師器(13)との関連が窺われる形態のものである(14)。したがって、鈴鹿川流域付近が南伊勢系土師器鍋に系譜を持つ焙烙が多く使用される地域の北側境界線となっているものと推定される。

久居城下町遺跡より南側の地域では、生産地と思われる外山遺跡が存在しているほか、消費地としても確認できた範囲では、時期は不詳ながら松阪市西野田遺跡(15)や伊勢市離宮院跡などで南伊勢系土師器鍋に系譜を持つ焙烙が出土している(16)。宮川流域までは南伊勢系土師器鍋に系譜を持つ焙烙が主に使用されていた地域とみてよいであろう。

さらに南の志摩地域では、志摩市浄土近世墓地で18世紀代と思われる南伊勢系土師器鍋に系譜を持つ焙烙が出土している。ただし、中心を占めるのは口縁部が内湾し内耳が付く焙烙である(17)。したがって、伊勢地域と志摩地域の境界あたりが、南伊勢系土師器鍋に系譜を持つ焙烙が多く使用される地域の南側境界線となっているものと推定される。

また、中世後期において伊賀地域は南伊勢系土師器鍋が濃密に分布する地域であるが、近世においてもやはり南伊勢系土師器鍋に系譜を持つ焙烙が伊賀市上野城下町遺跡で多数出土している(18)。伊賀地域においてはこうした形態の焙烙が主に使用されていた可能性が高い。

以上の事例から、南伊勢系土師器鍋に系譜を持つ焙烙は、18世紀頃においても中世後期同様に伊勢地域中・南部や伊賀地域を中心として分布し、津藩・久居藩の城下町でもこうした焙烙が多く流通していたものと考えられる。形態や生産地のみならず、分布圏・流通圏に関しても、中世後期段階から18世紀段階まで大きな変化は明確には捉えられないようである(19)。こうした中世以来の様相に変化が生じるのは19世紀以降のことであろうか。久居城下町遺跡でもＳＺ３から１点出土している瓦質の焙烙（第31図159）は、19世紀に入ってから出現し、安濃川から雲出川にかけての地域にまとまった分布を示すことが指摘されている(20)。こうした動向が、当該地域における土製の鍋・焙烙の生産・流通の変化の一端として捉えられる可能性があろう。

なお、南伊勢系土師器鍋に系譜を持つ焙烙は江戸の津藩藤堂家下屋敷にあたる東京都染井遺跡加賀美家地区でも出土している(21)。伊勢地域産の焙烙は、それを使用する人の往来などに伴って遠くまで運ばれる場合もわずかながらあったようである。

近世の焙烙に関する検討は、江戸・名古屋・大坂などの大規模城下町やその周辺地域を中心に研究が進められている(22)。そのなかでは、器形や製作技

法、胎土などの問題に始まり、編年や地域性、生産・流通、工人・生産技術の地域間交流などの問題が論点としてあげられている。また、中世後期から近世への土器の生産・流通の変化という点についても、検討課題の一つとなっている。伊勢地域でも、今後こうした点について検討していく必要があるといえよう。

註

（1）陶磁器類の器種・産地・編年などについて参照した文献等は、第Ⅵ章第２節の註に記している。

（2）陶磁器の数量把握に際しては、個体識別法をとっている。陶磁器は釉薬や文様などによって個体の識別が破片でもかなり可能であることと、ＳＫ２出土資料は個体数の検討・把握が可能な程度の量であったため、この方法を採用した。小片についてはカウントからはずしているほか、文様などによる個体識別が難しい底部片については、底部全体の1/2以上が遺存する個体のみカウントした。

（3）この組成比率についても個体識別法によって算出しているが、土師質土器については個体の識別が難しく、正確な数量を示すことは困難である。ただし、カウントした数と実数が大きく異なることはないと思われ、ここで示した組成比率についても大まかな傾向は示すことができているものと考えられる。

（4）三重県埋蔵文化財センター1999『六大Ｂ遺跡（Ａ地区）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告115-10

（5）伊藤裕偉1992「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」『研究紀要』第１号　三重県埋蔵文化財センター

（6）伊藤裕偉1992、伊藤裕偉1996「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」『鍋と甕そのデザイン』第４回考古学フォーラム　東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

（7）伊藤裕偉1992

（8）外山遺跡では、ススなど使用痕の認められない焙烙が多量に出土している。これらの焙烙は、いずれも南伊勢系土師器鍋に系譜を持つと思われる器形のものである。

三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター1990『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第１分冊－』三重県埋蔵文化財調査報告92-1、小林秀1992「中世後期における土器工人集団の一形態－伊勢国有尓郷を素材として－」『研究紀要』第１号　三重県埋蔵文化財センター

（9）三重県埋蔵文化財センター1999

(10) 三重県埋蔵文化財センター1997『安濃津』三重県埋蔵文化財調査報告147

(11) 四日市市教育委員会2000『四日市代官所跡』四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書25

(12) 関町教育委員会1997『関宿跡（中町地区）発掘調査報告』関町埋蔵文化財調査報告12

(13) 伊藤裕偉1999「中世後期の中北勢系土師器群に関する覚書」『研究紀要』第８号　三重県埋蔵文化財センター

(14) 亀山市教育委員会1999『伊勢亀山城跡発掘調査報告書Ⅲ』亀山市文化財調査報告20

(15) 三重県埋蔵文化財センターによって平成19年度に行われた第３次調査で出土している。

(16) 小俣町教育委員会2000『離宮院跡（法楽町地区）発掘調査報告』小俣町文化財調査報告Ⅱ

(17) 三重県埋蔵文化財センター2006『浄土近世墓地調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告265

(18) 上野市教育委員会・上野市遺跡調査会2000『上野城跡（２次）発掘調査報告』上野市文化財調査報告66、三重県埋蔵文化財センター2006『上野城下町遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告273

(19) 本書での分布域の概観からは変化を捉えることができなかったが、さらに詳細な検討を行うことによって、中世と近世との間の差異が明瞭になってくる可能性もある。

(20) 本堂弘之1999「津市周辺出土の瓦質焙烙について」『研究紀要』第８号　三重県埋蔵文化財センター

(21) 鈴木裕子2000「江戸出土の伊勢湾周辺の土器－17・18世紀を中心に－」『江戸在地系土器の研究』Ⅳ　江戸在地系土器研究会

(22) 近世焙烙の研究については以下の文献を主として参考にした。

難波洋三1988「市坂の土器作り」『京都大学埋蔵文化財研究センター紀要』Ⅶ　京都大学埋蔵文化財研究センター、佐々木彰1990「近世焙烙の研究－大聖寺藩上屋敷跡出土資料を中心に－」『物質文化』53　物質文化研究会、藤尾慎一郎1991「佐倉と江戸－近世の瓦質・土師質土器からみた地域性－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第36集　国立歴史民俗博物館、金子健一1996「尾張・三河地方のホウロク」『鍋と甕そのデザイン』第４回東海考古学フォーラム　東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会、両角まり1996「内耳鍋から焙烙へ－近世江戸在地系焙烙の成立－」『考古学研究』第42巻第４号　考古学研究会

第４節　結語

今回の東鷹跡古墳と久居城下町の発掘調査は、当該地域における歴史像に多くの新しい知見をもたらしたといえる。

東鷹跡古墳は、大きく削平を被っているとはいえ、この古墳の発見がもたらした成果は大きい。雲出川下流域北岸一帯の古墳時代後期の社会像は、当該地域の中でも有力な勢力によって築造されたとみられる東鷹跡古墳の発見によって変更を迫られることとなったといえよう。

そして、久居城下町に関する遺構・遺物のまとまった検出は、久居城下町の実態解明に大きく寄与することとなった。久居城下町の構造や、そこでの生活、藩による支配などに関する様相は、これまでにも絵図や古記録によってある程度知られていたが、今回の発掘調査によってこれらの記録が裏付けられた部分もあり、逆に再考の必要性が生じた部分もあるといえよう。また、陶磁器の流通状況など、記録には詳細に残ることのなかった事柄についても多くの情報を得ることができた。

久居城下町の発掘調査による実態解明は、まだ緒についたばかりである。全域が市街地化している現状では大規模な発掘調査を行う機会はほとんどないであろうが、たとえ小規模な調査であってもその成果の積み重ねが、久居城下町の様相の解明につながっていくものと思われる。

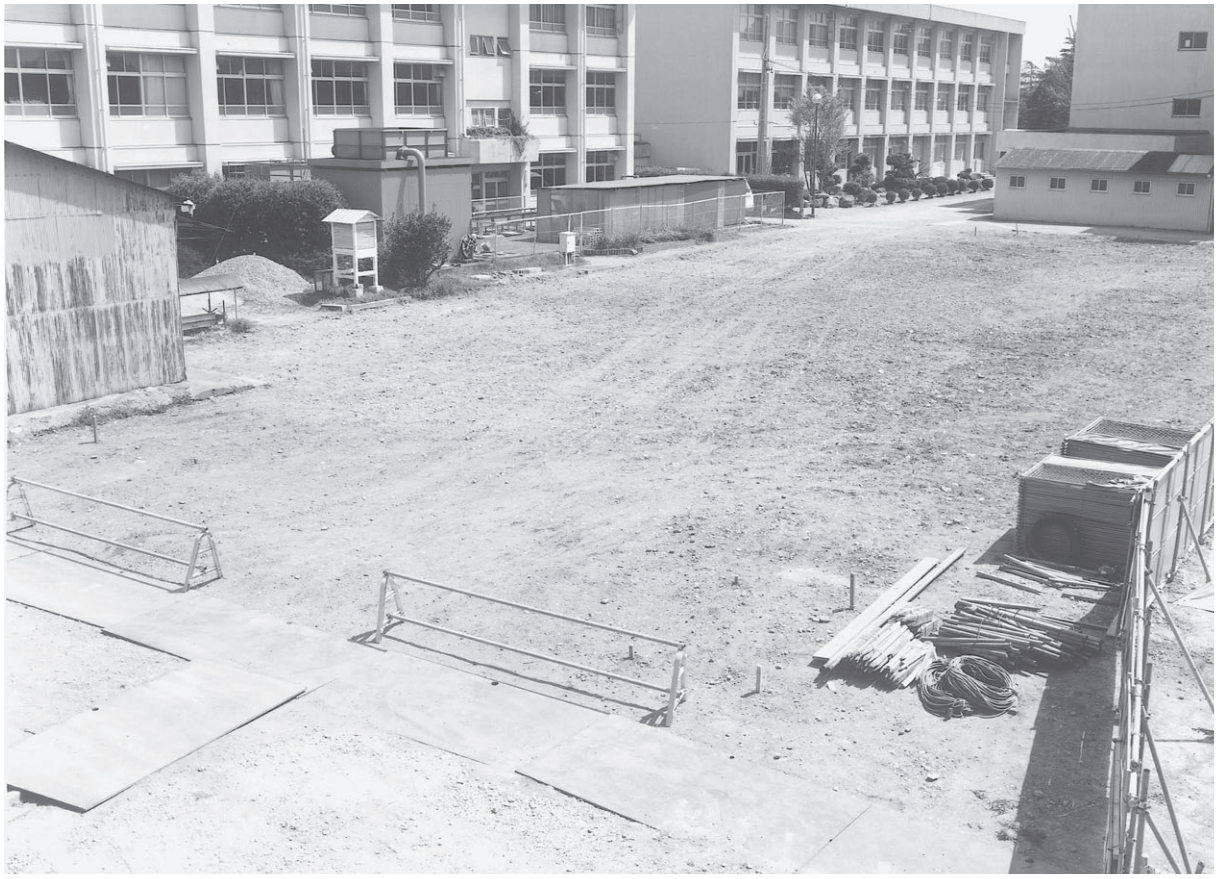
現在、旧久居陣屋・久居城下町の中には複数の教育施設が存在しているが、こうした景観は明治時代における政府の廃城方針と学校設立政策とが合致した結果の建物利用とも関係があるといえ(1)、久居城下町の存在は現在の町並みにも大きく影響している。また、旧久居市によって1972年に刊行された『久居市史』の上巻では久居藩や久居陣屋、久居城下町についての記述に半数を超えるページを割いていたり(2)、近年まで幕末期の家屋が一部残されていたりするなど、地域において久居陣屋や久居城下町は比較的身近に感じられる存在でもあろう。こうしてみると、地域史上における久居陣屋および久居城下町の存在感には大きなものがあるといえる。久居城下町遺跡における埋蔵文化財の発掘調査による成果が、こうした地域史のさらなる充実につながっていけば幸いである。

註

（1）平井誠2002「明治期における廃城の変遷と地域動向－愛媛県内の城郭・陣屋を例として－」『研究紀要』第７号　愛媛県歴史文化博物館

（2）久居市史編纂委員会1972『久居市史』上巻　久居市役所総務課

写 真 図 版



調査前状況（西から）

調査区全景（西から）

写真図版２

ＳＤ１（北から）

ＳＤ１土層断面

ＳＫ７・14（南から）

ＳＤ９土層断面

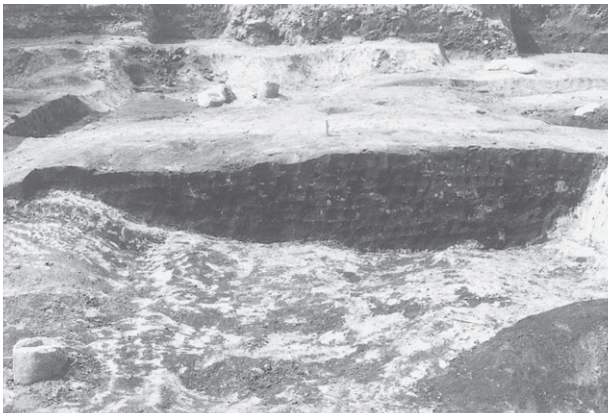
ＳＤ９（西から）

ＳＤ９東側遺物集中部

ＳＤ９西側遺物集中部

ＳＺ18断ち割り

ＳＫ11（北から）



ＳＫ11土層断面

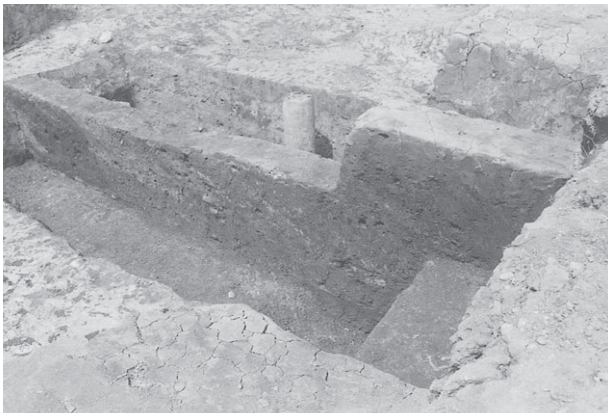
ＳＫ２土層断面

ＳＫ２遺物出土状況

ＳＫ２（東から）

写真図版４

ＳＫ10（北東から）



ＳＫ10土層断面

ＳＫ６（北から）

ＳＤ５（南から）

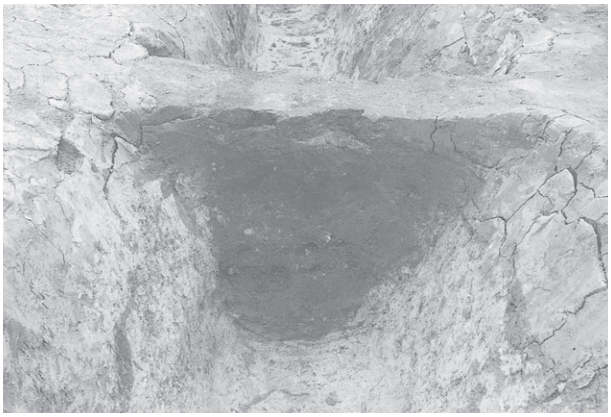
ＳＤ５土層断面

ＳＤ15・16・17（南から）

ＳＤ８（北から）

ＳＤ12（南から）

写真図版６



ＳＤ12土層断面

ＳＤ13（北から）

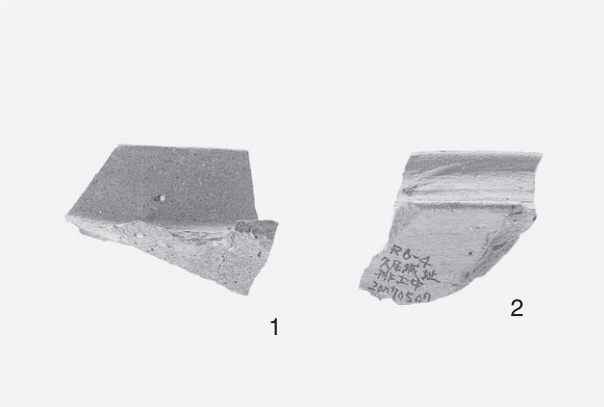
ＳＺ３断ち割り

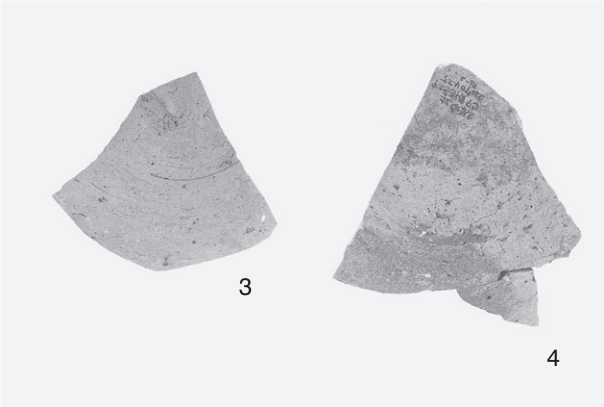
作業風景

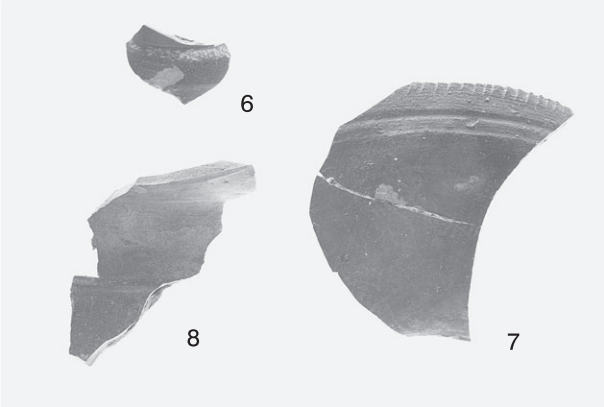
北東側配管部（東から）

東配管調査区（北から）

新農業土木棟

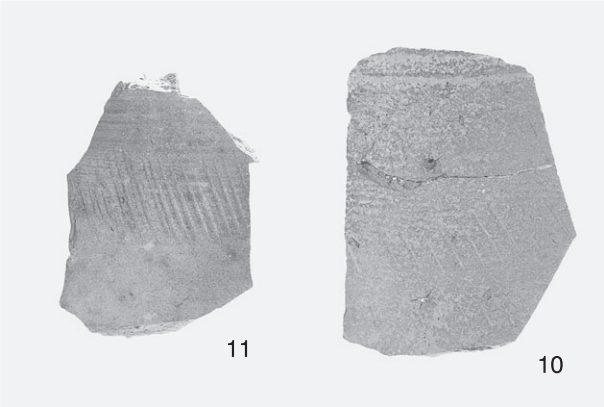


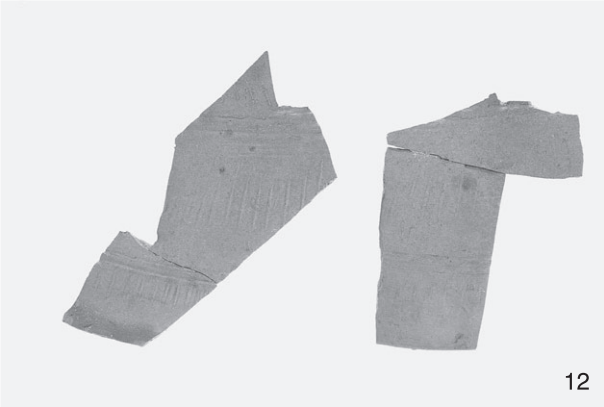




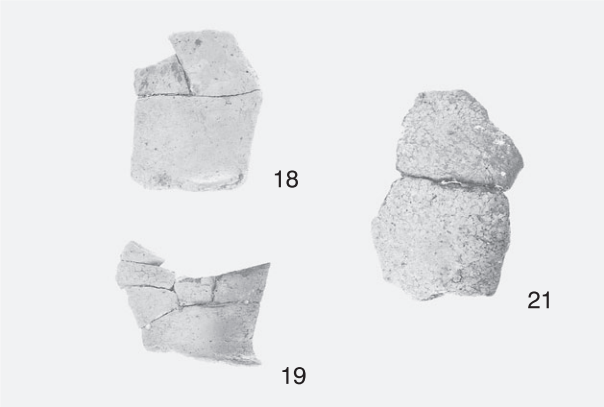
古墳時代遺物①

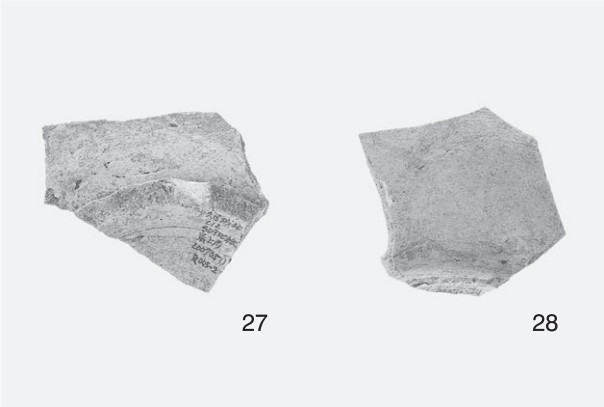
写真図版８

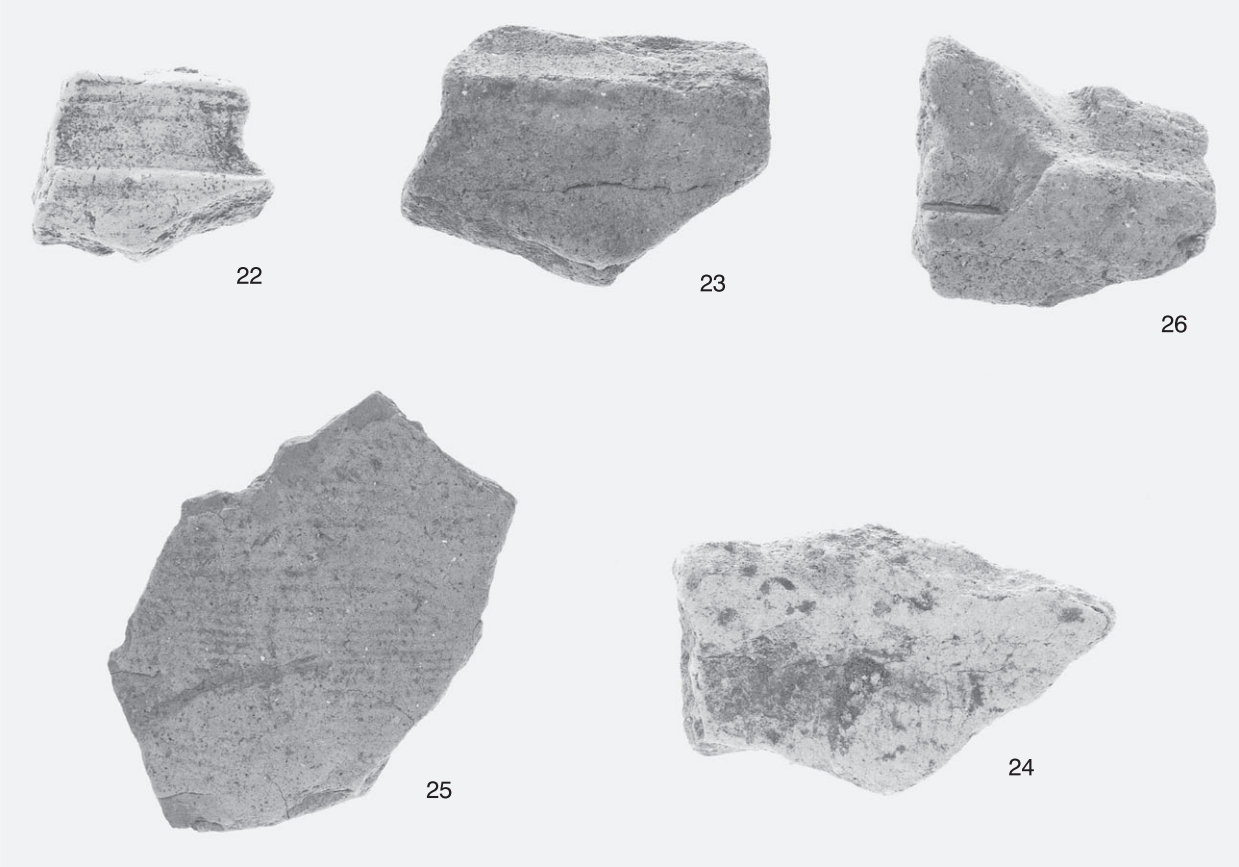




古墳時代遺物②







古墳時代遺物③・中世遺物

写真図版10

31

39

41

45

46

48

49

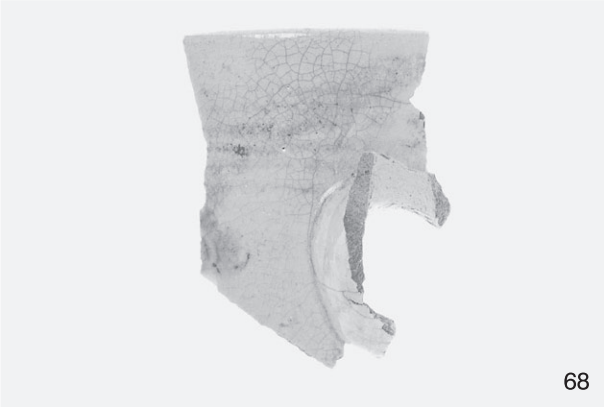
53

近世遺物①

54

55

59


68

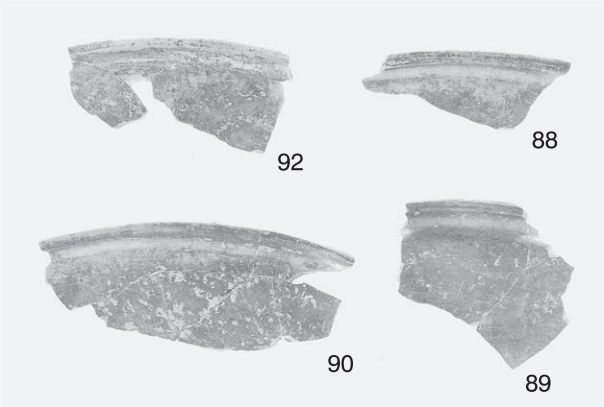
69

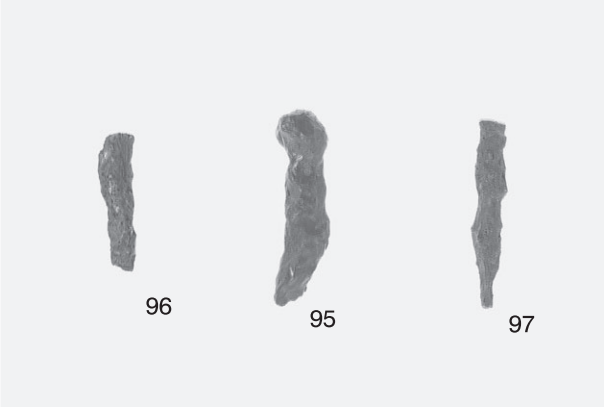
70

71

73

近世遺物②





近世遺物③

107

108

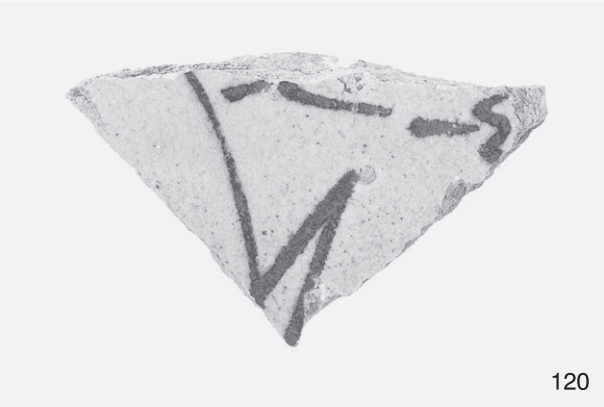
109

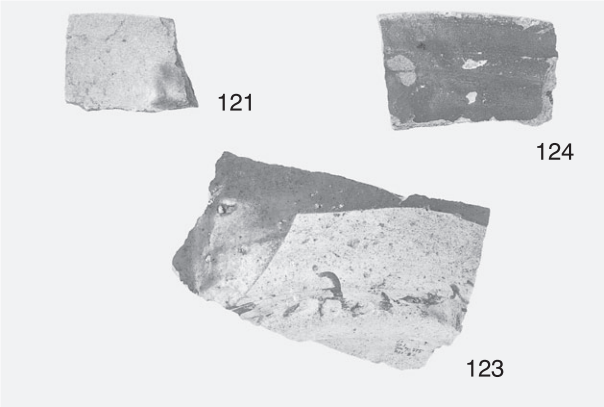
114

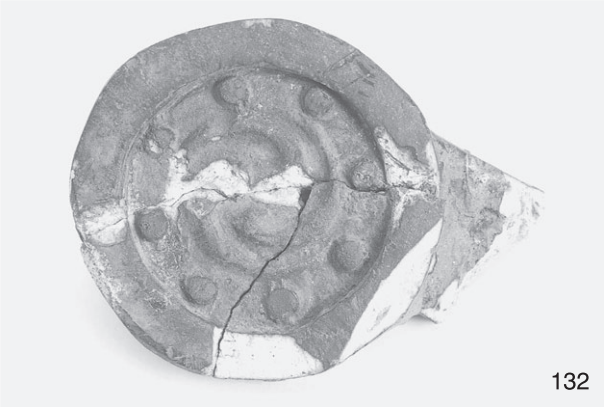
116

近世遺物④

写真図版14


120


121
124
123


132

125

130

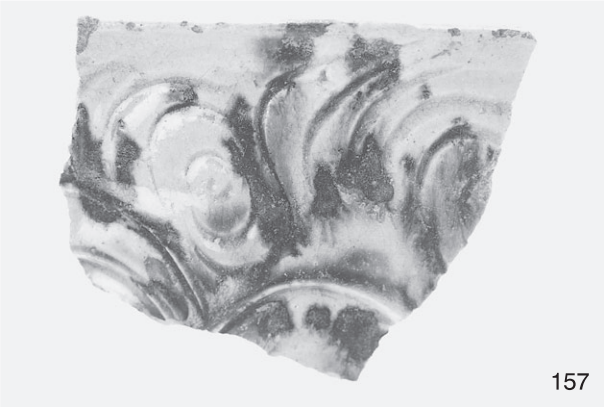
133

134

136

144

近世遺物⑤


157

159

164

174

176

175

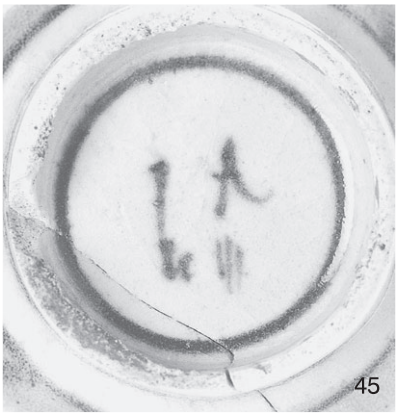
179

180

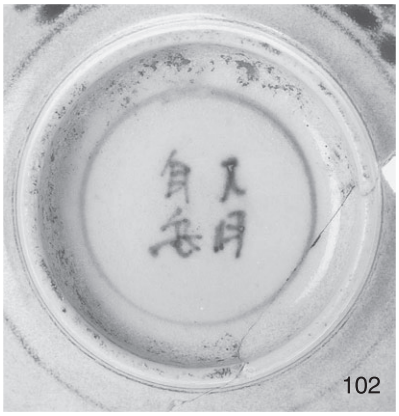
近世遺物⑥

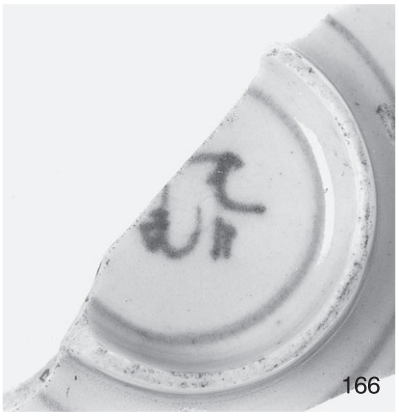
写真図版16

141


45

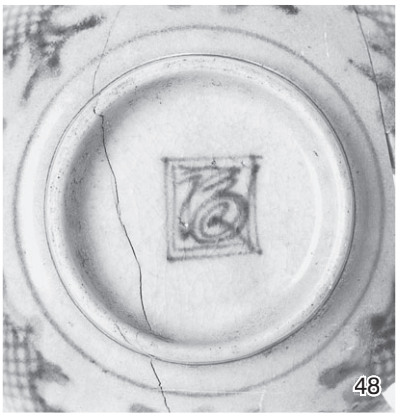
46

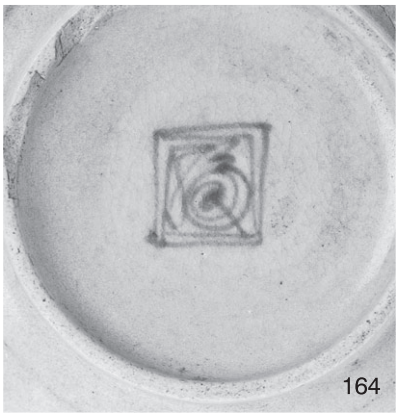

102


166

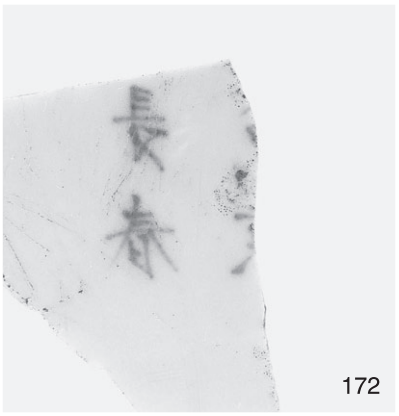
167

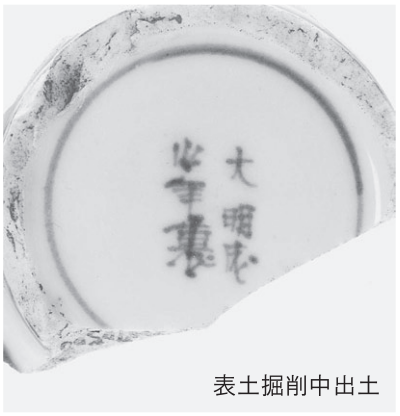
47


48


164

165


172


表土掘削中出土

近世磁器見込み文様・銘款

報告書抄録

ふ り が な	ひさいじょうかまちいせき・ひがしたかとこふん
書　　名	久居城下町遺跡・東鷹跡古墳
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	300
編 著 者 名	長谷川哲也・石井智大
編 集 機 関	三重県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL0596-52-1732
発行年月日	2008年10月10日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
久居城下町遺跡（ひさいじょうかまちいせき）	津市久居東鷹跡町（つしひさいひがしたかとちょう）	201	b 154	34° 40′ 24″	136° 27′ 53″	2007.04.02 ～ 2007.06.20	736	平成19年度久居農林高校特別教室棟改築工事
東鷹跡古墳（ひがしたかとこふん）	同上	201	b 232	34° 40′ 20″	136° 27′ 53″	同上	同上	同上

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特 記 事 項
久居城下町遺跡	城館跡	近世	地下式土坑 土坑 溝	陶器・磁器・土師質土器・瓦・土製品・鉄釘・銅製品（45.0kg）	近世城下町の屋敷地の様相を把握
東鷹跡古墳	古　墳	古墳・中世	周溝	須恵器・土師器・埴輪・山茶碗（9.3kg）	大型の後期古墳か。装飾付須恵器が出土

要約

久居城下町遺跡では、近世城下町の武家屋敷部分の調査を行った。発掘の結果、絵図とも合致するような屋敷地の区割りの状況が判明したほか、地下室とも考えられる遺構の検出など、屋敷地内の空間利用に関わる情報や、久居城下町の形成過程に関わる知見を得ることができた。また、遺構内からのまとまった陶磁器の出土によって、当該地域の近世陶磁器の流通状況に関する良好な資料を得ることができた。

東鷹跡古墳は従来知られていなかった大型の後期古墳と考えられ、当該地域の古墳時代後期の状況を考える上で一石を投じる発見となった。また、周溝から出土した装飾付須恵器は三重県下では類例が少なく、貴重な資料である。

三重県埋蔵文化財調査報告300

久居城下町遺跡・東鷹跡古墳

2008年10月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　株式会社アイブレーン